そはわれの過ごせし時ぞ！

ながあるじのもとに
數多きをとめ人妻
そがほかに興ある人の
みやびたる團欒の中に
過ごしたる幸ある五日！

アルバムの最後の頁には――詩の代りに、――胃病や痙攣ばかりでなく――いやはや！――蛔蟲の處方まで書いてあつた。

スボーチェフ夫婦は正十二時に食事をしたが、料理はみんな昔風のものばかりで、チーズケーク や、胡瓜のスープや、キャベジの鹽から汁や、ごつた汁や、即席プディングや、卵パンや、寒天や、煎じ汁や、さふらんで味をつけた鳥の卷き燒きや、蜜入りのカルタルトなどである。食事に夫婦そろつて一休みするが、一時間より餘計に過ごすことはない。目を醒ますと、また二人さし向かひに坐つて、黑苺の汁を飲む。時によると、『四十の智惠』と呼びなされたソーダ水を飲む事もあるが、それは大低いつもすつかり瓶から吹き出してしまつて、主人夫婦を大笑ひに笑はせるが、カリオープイチには一方ならぬ小言の種になつた。『どこもかしこも』試かなければならないからである。彼は長いあ

ひだ女中頭と料理人に向かつて、さながらその飲みものを考へ出したのが、この二人の召し使ひか何ぞのやうに、ぶつぶつぼやき續けてゐた……「一體こんなものが、どうしてうまいんだらう？　たゞ卓を汚すばかりだ！」

それから、スボーチェフ夫婦はまた何か讀むか、一寸法師のプーフカと一笑ひするか、一しよに古いローマンスを歌ふかした（二人は聲までまるきり同じやうに、甲高で、弱弱しく、幾分ふるへを帶びて、しは嗄れてゐた――殊に晝寢をした後は尙がさ〳〵してゐたが、しかしそれでも、多少氣持ちのいゝところもあつた）。それからまた歌留多の遊びもしたけれど、いつも〳〵同じ古くさい勝負の仕方で、クレブスとか、ラムーシュとか、サムプランデルなどといつた樣な類である！　やがてそのうちに、サモワールが出る。彼らは毎晩茶を飲んだ……この點だけは時代精神に讓歩したわけであるが、いつもそれを飲む度に、これは人間のわがまゝといふものだ、『こんな支那の葉つぱ』など飲むのは、わざ〳〵自分を弱くするやうなものだと言つてゐた。しかし全體として、彼らは新時代の攻擊や、舊時代の讃美を愼むやうにしてゐた。自分たちは生まれてこの方、これよりほかの暮らし方を知らなかつたけれど、ほかの人が別な暮し方をするのは、彼らも決して異存を唱へなかつた。それどころか、寧ろ結構なことに思つてゐた。たゞ自分たちに變更を强ひられるのは厭なのであつた！　八時ごろになるとカリオープイチが、いつもお決まりのハヤシビーフを夜食に持つて來る。そして九時には、高く盛り上がつた縞の羽蒲團が、もうフォームシカとフィームシカの肥つた體を、そのむく〳〵した抱擁の中へ迎へ入れた。そして穩かな眠りが、すぐさま彼らの目ぶたを訪れるのであつた。――

かうした古びた家の中は、何もかもしんと靜まつてしまつて、燈明がじり〳〵と燃え、麝香鼠や、メリサの匂ひがあたりに漂ひ、蟋蟀の啼く聲が聞こえる——かうして、善良で、滑稽な、罪のない老夫婦は、穩かに眠るのであつた。

パークリンはつまりこの奇人のところへ——彼の言葉を借りて言へば、妹の世話をしてゐる『鸚鵡』のところへ、自分の友達を案内したのである。

彼の妹は利口な娘で、器量も悪くなかつた——目などは驚くばかり美しかつたが、不仕合はせなことに脊むしなので、始終く・よ〳〵して、自負心も快活な氣持ちもすつかりなくなつて、妙に疑り深い、殆ど意地わると言つていゝくらゐな人間になつて了つた。その名も恐ろしく拈くつたもので、スナンドゥーリヤと言つた！——パークリンはソフィヤと改名させようとしたが、彼女は脊むしにはスナンドゥーリヤが相當だと言つて、依怙地に元の名で押し通してゐた。彼女は音樂に堪能で、かなり上手にピアノを彈いた。

「わたしの指の長いお蔭よ。」と彼女は、幾分にがみを帶びた調子でかう言つた。「脊むしつてものは、いつもこんな指をしてるものだわ。」

客がはいつて行つた時、丁度フォームシカとフィームシカは食後の睡りから醒めて、苺の汁を飲んでゐるところであつた。

「われ〳〵ば、これから十八世紀へはいつて行くんですよ！」スボーチェフ家の閾をまたぐが早いか、パークリンはかう叫んだ。

果たせる哉、もう控へ室へ入るや否や、十八世紀は背の低い青い衝立ての形を取つて、客の前に現れたのである。衝立てには髪粉（プードル）をつけた貴女や騎士の影繪を、切り拔きにして貼りつけてあつた。ラファーテル（瑞西の文學者にして傳道者、露西亞に遊びて官廷に勢力を得た）の思ひつきが巧く當つて、この影繪が十八世紀の八十年頃、露西亞に大流行を來たしたのである。かういふ大勢——四人からの來客が不意に現れたといふ事は、殆ど訪ふ者のないこの家に、恐ろしい動搖をひき起した。靴を穿いたのや跣の足音がばた〳〵と聞こえて、幾つかの女の顏がちらと覗いてまた消えた——どこかで誰やら押しつけられるもの音や、誰かの叫ぶ聲や、誰かの鼻をならす響きや、誰かがひつ吊つたやうな聲で、「本當に、お前は！」といふ囁きが聞こえた。

やがてそのうちにカリオープイチが、例の毛むくだつた服を着て姿を現した——そして『廣間（サーロ）』の戶を開けて雷霆のやうな聲で叫んだ。

「ご前、シラ・サムソヌイチと、そのほかお三人の方がお見えでございます！」

主人夫婦は召し使ひのものより、慌て方がずつと少かつた。大きな男が四人まで客間へ闖入したことは（尤も、かなり廣い部屋ではあつたけれど）、幾分かれらを驚かしたに相違ないが、パークリンは、すぐに一同を駄酒落まじりに一人々々紹介して、主人夫婦をおちつかせた。ネジダーノフも、ソローミンも、マルケーロフも、彼の言葉を借りるとみんな音なしい人達で、『殿上人』ではないのであつた。フォームシカもフィームシカも殿上人、卽ち役人たちは殊に蟲がすかなかつたのである。

兄に呼ばれて出て來たスナンドゥーリヤは、スボーチェフ老夫婦よりもずつとわく〳〵して、妙に

取りすましてゐた。老夫婦は――二人一しよに――同じ言葉づかひで客人たちに席をすゝめ、お茶か、チョコレートか、それともジャムつきのソーダ水か、何をご馳走したらいゝかと訊ねた。ついさつき商人ゴルーシキンの家で朝食をしたゝめたし、それに間もなく同家で午餐をする事になつてゐるから、何もほしくないといふ客人達の返事を聞くと――同じやうに兩手を腹の上に組み合はせて、四方山の話しに取りかゝつた。

會話は初めのあひだ活氣がなかつたが、やがて間もなくはずみがついて來た。パークリンは有名なゴーゴリの物語りをして、恐ろしく老人たちを笑はせた。それはある市長がぎし〳〵に詰まつた教會へ樂にはいつた話しや、（群衆が道を開いたのを意味する）同じ市長が饅頭だつたりした話しである。（市長が臨席したため、祭の饅頭を食はない中に腹が膨れたといふ落）二人は涙の出るほど腹を抱へて笑つたが、その笑ひ方もやはり同じやうに甲高く、おしまひはこほこほと咳き入つて、顏ぢうまつ赤にして汗を滲ますのであつた。全體にパークリンは、スボーチェフのやうな人間には、ゴーゴリなどの物語りの一節が、極めて强烈な、殆ど爆發的な效果を與へる事を、ちやんと見て取つたのである。しかし老人夫婦を慰めるよりも、寧ろ彼らを友達に見せるのが目的だつたので、彼はやがて戰法を改めて、たうとう老人夫婦がすつかり警戒を弛めて了ふくらゐ、上手に話しをし向けて行つた。フォームシカは木で彫つた祕藏の煙草入れを取り出して、それを客人たちに見せた。昔はその上に、いろ〳〵な恰好をした人の姿を三十六まで數へることが出來たけれど、今ではもうとつくに磨り減らされてゐた――しかしフォームシカは、未だにそれがよく見えるのであつた。單に見えたばかりでなく、一つ〳〵數へあげることが出來た。で、彼はそれを指でさしながら

「そら、ごらんゝ」と言つた。「こゝに一人窓から覗いてをるでせう――ごらん、首を突き出してをるでせう……」爪の先の持ち上がつた、丸つこい指のさしてゐる所は、この煙草入れの蓋ぜんたいと何の變はりもなく、一面につるりとしてゐるのであつた。それから彼は頭の上に懸つてゐる一つの油繪に、客の注意をうながした。それは葦毛の馬に跨がつて、雪の野を疾驅してゐる獵人の姿を描いたものであるが、馬も獵人もどつちも横顏になつてゐた。獵人は水色の吹き流しのついた、白い羊毛の帽子を高々と被り、天鵞絨で緣をとつた駱駝のチェルケース外套を着て、黄金を打ち出したバンドで腰を締めてゐた。絹糸でぬひをした手袋は、そのバンドに挾んであつて、黑七寶をあしらつた銀づくりの匕首がそれに吊るされてゐた。見受けたところ、若々しい肥つた獵人は、赤い房で飾つた大きな角笛を片手に持ち、片手には手綱と鞭を握つてゐる。馬の足は四本とも空中に上がつてゐたが――畫家はその蹄鐵まで、一本々々丹念に描きあげて、釘まで一々あらはしてゐた。「それに、これをご覽、」馬の脚の後ろの白い空間に描かれた、四つの半圓形をしたしみを、例の丸つこい指でさしながら、フォームシカはかう言つた。「雪の中の足あと――こんなものまでちやんと描いてをりますて！」なぜこの足あとが四つしかなくて、その先に一つも見えないのか――その事についてはフォームシカも沈默を守つてゐた。

「ところで――これがわたしなんですよ！」しばらくたつて、恥づかしさうな微笑を浮かべながら、彼はかう言ひだした。

「へえ？」とネジダーノフが叫んだ。「あなたは獵をなすつた事があるんですか？」

「ありますよ……少しばかり。あるとき一目散に走つてをる最中、馬から抛り出されましてな。クルペーを挫いたんですよ。そこでフィームシカがびつくりして……それきり獵を差し止めて了ひましたよ。で、わしもそれ以來ぶつつりやめた譯ですて。」

「何を挫いたんですつて？」とネジダーノフが訊ねた。

「クルペーですよ。」とフォーシムカは聲を低めながら繰り返した。

客は無言のまゝ目を見合はせた。クルペーとは何のことやら、誰ひとり知るものがなかつた――尤もマルケーロフは、コザックやチェルケース風の帽子についてゐる、毛のもしや〳〵した房を、クルペーといふことは知つてゐたが、そんなものをフォームシカが挫く筈はない！――しかし、クルペーといふ言葉で何を言ひ現さうとしたのか――それは誰も思ひきつて訊けなかつた。

「まあ、あんたがそんなに自慢話しをするなら、」と不意にフィームシカが言ひだした。「それぢや、わたしも自慢話しをしませうか。」

彼女は小さな『その日の幸福』（それは小さな曲がつた足のついてゐる古い仕事机で、圓い上げ蓋が机の後ろ側へ藏へる樣になつてゐた）の中から、ブロンズの楕圓形の枠に嵌まつた小さな水彩畫をとり出した。それは矢筒を肩にかけ、水色のリボンを胸に垂らして、指の先で鏃（やじり）を調べてゐる、四つくらゐのま裸な子供を描いたものであつた。子供の頭は夥しく渦を卷いて、目は幾分やぶ睨みの氣味であつたが、にこ〳〵と笑顔をしてゐた。フィームシカはこの水彩を客に見せた。

「これがわたくしなんですよ……」と彼女は言つた。

「あなたですか？」

「さうですよ、わたくしなので。若い時なんですよ。亡くなつたお父さんの所へ、佛蘭西人の繪かきが出入りしてをりましたつけが、なか〳〵、立派な繪かきでございましたよ！　この繪かきがね、お父さんの命名日のお祝ひに、わたくしの似顔を描いてくれましたので。それは〳〵よい佛蘭西人でございましたよ！　その後もよくわたくしどもへ遊びに參りましたが、はいつて來ると、片々の足を床で摺つて、それからその足をひよい〳〵と振りましてね、わたくしの手に接吻するぢやありませんか、そして歸りしなには、自分で自分の指に接吻するんでございますよ――え、え、本當ですとも！　それから、右と、左と、前と後ろへお辭儀を致しましてね！　本當によい佛蘭西人でございましたつけが。」

客人達は繪の出來榮えを褒めた。パークリンは幾らか似たところさへあると言つた。

その時、フォームシカは今の佛蘭西人の話しをはじめて、彼らはみんな恐ろしく意地わるになつたに相違ない、といふ說を述べた。

「それはなぜです、フォマー・ラヴレンチッチ？」

「なぜといつて、まあ考へてもごらうじ！……今の佛蘭西人がどんな名前をつけるやうになつたか！」

「たとへば？」

「たとへば、それ、ノジャン・ツェント・ロランなどと！――まるで强盜の名前ですからな！」

フォームシカは話しのついでに、いま巴里では誰が王位についてゐるのかと、ものずき半分に訊い

てみた。ナポレオンだといふ答へを聞くと、彼は驚きもすれば落膽もしたらしい樣子であつた。

「一體それはどうした譯ですな？……あんな老人を……」と彼は言ひかけたが、當惑したやうにあたりを見廻して口を噤んだ。フォームシカは佛蘭西語を餘りよく知らなかつたので、ブルテールなども飜譯で讀んでゐた（彼の枕許にある祕密の手箱には、カンディードの寫本が祕藏してあつた）。けれど彼は時々「それは、あなた、フオッス・パルケーですて！」といつたやうな言葉づかひをする（つまり『それは怪しい』とか『それは違ふ』とかいふ意味なのである）。人々はそれをさん〳〵笑ひぐさにしてゐたが、ある博識の佛蘭西人が現れて、これは千七百八十九年まで、佛蘭西で用ゐられた古い議會用語だと説明したので、それからはもう笑ふのをやめてしまつた。

話しが佛蘭西と佛蘭西人のことに移つたので、フィームシカはかね〳〵胸に包んでゐた事を、この際おもひきつて訊ねることにした。彼女は始めマルケーロフに話しかけようと思つたが、彼は取りつき端もないほど不機嫌な顏をしてゐるので、今度はソローミンに訊かうした……『いや、駄目だ！』と彼女は考へた。『この人は平民の出らしいから、きつと佛蘭西語は分かるまい。』で、彼女はネジダーノフの方へふり向いた。

「ねえ、あなたに一つお訊ねしたい事があるんですが、」と彼女はきり出した。「失禮ですが、それ、このシーラ・サムソヌイチが――これはわたくしの親類ですけれど――わたくしが年寄りで、學問のない女だと思つて、馬鹿にして仕樣がございません。」

「一體なんですか？」

「ほかでもありませんが、もし佛蘭西の言葉で『これは何でございますか？』と訊かうと思つたら、こんな風に言へばよろしいのでせうか、ケセ、ケセ、ケセ、リヤ？」

「その通りです。」

「それからまた『ケセ、ケセ、リヤ』と言つてもよろしいので？」

「構ひません。」

それからたゞ『ケセ、リヤ』だけでもよろしうございませうか？」

「え〻、それでも構ひません。」

「それはみんな同じことなので？」

「さうです。」

フィームシカは考へ込んで兩手を擴げた。

「あ〻、シールシカ、」たうとう彼女はかう言ひだした。「やはりわたしが惡くつて、お前の方が本當だつたよ。だけど、本當に佛蘭西人といふものは……厄介な連中だねえ！」

パークリンは老夫婦に何かちよいとーたロマンスを歌つてくれと賴んだ……二人は何といふことを思ひついたものだらうと、びつくりしながら笑ひだした。けれど間もなく承知したが、たゞスナンドゥーリヤがピアノに向かつて、伴奏をしてくれるならば、といふ條件つきであつた。――彼女はもう何を彈いたらい〻か、ちやんと心得てゐたのである。客間の片隅には、小さなピアノが置いてあつたが、客は誰もそれに氣がつかなかつたのである。スナンドゥーリヤはこの『ピアノ』に向かつて、二

つ三つ和音を鳴らした……ネジダーノフはこんな歯の抜けたやうな、饐えたやうな、よぼ〳〵したやうなみじめた音を、生まれて以來(このかた)聞いたことがなかつた。けれど老人夫婦は早速うたひだした。

戀ひの中にも悲しみを

とフォームシカがきり出した。

見んがためにや、神々は
戀ひてふものを授けたまひし？
まがつみもはた悲しみもなく

とフィームシカが答へた。

ひたすら熱き戀ひごころ——
この世にかゝるものありや？
いづこにもなし、いづこにもなし、いづこにもなし！

するとフォームシカが引きとつた。

いづこにもなし、いづこにもなし、いづこにもなし！

とフィームシカが繰り返した。

つらき思ひの絶えまなし
いづこいかなる國にあるとも！

と二人一しよに歌つた。

いづこいかなる國にあるとも！

とフォームシカが長く尾を曳いた。

「ブラーヴー！」とパークリンが叫んだ。「それは第一節、第二節の方は？」

「よろしい、」とフォームシカが答へた。「だが、スナンドゥーリヤ・サムソノヴナ、一體顫音(トリル)はどうしたのだね？　この詩の後では顫音がいるんだよ。」

「よろしうございます。」スナンドゥーリヤは答へた。「それぢや顫音をしてさし上げませう。」

フォームシカはまた歌ひだした。

三千世界に戀ひをして
苦しみ知らぬものありや？
戀ひつゝ深き溜め息と
涙を知らぬものありや？

するとフィームシカが

海に破るゝ船のごと
悲しむ胸のあやしさよ……
神は何ゆゑ戀ひを與へし？

「苦しむるため、苦しむるため！」とフォームシカが叫んだ——そしてスナンドゥーリヤが顫音（トリル）を強く餘裕をつくるために、ちよつと句を切つた。

スナンドゥーリヤは顫音を出した。

「苦しむるため、苦しむるため！」とフィームシカが繰り返した。

それから今度はふたり一しよに、

神よ心を召したまへ
もとのおん手に、もとのおん手に！
もとのおん手に、もとのおん手に！

かうしてすべては再び顫音で結ばれた。

「ブラーヴー！　ブラーヴー！」マルケーロフを除く一同はかう叫んで、手まで拍ち鳴らした。

『一體どうなんだらう、』拍手の音が靜まるとともに、ネジダーノフはかう考へた。『この人達は何か……道化の役でも演じてゐる氣なんだらうか？　事によつたら、さうでないかも知れないが、また事によつたら、なに、かまふもんか！　誰にも惡い事をする譯ぢやなし、却つて人さまを喜ばすくらゐだ！　と感じもし、考へてゐるのかも知れない。よく考へてみると、この人達はもつともなのだ、何から何までもつともなのだ！』

かういふ考へに動かされて、彼は突然、老夫婦にお愛想を言ひだした。こちらはそれに對して、ちよつと小腰を屈めただけで肘椅子から離れようとはしなかつた……けれど丁度この瞬間、隣りの部屋から（たぶん寢室か女中部屋らしく、もう前から人の動くけはひや、囁き聲など聞こえてゐた、）思

ひがけなく一寸法師のプーフカが、婆やのワシーリエヴナに伴なはれて姿をあらはした。プーフカは黄ろい聲で喋つたり、道化た恰好をしたりし始めた。—婆やはそれを抑へてゐるかと思ふと、また餘計にからかつたりした。

もう餘ほど前から、我慢しきれないやうな素振りを見せてゐたマルケーロフは——（ソローミンはいつもより一層あけつぴろげな微笑を湛へてゐた）マルケーロフは突然フォームシカの方へふり向いた。

「僕は實に思ひがけなかつたです。」持ち前のつけ〳〵した調子で彼はかう言ひだした。「あなたの樣な文化思想に浴した人が——實際あなたはヲルテールの崇拜者ださうぢやありませんか？——憐憫の對照となるべきもの、つまり不具者を慰みものにするなんて、實に意外千萬です……」

そのとき彼はパークリンの妹を思ひだして慌てゝ舌を嚙んだ。フォームシカはまつ赤になつた。

「さやう……さやう、しかし、これは私ぢやないので……この女が自分で……」と、しどろもどろに呟いた。その代はりプーフカが、猛然とマルケーロフに喰つてかゝつた。

「一體お前さんは何だつて、」と彼女は呂律の廻らない聲で喚きだした。「うちの旦那さま方に失禮を申し上げるんだえ？　わたしのやうな哀れな人間に目をつけて、ご自分の家へ引き取つて、飲み食ひさして下さるんぢやないか——それがお前さん羨ましいんだらう！　つまりお前さんは、人さまのパンをやつかんでゐるに相違ない！　見るも厭らしい、まつ黑な、胸くその惡い顏をして、油蟲のやうな髭を生やしてさ、本當にどこから舞ひ込んだんだらう……」こゝでプーフカは太い短かい指で、髭

のまねをして見せた。ワシリーエヴナは齒のない口を一ぱいに開けて笑ひ出した。——次の間でそれに應じる笑ひ聲が聞こえた。

「僕は勿論、あなたの裁判官ぢやありません。」マルケーロフはフォームシカに向かつてかう言つた。「貧しいものや不具な人間の世話を燒くのは、じつさい結構なものです。しかし忌憚なく言ふと、何不自由のない鼻唄半分の生活をしながら、別段、人の邪魔もしないけれど、世間のために指一本うごかさないなんて……それぢやまだ善とは言へませんよ。少くとも僕自身は、さういふ善良さには、正直なところ、一文の價値も認める譯にゆきませんよ！」

その時、プーフカは、耳を劈くやうな金切り聲をたてた。彼女はマルケーロフの言つたことが、てんで少しも分からなかつたけれど、『黑ん坊』が惡態をつくなんて、何といふ失禮な奴だらう！　とかう直覺した。ワシーリエヴナもやはり何かぶつぶつ言ひだした。フォームシカは兩手を胸の上に組んで、妻の方へ向きながら、

「これフィームシカ、」と殆どしやくり上げて泣かないばかりに言つた。「このお客さまの言はれることを聞いたか？　わしらはお互に罪びとなんださうだ、わる者なんださうだ、僞善者なんださうだ……鼻唄半分の生活だなんて、おゝ！　おゝ！　おゝ……わし達はこの家を出て、往來へ出なくちやいけないんだらう——自分で稼いで暮らすために、箒を一本づつ手に持たなけりやいけないんだよ——おゝ、おお、おゝ」

かういふ悲しい言葉を聞いたプーフカは、一層大きな聲で喚きだした。フィームシカは目を細めて

口を曲げながら、わつと勢ひよく泣き出すため、胸一ぱいに息を吸ひ込んだ。
もしパークリンが中へ割り込まなかつたら、この場の結末はどうついたか分からないほどであつた。
「これはまあどうしたんです！　冗談ぢやない。」兩手をふり廻して聲高に笑ひ乍ら、彼はかう言ひだした。「よく恥かしくない事ですね！　マルケーロフさんはちよつと冗談を言ふつもりだつたんだけれど、あの人が恐ろしく眞面目な顔つきをしてゐるもんだから、少し嚴つく聞こえたんですよ……それをあなた方は本當にするなんて！……もう澤山ですよ！　エウフィーシヤ・パーヴロヴナ、僕らはもうすぐ出かけなきやならないんですが――ねえ、どうでせう、お別れにみんなの運勢を占つてくれませんか……あなたはその方ぢや名人ですからね。――妹！　歌留多を持つておいで！」
フィームシカは夫の顏を見やつた。と、夫がもうすつかり落ちついた樣子を見て、彼女もやつと落ちついて來た。
「歌留多、歌留多……」と彼女は言ひだした。「でも、わたしは忘れてしまひましたよ、とんと駄目になりましたよ――長いあひだ手に取らないのでね……」
かう言ひながら、彼女はもうスナンドゥーリヤの手から、昔風の珍らしいロンベル用の歌留多を受け取つた。
「どなたの占ひをするんだね？」
「みんなのですよ。」とパークリンが抑へた――が、心の中ではかう考へた。『だが、まあ何といふ

素直な人だらう！　どちらへでも自由に向けられる……實にいゝなあ！』それからまた大きな聲で言ひ足した。「みんなのですよ、お婆さん、みんなのですよ。みんなの運勢や、性分や、未來のことや……何もかもすつかり言つて下さい！」
フィームシカは歌留多を並べにかゝつたが――不意にすつかり抛りだしてしまつた。
「占ひなんかしなくたつていゝ！」と彼女は叫んだ。「歌留多なんかなくつても、あなたがた一人一人の氣性はちやんと分かつてをります。人間の運勢といふものは、その性分次第ですからねえ。――まづこの人は（と彼女はソローミンを指さした）――いつも變はりのない涼しい人だし、またこの人は（とマルケーロフの方を向いて、脅かすやうな眞似をしながら）――他人を破滅させる火のやうな氣性の人だ……（プーフカはマルケーロフにぺろりと舌を出して見せた）。ところでお前さんには（とフィームシカはパークリンをちらと見ながら）何も言ふがものはない。お前さん自分で知つてゐなさるだらうが、たゞ風見鴉だよ！　ところでこの人は……」
彼女はネジダーノフを指さしながら、口ごもつた。
「どうなんです？」と彼は言つた。「さあ、お願ひだから言つて下さい、僕はどんな人間なんです？」
「あんたがどんな人間かつて……」とフィームシカは言葉じりを引いた。「まあ、氣の毒なお人ですね！」
ネジダーノフは思はずびくりとした。
「氣の毒な人！　どういふ譯です？」

「どうもかうもありやしない！　わたしはあんたが可哀さうなんですよ――たゞそれだけ！、」
「でも、なぜです？」
「なぜといつて、わたしの目にちやんと見えてゐるんですからね。あんたはわたしを馬鹿だと思つておゐでせうが、どつこい、あんたなどより少しばかり智慧が廻りますよ――あんたが幾ら赤い毛をしてゐたつて、駄目ですよ。わたしはあんたがお氣の毒……それがわたしの判斷ですよ！」
一同はしばらく無言の後……ちらと目と目を見合はせた――そしてまた暫らく無言でゐた。
「ではさやうなら、」いきなり籤から棒に、パークリンがかう言つた。「すつかり長居をしてしまつた、さぞ飽きあきなすつたでせう。この人達はもう出かけなくちやならない時分だから、僕も一しよにお暇します。左様なら、いろ〳〵ご丁寧にありがたう。」
「左様なら、左様なら、どうかこれに懲りないで、また寄つて下さい。」とフォームシカとフィームシカが聲を揃へて言つた……と、不意にフォームシカが大きな聲で言ひだした。
「いつ〳〵までもご息災で、いつ〳〵までも……」
「いつ〳〵までも、」それこそまるで思ひがけなく、カリオーブイチが若い客人たちのために戸を開けながら、低い聲でかう言つた……急に一行四人は往來へ出て、膨らんだやうな恰好をした家の前に立つた。――と、窓の中でプーフカの黄ろい聲が響いてゐた。
「馬鹿……」と彼女は叫んだ。「馬鹿！」
パークリンはこわ高に笑ひだした。けれども、誰もそれに答へるものがなかつた。マルケーロフ

は、憤慨の言葉でも期待するやうに、交はるがはる一同の顏を見まはすのであつた。
たゞソローミンだけは、いつものやうににこ〳〵笑つてゐた。

二〇

「さあ、どうです！」とパークリンが一番に口をきつた。
「これで十八世紀へも行つて來たから、今度はいきなり二十世紀へ押しかけようぢやないか！――ゴルーシキンはあゝいふ進歩した人間だから、十九世紀あつかひにするのは失禮だよ。」
「一たい君はあの男を知つてるのかい？」とネジダーノフが訊ねた。
「壁に耳ありの譬へだからね――ところで、僕が『押しかけよう！』と言つたのは、つまり諸君と一しよに出かけるつもりだからさ。」
「それはどうして？　君はあの男と知りあひでも何でもないぢやないか？」
「これはしたり！　ぢや、諸君はあの鸚鵡先生たちと知り合ひだつたのかい？」
「それは君が僕たちを紹介してくれたからさ！」
「ぢや、君も僕を紹介してくれたらいゝぢやないか！　何も僕に隱すやうな事はないだらう――それにゴルーシキンは大腹中の男だからね。まあ、見てゐたまへ、先生、却つて新顏がふえたのを喜ぶくらゐだよ。それにこのS市の人間は、さつくばらんだからね！」
「さやう、」とマルケーロフが呟いた。「全くこの町の人間は、無遠慮だね。」

パークリンは頭をふつた。

「それは多分、僕に當てつけて言つたんでせう……どうも仕方がありません！　僕はさう非難されても、一言もないんだから。――しかしどうでせう、わが新しき知人先生、あなたの膽汁質な性分から湧いてくるその陰鬱な思想は、しばらく脇へのけて貰ひたいものですね！　それに何よりも肝腎なのは……」

「わが新しき知人先生。」とマルケーロフはかつとしながら遮つた、「僕も順序として君に一言警告して置きますが、僕はいつでも冗談口には全然興味を持たないが――今日は殊にさうなんです！　それに僕の性分がどうして君に分かるんです！（と彼は言葉じりに力を入れた）僕らが知りあつたのは、確かさう以前のことぢやなかつたやうですね――お互に初めて顔を見たやうな氣がしますが。」

「まあ、お待ちなさい、お待ちなさい、さう怒らないで――そして、そんなにむきになつて誓はないで下さい――そんな事をしなくつたつて、僕はあなたの言ふことを信用しますよ。」とパークリンは言ひだした――そしてソローミンの方へ向きながら、「ねえ、君、」と叫んだ。「君はあの千里眼のフィームシカから『涼しい人』と言はれたんだし、それに實際、何か人を落ちつかすやうな力をもつてゐるんだから、どうか公平に判斷して下さい、一たい僕は他人に不快な感じを與へたり、場所がらに合はないわる洒落を言つたりしようなんて、そんな了見の人間と思ひますか？　僕はたゞ諸君と一しよにゴルーシキンのところへ行きたいと言つたばかりで、實際はごく毒のない人間なんですよ。マルケーロフ氏が黄ろい顔をしてるからといつて、それは僕のせゐぢやないですからね。」

ソローミンは初め一方の肩をすくめて、それからいま一方の肩を上げた。――それは彼が何か即答をしかねるやうな時、いつも出す癖なのであつた。

「それは言ふまでもなく、」たうとう彼はかう言つた。「君は誰にも悪いことをする筈もなければ、またそんな氣もないでせう、パークリンさん。それにゴルーシキンの家へだつて、何も君が行つていけないといふ法はありませんよ。ゴルーシキンの家でも、君のご親戚の家と同じくらゐ愉快に――そして同じくらゐ有益に、みんなで時を過ごすことが出來ると思ひます。」

パークリンは指を立て、脅かす眞似をした。

「いや！　君もなか〳〵人が悪さうですね！――しかし君もやはりゴルーシキンの所へ出かけるでせう！」

「無論行きますとも。どうせ今日は一日だいなしにしたんだから。」

「さあ、それぢや、――前へ進め！――二十世紀へ！　二十世紀へ！　ネジダーノフ、君は弟一線の人だ、案内したまへ！」

「よろしい、來たまへ。しかしあの洒落のお浚ひはやめてほしいね。もう種ぎれになりかゝつてゐるなどと、考へるものがないとも限らないから。」

「なに、そこにぬかりはないから大丈夫。」とパークリンは陽氣さうに言ひ返して、まつ先に駈けだした。それは彼自身の言葉を借りれば、飛び上がる様な歩き方といふより、『ひよこたんひよこたん』とした足どりであつた。

「實に面白い人だ！」彼の後ろからネジダーノフと腕を組んで歩きながら、ソローミンがかう言つた。「縁起でもないことを言ふやうだが、もしわれ／＼が西比利亞へやられても、氣を紛らしてくれる人がある譯だね！」

マルケーロフは默つてみんなの後からつついて行つた。

その間に商人ゴルーシキンの家では、『豪勢な』料理――もう一つ別な言葉で言ふと、『おつな』料理を出すために、ありとあらゆる工夫が凝らされた。思ひきつて脂つこい――思ひきつてまづい魚汁が煮られ、さま／＼な『パテショオ』や、『フリカセー』などが作られた。（ゴルーシキンは舊教徒でこそあるけれど、歐羅巴文化の頂上に立つてゐる人間として、佛蘭西料理の崇拜者であつた。そして、やり方が不潔なために、解雇された倶樂部の料理人を傭つてゐた）。しかし一番の眼目は、幾瓶かの三鞭酒が、ちやんと冷して準備されてゐることだつた。

主人は持ち前の武骨らしい身ぶり手まねをしながら、せか／＼と慌たゞしい樣子で、間の抜けた高笑ひとともに、四人の青年を迎へた。果たしてパークリンの來訪は、彼を喜ばせた。そして「やはりわが黨だね？」と訊ねて置いて、すぐ返事も待たずに叫んだ。「いや、無論！　さうだらうとも！」それから、自分はあの變物の知事の所から、たつたいま歸つて來た許りだが、あの先生――くそ忌々しい！――何だか譯の分からん慈善院のことで、うるさくつき纏つて困る……といふ話をした。一體このゴルーシキンは、縣知事の所へ出入りを許されてゐるのに滿足なのか――それとも新時代の青年たちの前で、彼を罵倒することが出來たのが嬉しいのか、まるで見當がつかなかつた。それから彼は

約束の同志を紹介した。しかし、この同志なるものは果たして誰であつたか？　ほかでもない、ゴルーシキンからワーシャと呼ばれてゐる、例の水差しのやうな顏をした、肺病やみらしいにやけた男で、今朝とり次ぎにはいつて來たこの家の番頭であつた。

「この男は雄辯ぢやないけれど、」とゴルーシキンは五本の指で彼を指さしながらかう言つた。「われわれの運動に全心を捧げとるんだよ。」

ワーシャはたゞ會釋をして、顏を赤くしたり、目をぱちぱちさしたり、白い齒をむいて見せたりしたばかりである。その樣子だけでは、同樣に馬鹿な俗物なのか、それとも全然正反對に、海に千年山に千年の曲者なのか、まるで見分けがつかなかつた。

「ときに諸君、そろ／＼卓についてくれ給へ。卓に。」とゴルーシキンはさう／＼しい調子で喋りだした。――一同は初め充分に下物で腹をこさへてから、卓についた。魚汁のすぐ後で、ゴルーシキンは三鞭酒を言ひつけた。氷つた脂のかけらのやうなものが、瓶の口から流れ出して、下に受けた盃の中へ溢れた。「わが……わが黨の事業の爲に！」とゴルーシキンは叫んだが、その時ちよつと目をぱちぱちさして、召し使ひの方を頤でしやくつて見せながら、他人のゐる前では警戒しなくちやならん、といつたやうな心を見せた。同志のワーシャは相變らず默り込んで――椅子の端つこにちよこなんと畏まつてゐた。主人の言葉によると、彼は全心をこの運動に捧げてゐるとの事であつたが、しかし全體の態度は、さういふ主義思想とまるで相容れさうもないほど卑屈に見えた……それでも、酒だけはやけにがぶがぶ飲んでゐた……その代はり、ほかの人達はみんなよく喋つた。尤も正確に言へば、本

當に喋つたのは、主人とパークリンだけである。殊にパークリンはのべつ口を動かすのだつた。マルケーロフはぷり〳〵しながら憤慨してゐた――スボーチェフ家へ行つた時とは、少し性質が違ふけれど、やはり同じくらゐ激しい憤慨の仕方である。ソローミンは傍觀してゐた。パークリンはすつかりいゝ氣持ちになつてゐた！　例の元氣のいゝ話しぶりがなみ〳〵ならずゴルーシキンの氣に入つたのである。まさかこの『びつこ』が、のべつ傍に坐つてゐるネジダーノフの耳に口を寄せて、當のゴルーシキンのことで、思ひきり毒々しい言葉を囁いてゐようとは、夢にも想像しなかつたのである！

この男はごく平凡な人間らしいから、うは手から出て『引き廻す』ことも出來るだらう、とかう彼は考へたのである。パークリンが氣に入つた理由も、一つはそれなのであつた。もしパークリンが彼の傍に坐つてゐたら、彼はもう疾くにその脇腹を指で突つついたり、肩を叩いたりしたに相違ない。彼は始終卓ごしに顔いて見せたり、その方へ向けて頭を拈つたりしてゐた……けれど、彼とネジダーノフの間には、第一に、あの『黑雲』のやうなマルケーロフが構へ込んでゐるし、その次にはソローミンが陣どつてゐるのであつた。その代はり、パークリンが話しをすると、ゴルーシキンはその一こと一ことにからからと高笑ひした。まだ別に面白くもないうちから、取り越しにげら〳〵笑つて、紫がかつた齒齦を剝き出しながら、自分で自分の腹を叩くのであつた。パークリンはすぐに自分の役どころを感どつて、ありとあらゆるものを、誰かれの差別なく、罵倒しはじめた。（しかも、それが彼に似合ひの仕事だつたのである）。保守派も、自由派も、官吏も、辯護士も、行政官も、地主も、自治會も、國會議員も、莫斯科（モスクワ）も、彼得堡（ペテルブルグ）も、すべて彼の舌鋒を免れなかつた！

「さうだ、さうだ、さうだ。」とゴルーシキンが合ひ槌を打つた。「その通り、その通り、その通り、その通り！　現にこの町の市長なんか、全くの驢馬だ！　しやうのない鈍物だよ！――僕がかやうかやうと言つて聞かしても……先生何一つ分からんのだからなあ。縣知事と追つつかつつだ！」

「こゝの縣知事は馬鹿なんですか？」とパークリンがちよつと物好きに訊いてみた。

「僕がさう言つたぢやないか、驢馬だつて！」

「君は氣が「つかなかつたですか――先生はしや嗄れ聲か、さもなければ、鼻聲でものを言ふでせう？」

「え？」幾分けゞんな樣子でゴールシキンは訊き返した。

「一たい君は知らないんですか？　わが露西亞國では、しや嗄れ聲で物を言ふのは文官の偉い奴、鼻聲を出すのは武官の偉い奴なんですよ。但し非常に偉い政治家になると、同時にしやがれ聲と鼻聲で物を言ふつて寸法ですよ。」

ゴルーシキンは轟然たる笑ひを爆發さして、目には涙さへ滲ませた。

「さうだ、さうだ。」と彼はしどろもどろに言つた。「鼻聲だよ……鼻聲だよ……あいつは武官だからな！」

『やい、この間抜け野郎！』とパークリンは腹の中で考へた。

「露西亞の國はどこを觸つてみても、みんな腐つとるんだからなあ！」ゴルーシキンは暫らくたつてかう呟鳴つた。

「何もかもみんな腐つとる！」

「ねえ、カピトン・アンドレーイッチ、」とパークリンが、しみ〴〵とした調子で言ひだした——が、それと同時に小さな聲でネジダーノフに囁いた。「何だつてあの男はのべつ手を擴げてゐるんだらう。フロックコートの脇の下が窮屈なのか知らん？——ねえ、カピトン・アンドレーイッチ、僕の言葉を信じて下さい。そんな姑息な手段は、この場合なんの役にも立ちやしないから！」

「姑息の手段とは何だね！」不意に笑ひやめて、獰猛な顏つきをしながら、ゴルーシキンはかう喚いた。「この場合、とるべき手段は一つしかない、根こそぎ引つこ拔くんだ！——ワシカ、飲め、この野郎！」

「もうちやんと頂いてをりますよ、カピトン・アンドレーイッチ。」盃をぐつと傾けながら番頭は答へた。

ゴルーシキンも同じく『ひつかけ』た。

「あれで腹が張り裂けないのが不思議だね！」とパークリンはネジダーノフに囁いた。

「習慣さ！」とこちらは答へた。

しかし酒を飲んだのは、番頭一人だけではなかつた。段々みんな醉が廻り始めた。ネジダーノフもマルケーロフも、ソローミンさへだん〴〵會話に卷き込まれて行つた。

ネジダーノフも初めは無雜作な樣子で、自分はつい意志が弱いために、無駄話しなんかに口を出すのだと言つたやうな、自分自身に對する忌々しさを見せながら、もう言葉の上だけの遊戯はやめにし

て、そろ〴〵『實行』に移るべき時だ、といふやうな事を論じだした。『もう地盤が發見された！』とも言つた——然しそれかと思ふと、自己撞着してゐるのを氣がつかないで、ちやんと信賴することの出來る、現實的要素を示して貰ひたい、自分はさういふものが目に入らないなどと要求しはじめた。「社會には同感が缺けてゐるし、民衆には自覺がない……かういふ間に立つて、もがかなくちやならないんだからね！」

それには勿論、言葉を返す者はなかつた。しかし、それは返すべき言葉がないからではなく、もうめい〴〵が自分勝手なことを喋り出したからである。マルケーロフは妙に籠つた毒々しい聲で、單調にしつこくまくし立てた（「もう何のことはない——まるで玉菜（キャベツ）でも刻んでるやうだ、」とパークリンが囁いた）。一たい彼が何を話したのやら、それははつきり分からなかつた。『砲兵』といふ言葉が、ちよつとあたりの靜まつた時に、彼の口から洩れ聞えた……恐らく自分の發見した砲兵編成上の缺陷を、ふと思ひ出して言つたものであらう。それから獨逸人や副官の攻擊も出た。ソローミンまでが口を出した。時期を待つのに二つの態度がある——一つは何もせずに待つてゐることだし、一つは待ちながら仕事を進めて行くのである。

「漸進派なんかわれ〴〵には必要がないんだ。」とマルケーロフが陰欝な調子で言ひたした。

「今までの漸進派は天降りだつたが、」とソローミンが說明した。「われ〴〵はそれを下の方から試みようと言ふのだ。」

「必要がないと言つたら必要がないんだ、畜生！」とゴルーシキンが勢ひ猛に引きとつた。「一度にや

つゝけるんだ、一度に！」

「それぢや、諸君は窓から飛び出さうといふのかね？」

「飛び出すとも！」とゴルーシキンが金切り聲を絞つた。

「飛び出すとも！ それに、ワシカも飛び出すよ！ 僕が命令したら飛びだすよ！ おい！ ワシカ！ お前、飛び出すだらうな？」「カピトン・アンドレーイッチ、あなたの行かれる所なら、わたしだつてやはり行きますよ。わたしなどがかれこれ言へた義理ですか！」

「さうだ！ その通り、その通り！ 貴樣なんか飴のやうに捩ぢまげて見せるぞ！」

やがて間もなく、酒飲みの言葉で、バビロン塔の建立と呼ばれてゐる狀態がやつて來た。『偉大なる』叫喚と咆哮が起こつた。暖かい秋の空氣の中で、目まぐるしく鹿の子まだらに入りまじり乍ら、くる〳〵と舞ひ狂ふ初雪の花びらのやうに、ゴルーシキン家の食堂の熱した空氣の中にば、ありとあらゆる言葉が互にぶつ突かつたり押し合つたりしながら、渦を卷きはじめた——進歩、政府、文學——租稅問題、教會問題、婦人問題、裁判問題——古典主義、現實主義、虛無主義、共產主義——インターナショナル、僧侶執政主義、自由派、資本——行政、組成、組合、結晶！ ゴルーシキンはこの喧々囂々のために、有頂天になつてゐるらしかつた。つまりこの喧々囂々の中に本質的なものを見出してゐるらしかつた……彼は勝ち誇つた樣な風つきだつた！ それは、『われ〳〵が誰だか知つとるか！さあ、どいた〳〵——どかんと踏み殺すぞ！……カピトン・ゴルーシキン樣のお通りだぞ！』とでも言ひたげであつた。番頭のワーシャは到頭すつかり醉ひつぶれて、皿の中に顏を突つ込みながら、

ら、鼻を鳴らしたり喋つたりするやうになつた——と、不意に氣でもちがつたやうに「一體そりや何てえ世迷ひごとだ——プロギムナジヤなんて?!」

ゴルーシキンは急に立ち上つた——そして紫いろになつた顏をぐつと後ろへそらし、得意然として勝ち誇つたやうな粗野な表情に、內心の恐怖と戰慄ともいふべき別種の感情を、奇妙に入りまじらせながら、いきなりかう喚いた。

「僕はもう千留だけ犧牲にする！ ワシカ、持つて來い！」ワシカはそれに對して、小さな聲で、「よう〳〵、大きいぞ！」と答へた。パークリンはまつ靑な顏をして、汗みどろになつてゐたが、(彼も最後の十五分間に、番頭に劣らないほど飲んだのである)、いきなり自分の席から飛び上がつて、兩手を頭の上へさし上げながら、一句々々ひき延ばすやうにかう言つた。

「犧牲にする！ この男が犧牲にするなどと言つたな！ おゝ！ これは神聖な言葉に對する冒瀆だ！ 犧牲！ どんな人間だつて、犧牲などといふ高みへ上がることは出來やしない、どんな人間だつて、犧牲の課する義務を實行する力を持つてゐやしない。少くとも、こゝに立ち會つてゐるわれ〳〵の中で、誰一人それを持つてるものはありやしない——ところが、この分からずやが、このやくざな錢袋が、あの膨らんだ腹を搖ぶつて、一握り程の金をふり撒きながら、犧牲にするなどと喚きやがる！ しかも感謝なんか要求して、月桂冠を當てにしてるんだ——この碌でなし野郎！」

ゴルーシキンは、パークリンの言つたことが聞こえなかつたのか、分からなかつたのか、それともたゞの冗談と思つたのか、もう一ど聲を張り上げてかう呶鳴つた。

一さうだ！　千留だ！　カピトン・ゴルーシキンの言つたことは金鐵だ！」彼は不意に手を脇かくしへ突つ込んだ。

「そうれ、この通り、これが金だ！　さあ、取つてくれ。しかし、カピトン・ゴルーシキンのことは、覺えてをつて貰はう！」彼は少しでも夢中になると、まるで小さな子供のやうに、自分のことを三人稱で呼ぶ癖があつた。ネジダーノフは酒だらけの卓掛けへ抛り出された金を拾ひ集めた。しかし、もうこれ以上ぐづ〳〵してゐる必要はなかつたし、それにもう遲くもなつてゐた。一同は立ち上がつて帽子をとると――そのまゝどん〳〵出てしまつた。

外の空氣を吸つたとき、一同――殊にパークリンは目まひを覺えた。

「さて！　これからどこへ行くかなあ？」幾らか骨の折れるらしい樣子で、彼は言ひだした。

「君がどこへ行くか、そんなことを知るもんですか。」とソローミンが答へた。「しかし僕は家へ歸りますよ。」

「工場へ？」

「工場へ。」

「これから、夜道を歩いて？」

「それがどうしたんです？　こゝには狼もゐなければ追ひ剝ぎもゐやしない――それに僕は足もたつしやだから。夜だと涼しくてなほ結構だ。」

「しかし、四里からありますよ！」

「たとへ五里あつたつて平氣さ。ぢや失敬、諸君！」

ソローミンは釦をかけて、帽子を目深に被ると、葉卷きに火をつけて、大股に通りを歩きだした。

「ところで、君はどこへ？」とパークリンはネジダーノフに訊ねた。

「僕はこの人の所へ。」兩手を胸に組んで、じつと立つてゐるマルケーロフを指しながら、彼はかう答へた。「こゝに馬も馬車も待たしてあるんだからね。」

「いや、それは結構……ぢや僕はあの綠島へ、フォームシカとフィームシカの所へ行かう。だがね。一つ僕の言ふことを聞いといてくれたまへ。向うの家もノンセンスなら、こつちの家もノンセンスだ……しかしあつちのノンセンスの方が――十八世紀のノンセンスの方が、こつちの二十世紀よりか露西亞の本質に近いやうだね。ぢや、失敬。僕は醉つぱらつてゐるが……どうか咎めないでくれたまへ。ああ、もう一つ聞いて貰ひたいことがある！　僕の妹だね……スナンドゥーリヤだね……あれくらゐ善良な優しい女は、この世にまたと二人ないよ。ところがあれは弁むしで、名前までスナンドゥーリヤだ。世の中つて萬事さうしたものさ！　尤も、あれにはそれくらゐの名前が丁度い〻ところだらう。君は聖スナンドゥーリヤといふのが誰だか知つてゐるかね？　それは方々の牢屋を歩き廻つて、囚人や病人の傷を直してやつたといふ、德の高い婦人なんだよ。だが、しかし、さやうなら！　ネジダーノフ君――可哀さうな男、さやうなら！　それからそこの將校さん……ふう！　氣難かしやさん！　さやうなら！」彼は跛を引いてよろよろしながら『綠島』をさして歩きだした――マルケーロフはネジダーノフと一しよに、馬車を預けて置いた旅籠屋を搜し出して、馬をつけるやうに命じた

――そして三十分の後には、もう街道づたひに馬車を走らせてゐた。

二

空には低い雲が一面に擴がつてゐた――邊りはまつ暗闇といふほどでもなくて、道の上に印せられた轍の跡が青白く輝きながら、行く手に見透かされたけれど、右も左もうつかりぼうつと翳つて、一つ〳〵の物の輪廓が、もや〳〵した大きなしみに溶けあつてゐた。それはどんよりした不確かな夜であつた。風は時々さつと、灰色の流れのやうに吹き起こつて、雨の薫りと廣い麥畠の匂ひを送つて來た。目じるしになつてゐる樫の木立ちを通り過ぎて、村道の方へ曲がつたとき、樣子はまう〳〵怪しくなつてきた。細い小道が時々まるで見えなくなるのであつた……馭者は車の歩みを緩めた。

「どうか道を迷はなければいゝが？」それまで默つてゐたネジダーノフが口を開いた。

「なに！　大丈夫まよやしません！」とマルケーロフが言つた。「一日に災難が二つ起こることはないからね。」

「二つつて、もう一つ何か災難があつたんですか？」

「何か？　まる一日だいなしに潰してしまつた――あれなんかあなたは何とも思はないんですか？」

「さう……無論……あのゴルーシキンの奴！　あすこであんなに酒を飲むんぢやなかつた。いまに頭が痛い……たまらなく。」

「僕はゴルーシキンのことを言つてるんぢやありません。あの男は少くとも、金をよこしたからね。

してみると、僕らの訪問も何かの役に立つたといふもんです！」

「それぢや君は、あのパークリンが自分の親類の……え〳〵、何と言つたつけなあ……鸚鵡のところへ引つぱつて行つたのを、忌々しく思つてゐるんですか？」

「そんな事なんか、忌々しく思ふこともなければ……また嬉しがることもいりませんよ。僕はあんな玩具に興味を持つやうな、そんな種類の人間ぢやありませんからね……僕の仄めかしたのは　そんな災難ぢやないです。」

「ぢや、一體どんな災難ですか？」

マルケーロフは何とも答へないで、たゞ自分の坐つてゐる片隅で、ちやうど外套でもよく包まうとするやうに、少しばかりごそ〳〵と身動きしたばかりである。ネジダーノフは、よくその顏を見分けることが出來なかつた。たゞ髭が黑い線となつて、横に一筋きは立つてゐるばかりであつた。しかし彼は今朝早々から、マルケーロフの心の中に、何か妙に籠つたやうな、祕密の焦燥を感じたので、そつと觸れずに置く方がいゝと思つたのである。

「ねえ、セルゲイ・ミハイロギッチ」と彼は少したつて言ひだした。「一たいあなたは冗談でなしに、あのキスリャコーフ氏の手紙に感心してるんですか？　あなたが今朝讀んでみろと言つて渡した手紙ですよ。あんなものは、かう言つちや失禮だけれど――あんなものは、たゞのがらくたですよ！」

マルケーロフは身をそらした。

「第一に。」と彼は腹だたしげな聲で言つた。「僕はこの手紙に關して、全然あなたと意見をともにす

る譯にゆきません――僕は非常に立派な……誠實なものだと思ひます！　第二に、キスリャコーフは苦勞してゐます。働いてゐます――それに何より肝腎なのは、信じてゐます。われ／＼の事業を信じてゐます。かーくー命を信じてゐます！　僕は一つあなたに言はなくちやならんことがあります、アレクセイ・ドミートリッチ――僕の見るところでは、あなたはわれ／＼の事業に對して、冷淡になつて來たやうですね。あなたは信じてゐないんです！」

「あなたはどこからそんな事を斷定するんです？」ネジダーノフはのろ／＼とかう言つた。

「どこからつて？　あなたの言つたりしたりすることで、すつかり分かりますよ！　今日ゴルーキシンの所で、たよりになるような現實的要素を發見しないと言つたのは、あれは一たい誰です？　あなたぢやありませんか！　そいつを見せてくれと要求したのは誰でせう？　やはりあなたです！　それからあなたの友人のパークリン、あのおつちよこちよいの追從屋が、目を空へ向けながら、われ／＼の中で犧牲を捧げ得るものは誰一人ないと言つた時、それに合ひ槌うつて狐りに詔いて見せたのは誰です？　一體あなたぢやなかつたのですかね？　あなたは自分のことを何とでも吹聽なさるがいゝ、すきなやうに自惚れたらいゝでせう……それはあなたのご自由ですからね……しかし僕は人生の美をなしてゐるものを一切斥けて――戀ひの幸福さへも擲つて、自己の信念に奉仕し、かつそれに叛くまいとしてゐる人間を知つてをります！　が、まあ、あなたは今日……勿論それどころぢやないでせうよ！」

「今日？　なぜ今日に限るんです？」

「まあ、お願ひだから、空つとぼけるのはよして貰ひませう、あなたは幸福なドン・ジュアンぢやないか、戀ひの勝利者ぢやないか！」馭者の事をすつかり忘れて、マルケーロフはかう叫んだ。彼は馭者臺からふり向かうとしなかつたが、何もかもすつかり聞きとつたに相違ない。尤もこの瞬間、馭者にとつては、自分の後ろに坐つてゐる『旦那方』の押し問答より、道の方がずつと氣になつてゐたのである――彼は用心ぶかくといふより、寧ろ臆病なくらゐ中馬を押し鎭めようとした。馬はしきりに頭をふりながら、尻の方へぐつと力を入れ、どこかの崖道をおりて行つた。こんな崖道がこゝいらにあらうとは、夢にも思ひがけなかつたのである。

「失敬ですが――僕は何だかあなたの言ふことが分かりません。」とネジダーノフは言つた。

マルケーロフはわざとらしく毒々しく笑つた。

「僕の言ふことが分からない！　はゝゝ！　僕はすつかり知つてゐますよ、あなた！　昨日あなたが誰と戀ひの打ち明けをやつたか、といふ事も知つてゐれば、あなたがその立派な見てくれと雄辯で、誰を虜にしたかといふことも、誰があなたを自分の部屋へ……夜の十時すぎに引つぱり込むかといふことも、みんなちやんと知つてゐますよ！」

「旦那さま！」不意に馭者がマルケーロフに聲をかけた。

「ちよつと手綱を持つて下さいませんか……一つ降りて見て參りませう……どうも道を迷つたやうで……何だかそこに溝が掘れてゐるらしいので……」

果たして、馬車は殆ど横倒しになつてゐた。

マルケーロフは馭者の渡した手綱を握つたまゝ、依然として大きな聲で話をついた。

「僕は少しもあなたを責めてるんぢやありませんよ、アレクセイ・ドミートリッチ！　あなたは機會を利用しただけなんだから……尤もな話しです。たゞ僕の言ふのは、あなたが仲間の運動に冷淡になつたのも、敢て怪しむに足りないといふ迄の事です。僕は忌憚なく言ひますが、あなたの頭の中は、まるで別なことで一ぱいなんですからね。ついでに、僕自身の意見としてつけ加へて置きますが、若い娘はどういふものを好くか、どういふものを望んでゐるか、それをちやんと前から見ぬく才能を持つた男は、一體どこにゐるんでせうなあ！」

「僕は今やつとあなたの心持ちが分かりました。」とネジダーノフが言ひだした。「あなたの煩悶の原因も分かつたし、僕らの見ぼりをして、あなたに内通した人間も想像が出來ます……」

「しかも、それは別に何もさうした價値があるからぢやない。」ネジダーノフの言ふ事が聞こえないやうな振りをして、わざと一語々々歌ふやうに引き伸ばしながら、マルケーロフは語り續けた。別に非凡な精神や、肉體の長所がある譯ぢやない……何の！　それはたゞ……すべての父なし子に與へられた忌々しい幸運なんだ……すべての私生兒の……」

マルケーロフは、最後の一句を引き千切つたやうに、早口に言つてのけ――そして、急に麻痺したやうに口を噤んだ。

ネジダーノフは闇の中でさへ、見るみる顏がまつ青になつて、頰がひく〳〵と細かく痙攣するのが感じられた。彼はマルケーロフに飛びかゝつて、その喉をひつ掴まうとしたが、やつとの事でそれを

抑へつけた……『この侮辱は血で洗はなくちやならない、血で……』

「やつと道が見つかりました！」突然、右手の前輪の邊りに姿を現して、馭者がかう叫んだ。「ちつとばかり間違ひましたよ、左の方へとり過ぎたんで……もう大丈夫！　一息で乘りつけますよ。家まで一里もございますまい。もう少しご辛抱ねがひます！」

彼は馭者臺へ登つて、マルケーロフから手綱を受け取ると、中馬を脇の方へ捩ぢ向けた……馬車は二度ばかり激しくぐらついたと思ふと――やがて次第になだらかに、次第に早く走りだした。靄は少し薄れて、上の方へあがつたやうに思はれた――かすかに塵りの匂ひがして、前の方に丘のやうなものが浮き出した。ふと灯が一つ瞬いたかと思ふと……すぐ消えて……また一つ閃いた……犬が吠えはじめた。

「うちの村でございます。」と馭者が口を開いた。「えゝ、このど畜生め！」

灯は次第に繁く行く手に現れては、こちらを指して走つて來る。

「あゝいふ侮辱をうけた後では、」たうとうネジダーノフがかう言ひだした。「僕はあなたの家で泊る譯に行きません、それは當然了解して下さるでせう、セルゲイ・ミハイロヴッチ。だから、實に不愉快な話しですが、いま僕のとるべき方法としては、あなたの家へ着いたら、すぐにこの馬車を貸して貰つて、さつそく町まで歸るより他はありません。明日になつたら、何とかして家まで歸る方法が考へつけるでせう――その後で、僕の方から何とか挨拶しませう。それは多分あなたも覺悟してゐられることと思ひますが。」

マルケーロフはすぐに返事をしなかつた。

「ネジダーノフ君」突然、あまり高くはないけれど、絶望したやうな聲で、彼はかう言つた。「君、後生だから僕の家へはいつてくれ給へ——せめて膝をついて君に謝罪さして貰ふ——たゞそれだけのためでもいゝから！　ね、ネジダーノフ君！　忘れてくれ給へ……僕の氣ちがひ染みた言葉を忘れてくれ！　あゝ、僕がどれくらゐの不幸な身の上だか、せめて一人でも察してくれるものがあつたらなあ！」マルケーロフは拳を固めて、われとわが胸を打つた——と、その中で何か呻く様な音がした。

「ネジダーノフ君！　どうか寛大な氣持ちになつてくれ！　さあ、手をくれ給へ……僕を許すと言つてくれ給へ。厭だなどと言はないで！」

ネジダーノフは彼に手をさし伸べた——思ひ切りの惡さうな様子であつたが、とにかくさし伸べた。マルケーロフは力まかせにそれを握りしめたので、こちらは思はず聲を立てさうになつた。

馬車はマルケーロフ家の玄關口に止まつた。

「ねえ、ネジダーノフ君。」十五分ばかりだつて、自分の書齋へ落ちついた時、マルケーロフはかう言つた。「どうか聞いてくれ。(彼はもうネジダーノフに始終『君僕』ばかりで話したした、この思ひがけない『君僕』の中には——とつぜん幸運な競走者を發見して、ずた〳〵に引き裂いて殺したいくらゐに感じながら、たつた今、あゝいふ侮辱を與へた——その相手に對するこの『君僕』といふ呼びかけの中には、斷乎とした堅い諦めがあつた、つゝましい悲痛な哀願があつた、何か一種の權利があつた……ネジダーノフは自分でもマルケーロフに『君』と呼びかけることによつて、彼の權利を認めた

のである。)

「まあ聞いてくれ！　僕はたつた今君に向つて、自分は愛の幸福を斷念した、たゞ〳〵自己の信念にのみ奉仕するために、この幸福を拋擲したと言つたが……それは出たらめだ！　痩せ我慢だ！　僕は一度もそんな幸福を與へられた事がないんだから、何も拋擲するものなんかない譯だ！　僕は何の才能もない人間として生まれたんだから、さういふ人間として生涯を終るんだ……事によつたら、それが當然なのかも知れない。なぜといつて、僕はさういふ方に素質をもつてゐないんだから、つまり僕の使命は別な所にある譯だ！　もし君がその兩方を結合することが出來るとすれば……つまり愛し愛されながら……それと同時に、事業にも奉仕することが出來れば……さうすれば君は果報ものだよ！　僕は君を羨む……しかし僕自身は駄目だ。僕には出來ない。君は仕合はせものだ！　君は仕合はせものだ！　しかし僕には出來ない。」

マルケーロフは低い椅子に腰をかけて、頭を垂れ、兩手を鞭のやうにだらりとさせたまゝ、低い聲でかう言つた。ネジダーノフは一種もの思はしい注意に沒頭しながら、彼の前に立つてゐた。そしてマルケーロフに果報ものとそやされながらも、自分ではそんな風に考へもしなければ、感じもしなかつた。

「僕は若い時あの女に騙されたんだ……」とマルケーロフは言葉をついだ。「それは正直な娘だつたが、しかしやつぱり僕に叛いたんだ……しかも誰に見かへたのだと思ふ？　獨逸人だ！　副官なのだ！　ところがマリアンチは……」

彼は言葉を休めた……彼ははじめて彼女の名前を口にした。するとその名は彼の唇を焼くかのやうであつた。

「マリアンナは僕を騙しはしなかつた。彼女は正々堂々と、僕がすきでないと言ひきつたのだ……それにまた、すきになりようがないぢやないか？　ところで——彼女は君に身を任せた……しかし、それがどうしたといふのだ？　マリアンナだつて自由な身ぢやないか！」

「まあ、待つてくれ給へ、待つてくれ給へ！」とネジダーノフが叫んだ。「君は全體何を言ふのだ？身を任せたとは何のことだ？君の妹さんが、どんな事を手紙に書いたか知らないが、僕は誓つて言ふ…」

「僕は何も肉體上のことを言つてるんぢやない、精神的に身を任せたんだ。—心から、魂の底から。」とマルケーロフは抑へた。ネジダーノフの叫びが、なぜか彼の氣に入つたらしかつた。「それは結構なことだよ。ところで僕の妹は……無論、僕を悲しませようといふ氣ぢやなかつたのだ……といつて、つまりそんな事はあれに取つてどうでもいゝのだ。しかし、あれはきつと君を憎んでるに相違ないよ——それにマリアンナもやはりね。あれは別に嘘をついた譯ぢやない……尤も、あれの事なんかどうでもいゝさ！」

『さうだ。』とネジダーノフは腹の中で考へた。『あの女は僕ら二人を憎んでゐる。』

「しかし何もかもよくなつて行くのだ。」とマルケーロフは體の位置を變へずに語を續けた。「今こそ僕の手足からは、最後の枷が取りのけられたのだ。今こそ——もう僕の邪魔をするものはありやしない！　君もね、ゴルーシキンが分からずやだなんて氣にかけないがいゝ。そんな事は何でもない

よ。それにキスリャコーフの手紙……あれは滑稽かも知れない……實際。しかし肝腎な點に眼をつけなくちやいけないよ。あの男の言葉によると……到る處ですべて準備が出來てゐるさうだ。尤も、君はそれさへ本當にしないかも知れないね？」

ネジダーノフは何とも答へなかつた。

「或ひは、君の考へが本當かも知れない。しかし、何ものも、本當にすつかり何もかも、準備の出來る機會を待つてゐたら——いつまでたつても、事をはじめる時期は到達しやしない。そんなに前からありとあらゆる結果を秤にかけてみたら、その中にはきつと何かよくないものを混つてゐるだらうさ。早い話しが、われ〳〵の先驅者が農奴解放を計畫した時——一體どうだつたと思ふ？　この解放の一結果として、高利貸地主といふ新しい階級が現れるのを、はたして彼等は豫め見拔いてゐたらうか、この連中は百姓にひねた裸麥を一石六留で賣りつけながら、百姓たちの方からは、(かう言つて、マルケーロフは指を一本折つた)、第一、その六留に對するだけの勞働と、なほその上に(マルケーロフは二本目の指を折つた)、新しい裸麥をまる〳〵一石ふんだくるのだ——それから「マルケーロフは二本目の指を折つた)、おまけに百姓たちの體から、最後の血まで吸ひ取るんだからなあ！　實際、かういふ事はわが解放運動者たちも、前から見拔くことは出來なかつたんだ——さうだらう！　が、それにしても、たとへ彼らがちやんと見拔いてゐたにしても、すべての農奴解放を決行したのは、實にいゝことだよ！　だから僕も……決心したのだ！」

ネジダーノフは物問ひたげに、怪訝さうにマルケーロフを見つめた。しかしこちらに視線を轉じ

て、隅の方へ向けた。その眉は八の字によせられて、瞳を蔽ひ隠してゐた。彼はきつと唇を結んで、髭を嚙んでゐた。

「さうだ、僕は決心した！」毛むくぢやらな拳で、力まかせに膝をたゝいて、彼はかう繰り返した。

「僕は強情ものだからな……僕が半分小露西亞人なのも故なきに非ずさ。」

それから彼は立ち上がつて、まるで力ぬけでもしたやうに、足を引きずり引きずり、寢室へはいつて行つた。やがて硝子いりのマリアンナの小さい肖像を持つて來た。

「これを君に進呈しよう。」彼は悲しげな、とはいへ、なだらかな聲で口をきつた。「これはいつだつたか僕が描いたものだ。繪はまづいけれど、まあ見てくれ給へ、どうやら似てるだらう――（鉛筆で描いた横顔の肖像は、全くよく似てゐた）これを君に進呈しよう。これが僕の形見分けだ。この肖像畫と一しよに僕の權利……ではない……そんなものは初めからなかつたんだ……つまり、分かるだらう――一切のものを君に讓るよ、僕は何もかも君に讓り渡してしまふ――あの人も渡してしまふ。あの人は、君、いゝ娘さんだよ……

マルケーロフは口を噤んだ。彼の胸は目に見えて波うつてゐた。

「取つてくれ給へ。君は僕に腹を立てちやゐないだらう？　それぢや取つてくれ。もう僕は今さらなんにも……こんなものはいらないんだから。」

ネジダーノフは肖像を受け取つた。しかし、奇怪な感じが彼の胸を絞めつけるのであつた。彼はこの贈りものを受け取る權利がないやうな氣がした。もしマルケーロフが自分の胸の中を見抜いたら、

或はこの肖像畫を渡さなかつたかも知れない。かう思ひながらネジダーノフは、黑い枠に細い金紙の縁をつけた、この小さな圓いボール紙の一片を持つたまゝ、それをどうしたらいゝか分からなかつた。『實際、今おれの手の中には、一人の人間の全生命が籠つてゐるのだ。』といふ考へが彼の心に浮かんだ。マルケーロフがいかなる犧牲を捧げようとしてゐるのか、それは彼にもよく分かつた。然しなぜだらう、なぜほかの人でなく、この自分に捧げるのだらう？　では、この肖像を返してしまはうか？　いや！　それは一層たちの悪い侮辱になるだらう……それにこの顏は、彼にとつて貴重なものではないか、彼はこの人を愛してゐるのではないか！

ネジダーノフは幾分心内の恐れを感じながら、マルケーロフに目を上げた……相手が自分を見つめてはゐないだらうか――自分の想念を捕へようと努めてるのではなからうか？　しかし、マルケーロフはまたもや片隅へ目を据ゑて髭を嚙んでゐた。

老僕が手に蠟燭をもつて、部屋の中へはいつて來た。

マルケーロフはぴくりとなつた。

「もう寢なくちや、アレクセイ君！」と彼は叫んだ。「朝は晩より利口もの、といふ事があるからな。明日は馬車の用意をさせるから、君も家へ歸りたまへ――ぢや、失敬。」

「爺さん、ぢやお前も失敬！」突然、彼は老僕の方へふり向いて、その肩を叩きながら、かう言ひた した。「どうかおれを悪く思はないでくれ。」

老人は危く蠟燭をとり落とさないばかりに驚いた。そして、主人の方へそゝがれた彼の目は、いつ

もの懶げな表情より別なもの――いな、より多くのものを現してゐた。

ネジダーノフは自分の部屋へ歸つた。彼は何となく厭な心持ちがした。頭は酒のために、さつきよりなほ痛んで、耳ががん〳〵鳴つた。そして目をじつと塞いでゐるのに、ものの形が絶えずちら〳〵した。ゴルーシキン、番頭のワシカ、フォームシカ、フィームシカ――かういふものが彼の目の前でくる〳〵廻轉した。遠くの方にはマリアンナの姿が、何となく信頼しかねるといつたやうな風で、傍へよるのを躊つてゐる。彼は自分の言ふことなすことが悉く――妙に空々しいお座なりで、何の役にも立たない、甘つたるい出たらめのやうに思はれた……しかも、本當に自分のなすべきこと、本當に自分の目ざして進むべき所――それはどこにあるやら皆目眞暗であつた。まるで及びもつかない地下の國に埋められて、十の錠前で固められてゐるやうに……

彼はしつきりなしに、起き上がつてマルケーロフの所へおりて行きたいといふ衝動を感じた。彼に向かつて『この贈りものを受け取つてくれ――元へ納めてくれ！』と言ひたかつたのである。

「ふうつ！　何て厭なものだらう――この人生は！」たうとう彼はかう叫んだ。

彼は翌朝はやく出發した。マルケーロフはもう百姓達に取り卷かれながら、入り口の階段に立つてゐた。彼が自分で呼び集めたのか、それとも彼らが自分でやつて來たのか――ネジダーノフはたうとう分からずじまひであつた。マルケーロフは恐ろしく簡單に、そつけなく別れを告げた……しかし彼は一同に向かつて、何やら重大な報告をしようとしてゐるらしかつた。老僕はやはりそこでも、例の依然たる目つきをして突つ立つてゐた。

馬車は間もなく町を走り抜けて、原中へ出ると、勢ひよく疾驅しはじめた。馬は昨日のと同じものであつたが、しかし馭者は――ネジダーノフが金持ちの家に住んでゐるためか、それとも何かほかに考へがあつたのか、たんまり酒代が貰へるものと當てにしてゐた。誰でも知つてゐる通り、馭者が一杯ひつかけて、そのうへ間違ひなく後の一杯を當てにしてゐる時は、馬が氣持ちよく走るものである。それは寒いほど涼しい日であるが、やはり六月の日和だつた。高い空を勢ひよく走る雲、強いむらのない風、それに道は昨日の雨に打たれて埃をたてず、川楊はざわめきつ、輝きつ、靡きつして――すべてのものが動き、すべてのものが飛んでゐる――鶉の鳴き聲が綠の谷を越えて、はるかな丘から弱々しい口笛のやうに聞こえてゐた。それはこの鳴き聲に翅があつて、自分で飛んで來るかのやうであつた――鴉の群れは日光に羽をつや〳〵しく光らしてゐる。何か黑い蚤のやうなものが、まつ裸な一直線の地平に添うて動いてゐる……それは、百姓が休閑地を起こしてゐるのであつた。

しかしネジダーノフは、かういふものを何一つ目にも止めずに、どん〳〵と通り抜けた……彼はビャーギン家の領地へ着いたのにさへ、氣がつかないほどであつた――それほど彼は自分のもの思ひに耽つてゐたのである……

とはいへ、邸の屋根が見え、二階が見え、二階にあるマリアンナの部屋の窓が見えた時、彼は思はず身慄ひした。

『さうだ、』と彼は獨りごちた――すると心の中が急に暖かくなつてきた。『あの、男の言つた通りだ――あれはいゝ娘だ――おれはあの娘を愛する。』

二二

彼は手早く着換へをして、コーリャの授業に出かけて行つた。――食堂でシビャーギンに出會つたが、彼はつめたい慇懃な會釋をして、齒の間から押し出すやうに、「旅行は面白かつたですかね？」と言ひすてゝ、自分の書齋へはいつてしまつた。この大政治家はその大臣級の頭の中で、暑中休暇が終るや否や、『あまりに赤色すぎる』この家庭教師をさつそく彼得堡（ペテルブルク）へ送り返すことにして、まづそれまではじつと監視してゐよう、とかう決心したのである。

『今度はおれもしくじつた。』（ジュスミーズウラマヌウルーズセットフオナシ）と彼は腹の中で考へた。「尤も……が、これより悪くなることはあるまい。」ネジダーノフに對するヴレンチーナ・ミハイロヴナの感情は、もつと遙かに決定的な、斷乎たるものであつた。彼女はもう我慢できなかつたのである……あの男が、あの青二才が――自分を侮辱するなんて……かう彼女は思つたのである。マリアンナの想像は果たして誤らなかつた。彼女とネジダーノフの話しを廊下で立ち聞きしたのは、全くヴレンチーナ・ミハイロヴナであつた……名家の貴夫人もかういふ態度を、格別あさましいと思はなかつたのである。彼の不在中、二日間といふもの――彼女は『輕はずみ』な姪に向かつて、別段なんにも言はなかつたけれど――自分は何もかも承知してゐるが、しかし腹なんか立てはしない、なぜといつて、半分は輕蔑し、半分は惱殺してゐるからだ、と言つたやうな氣持ちを、しつきりなしに匂はせてゐた……マリアンナを眺めたり、話しをしたりする度に、強ひて壓へつけたやうな心内の侮蔑が彼女の頰に溢れ、何となく嘲けるやうなそれと同時に

憐むやうなあるものが、彼女の眉を釣り上げるのであつた。その美しい目はもの柔かな疑惑と、憂はしげな嫌惡の色を浮かべながら、この高慢な娘の方へそゝがれた。さん〴〵『突飛な空想や、度はづれな言行』で人を驚かした揚げ句、どこの馬の骨とも知れぬ、まだ學校を卒業もしない學生と、暗い部屋の中で……接吻するまでになつて了つた！

哀れなるマリアンナよ！　彼女の嚴かな誇りに充ちた唇は、まだ誰の口づけをも味ははなかつたのである。

もつとも夫に向かつては、ヴレンチーナ・ミハイロヴナも自分の發見を仄めかさなかつた。彼女はたゞ夫のゐる前で、マリアンナに何か簡單な言葉をかける時、話しの内容とは少しの關係もない、意味ありげな微笑を浮かべるだけで滿足した。ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、兄に手紙を書いたことを後悔したくらゐである……しかし結局、彼女は手紙を書かないで、後悔せずに濟ますよりも、それを實行して後悔した方がましだと決めた。

ネジダーノフは食事の時に食堂で、ちらとマリアンナを見たばかりである。彼女は少し痩せて、顏が黄ろくなつたやうに思はれた。彼女はその日不器量に見えた。しかし、ネジダーノフが部屋へはいるが早いか、すばやくその方へ投げた一瞥は、彼の心の底まで浸みこんだ。その代はりヴレンチーナ・ミハイロヴナは『お芽出たう！　結構ですわ！　隨分うまくおやりでしたね！』と心の中でのべつ繰り返してゐるやうな目つきで、ちよい〳〵彼の方へ視線を向けた――が、それと同時に、マルケーロフにあの手紙を見せて貰つたかどうか、それを彼の顏色から讀み取らうと努力してゐた。しかし結

局、見せて貰つたに相違ないと決めてしまつた。

ソローミンの管理してゐる工場へ、ネジダーノフが出かけたといふ事を知ると、シビャーギンはこの『あらゆる點に於て興味ある製作所』のことを、根堀り葉堀りし始めた。けれど間もなく、この青年がそこでなんにも見なかつたのを確かめると、もの〳〵しげに口を噤んだ。こんな青二才から筋道のたつた答へなど期待したのを、自分で責めるやうな樣子であつた！　食堂から出がけにマリアンナは折を見てネジダーノフに囁いた。

「あの古い白樺の林で、わたしを待つてて頂戴、ほら、庭のはづれにあるでせう。わたし隙のでき次第、すぐに行きますから。」

ネジダーノフは『この人も僕に身内のやうな言葉づかひをしてゐる――一度あの男と同じやうに。』と考へた。それは彼にとつて幾分うす氣味わるくもあつたが、それでもやはり嬉しかつた！……實際、もし彼女が急にまた他人行儀な言葉をつかつて、自分の傍から遠ざかつて行つたら、それはずゐぶん奇妙に思はれるであらう――それどころか、不可能にさへ感じられたに相違ない……

それは自分にとつて大きな不幸だ、と彼は感じた。果たして、彼はマリアンナに戀ひしてゐるのだらうか――それは彼自身にまだ分からなかつた。しかし彼女が自分に取つて貴い――親しい――必要なものになつた……さうだ、何よりもまづ必要なものになつた、といふことだけは――彼も全存在をもつて感じたのである。

マリアンナの指定した森は、百本ばかりの古い白樺の老木で、おもに枝を垂れる種類のものであつ

た。風はまだやまないで、太く束になつた長い枝が、まるでおどろにふり亂した髪のやうに、ゆれつ揉まれつしてゐた。雲は依然として高く急に走つてゐた。そして、その中の一つが太陽にかゝると、あたりのものが悉く――暗くなるといふよりも寧ろ單調な色になつた。けれどその雲が飛びすぎると――また突然あたり一面に鮮かな光りの斑點が、もの狂はしく亂れ動く。そして影の斑紋と入り交じりこんぐらかつて、面白いまだら模樣を作りだす……響きと動きはやはり元のまゝであつたが、妙にのどかな喜ばしさが、その中に加はつた。それと同じくらゐ喜ばしい横暴な力をもつて、暗く波だつた心の中へ情慾が流れ込むのであつた……實際ネジダーノフはさういふ心を胸に祕めて來たのである。

彼は白樺の幹にもたれかゝつて――待つてゐた。彼は自分が何を感じてゐるのやら、よく分からなかつた――それに知らうとも思はなかつた。たゞマルケーロフの家にゐた時より、もつと恐ろしく――もつと樂な氣持ちがした。彼は何よりも先に、彼女と會つて話しがしたかつた。突然二つの生きた存在を結び合はす絆が――もう彼を捕へたのである。ネジダーノフは船が岸につく時、船の中から波止場へ投げ出される鋼を思ひだした……もうその鋼は杭に卷きつけられて――船足はとまつた……

港に着いたのだ！　有り難い！

彼は不意に身慄ひした。女の着物が遙かな小道にちらつき始めた。彼女だ、しかし自分の方へ來てゐるのか、それとも自分から去つて行くのか――それは始め分からなかつたが、やがて光りと影の斑紋が、彼女の體を下から上へすべつてゆくのを見たとき……こちらへ近づいて來るのだなと悟つた。

もし彼女が離れて行くのだつたら、その斑紋は、上から、下へすべり落ちた筈である。それからなほ幾秒かの後――彼女は彼の傍に、彼の前に立つてゐた――愛想のいい生き〳〵とした顏つきで、目に優しい光りを湛へ、唇によわ〳〵しい、けれども樂しげな微笑を浮かべながら。彼はさし伸べられた兩手を取つた――けれど、とみには言葉も出なかつた。彼女もなんにも言はなかつた。彼女は恐ろしく早足に歩いたので、少し息を切らしてゐたが、相手が自分の來たのを喜んでくれるのが、自分でも嬉しくてたまらなかつた。

彼女がまづ口をきつた。

「ね、どうなの、」と彼女は言ひだした。「早く聞かして頂戴、あんたが二人でどんな風に決めたの？」

ネジダーノフは面喰つた。

「決めたつて……一體、いますぐ、決めなくちやならないの？」

「まあ、わたしの心持ちは分かるでせう――どんな話しをしたのか聞かして頂戴。誰に會つて來て？ ソローミンさんと近づきになつて？ 話して頂戴、すつかり……何もかも！ でも、待つて頂戴、あつちへ行きませう、もつと先へ。わたしこゝの案内をよく知つてるのよ……向うの方が目に立たなくていゝわ。」

彼女はぐん〳〵男をひつぱつて行つた。彼は背の高い疎らな枯草の中を傳つて、その後から音なしくついて行つた。彼女は自分の思ふ所へつれて行つた。そこには嵐で倒れた大きな白樺が横たはつてゐる。二人はその幹に腰をおろした。

「さあ、話して頂戴！」と彼女は繰り返したが、すぐまたかう附け足した。「わたし、あなたに會へて、どんなに嬉しいか知れないわ！ わたしはね、この二日の日がいつまでたつても、お了ひにならないやうな氣がしたの。ねえ、わたしいよ〳〵確かに分かつたわ――ヴレンチーナ・ミハイロヴナは二人の話しを立ち聞きしたのよ。」

「あの人はその事を、マルケーロフに手紙で知らしたんだよ。」とネジダーノフは言つた。

「あの人に?!」

マリアンナは口を噤んだ、次第に顏をまつ赤にして行つた――それは恥かしいからでなく、もつと強い別な感情のためであつた。

「本當に、意地の悪い厭な女ね！」彼女はゆる〳〵とかう囁いた。「あの人にそんな事をする權利はありやしない……でも、どうだつていゝわ！ さ、話して頂戴、話して。」

ネジダーノフは話しをはじめた……マリアンナはまるで化石したやうに、じつと注意ぶかく聞いてゐた。たゞネジダーノフが急ぎすぎて、詳しい點に立ち入らうとしないのに心づいた時だけ、その話しを遮るばかりであつた。尤も彼の旅行の詳細は皆が皆まで、同じやうに彼女の興味をひいた譯でもなかつた。フォームシカとフィームシカの話しには笑ひ出したけれど、そんな事は彼女の注意をひかなかつた。彼らの生活は餘りに緣遠かつたのである。

「まるでネブカドネサル（バビロンの王）の話しでも聞いてるやうね。」と彼女は批評した。

けれど同志の事となると、マルケーロフの言つた事ばかりでなく、コルーシキン輩の考へてゐること

とでさへ(彼女はこの男がどういふ代物か、すぐに悟つたのである)、一生懸命に聞きたがるのであつた。殊にソローミンの意見や、彼自身がどんな人物かといふことになると、惱ましいほどの好奇心を感じた。『いつ？一體いつ？』この疑問が絶えず彼女の頭の中を渦卷いて、ネジダーノフの話してゐる間ぢう、のべつ彼女の唇にのぼつた。ところが彼は、この疑問に確實な答へを與へ得るものを、すべて妙に避けるやうな風であつた。そして、マリアンナにとつて最も興味の少いデテールに、ことさら力を入れてゐるのに、自分でも氣がつくやうになつた……やゝともすれば――いつとはなしに、さういふデテールへ戻つて行くのであつた。ユーモアに富んだ敍述的部分は、彼女の心に焦燥の念を喚び起こした。幻滅、乃至憂欝の調子が、彼女に情ないやうな感じを與へた……絶えず『運動』の方へ、『問題』の方へ、話しを持つて行かなければならなかつた。かういふ話しになると、どんなに多辯を弄しても、彼女を疲らすやうなことはなかつた。ネジダーノフは自分がまだ大學生にならない前に、ある心安い知人の別莊で一夏すごした時、その家の子供らにお伽噺をして聞かせたことを、ふと思ひ起こした。彼らもやはり描寫的敍述や、個人的感覺の表現などを面白がらなかつた……やはり事實と筋を要求したのである！　マリアンナは子供でこそなかつたけれど、その感情の單純で率直なところは、子供に似通つてゐた。

ネジダーノフは心から熱心にマルケーロフを褒めそやした――そしてソローミンのことを、特別な同情をこめて批評した。殆ど感に堪へたやうな言葉づかひでこの人の話しをしながら、ネジダーノフは心の中で自問した――一體どういふ譯で、自分はこの男を、こんなに高く評價するのだらう？　格

別とりたてゝ聰明な意見を吐かなかつたではないか。時によると、彼の言葉は全然自分の信念に矛盾したくらゐである……『バランスの取れた性格なんだ。』かういふ考へが彼の心に浮かんだ『さうなのだ、分別のしつかりした、フィームシカのいはゆる涼しい人間なのだ――大きな人物なのだ。落ちついた堅固な力なのだ。あの男は自分に何を必要なのか知つてゐて、自己を信頼しきつてゐる――從つて、他人にも信頼の念を起こさせる。不安といふものがない……、バランスがとれてゐる！　バランス！……これが一番肝腎な點なのだ、つまりこいつがおれに缺けてゐるのだ。』かういふもの思ひに沒頭したネジダーノフは、いつしか口を噤んだ……突然、彼は自分の肩に手が觸れるのを感じた。

彼は頭を上げた。マリアンナが氣づかはしげな、優しい眼ざしで彼を眺めてゐる。

「ねえ！　あんたどうしたの？」と彼女は訊ねた。

彼はその手を肩からおろして、はじめて小さな、けれどしつかりした手を接吻した。マリアンナは、どうしてこんな優しいしぐさを思ひついたのかと、びつくりしたやうに輕く笑ひ聲を立てた。やがて、今度は自分でも妙に考へ込んでしまつた。

「マルケーロフさんはあなたにヴレンチーナ・ミハイロヴナの手紙を見せて？」たうとう彼女はかう訊いた。

「あゝ。」

「で……それからどうして？」

「あの男が？――あれはこの上なく高潔な、自己犧牲の精神に充ちた男だね！　あの男は……」ネジ

ダーノフはマリアンナに、肖像畫のことを言はうとしたが——自分で自分を抑へて、たゞから繰り返した。「この上なく高潔な人物だ！」

「そりやさうよ、全くさうよ！」

マリアンナはまた考へ込んだ——と不意に、二人の腰かけがはりを動めてゐる白樺の幹の上で、ネジダーノフの方へふり向きながら、生きいきとした調子で言ひだした。

「で、結局どんな風に決めて？」

ネジダーノフは肩を竦めた。

「僕、もうさう言つたぢやないの、まだ——當分——なんにも決めてないつて。まだ待たなくちやならないんだよ。」

「まだ待つの？……何を？」

「最後の指令をさ。」（『おれは出たらめを言つてゐる』とネジダーノフは考へた）

「誰から？」

「やはり、例の……あんたも知つてるだらう……ワシーリイ・ニコラーイッチからさ。それに、オストロドゥーモフの歸りも待たなくちやならないし。」

マリアンナは不審さうにネジダーノフを見やつた。

「ねえ、ちよつと、あんたはいつか、そのワシーリイ・ニコラーイッチを見たことがあつて？」

「見たよ、二度ばかり……ちらとね。」

「どんな人……立派な人？」

「何と言つたらいゝだらう？　今ぢや、あの人が主腦者で——その、一切を切り盛りしてゐるんだよ。僕らの事業は、規律なしにはやつて行けないからね。服從しなくちやならないよ。」『これもみんな出たらめだ。』とネジダーノフは考へた。

「その人はどんな様子の人？」

「どんなつて？——頑丈な、どつしりした、平民的な男で……顏はカルムイク式に頰骨のはつた……粗野な顏だね。たゞ目は非常に生きいきしてるけれど。」

「ぢや、話しつぷりは？」

「話すといふより、寧ろ號令をかけてるんだね。」

「どうしてその人が主腦者になつたの？」

「つまり腹のしつかりした人物だからさ。何物にも讓らうとしないで、もし必要とあれば、人を殺すことさへ辭さぬといふ風だからさ。そんな譯で——みんな恐れてゐるんだよ。」

「ぢや、ソローミンさんはどんな様子をして〻？」暫らくたつてマリアンナはかう訊いた。

「ソローミンもやはり大して美しい方ぢやない。たゞこの男は實に氣持ちのいゝ顏をしてるんだ、單純で正直さうでね。神學生——といつても、質のいゝ神學生の間に、よくあゝいふ顏があるもんだよ。」

ネジダーノフは詳しくソローミンの外貌を話して聞かせた。マリアンナは長く長くネジダーノフを

見つめてゐたが……やがて獨りごとのやうに言つた。
「あんたもやはりいゝ顏をしてるわ。あんたとなら一しよに暮らせさうな氣がしてよ。」
この一ことはネジダーノフを感動さした。彼はまた女の手を取つて――唇へ持つて行かうとした。
「そんなお愛想は少し待つて頂戴。」とマリアンナは笑ひながら言つた――彼女は手を接吻される時に、いつも笑ふのが癖であつた。「あんたはまだ知らないでせう。わたし、あんたに濟まないことをしたのよ。」
「それはどういふ譯で？」
「あの、かうなの――あんたの留守にね、あんたの部屋へはいつたところ――そこに、あんたの卓の上に、詩を書いた手帳が目つかつたでせう……（ネジダーノフはぎくつとした。本當にこの手帳を卓の上へ忘れたのだ。彼は今それを思ひだした）――わたし後悔するわ。實はねえ、どうしても好奇心が抑へきれないで――讀んでしまつたの。あれはあんたの詩でせう？」
「僕のだ。ねえ、マリアンナ！　僕がどれくらゐあんたを愛してるか、どのくらゐあんたを信頼してゐるか、それを何よりはつきり證據だてるのは――あんたに對して殆ど腹を立ててゐないといふ事だ。」
「殆ど？　ぢやほんの少しでも、とにかく腹を立ててるのね？　ついでに言ふけれど、あんたはわたしをマリアンナと呼んでるでせう。だけどそれかと言つて、わたしがあんたをネジダーノフと呼ぶ譯に行かないわ！　アレクセイと呼ぶことにしませうね。ぢや、『親しき友よ、われつひに死に行くとき

は……』といふ句で始まつてゐる詩ね、あれもやはりあんたの作？」
「僕の……僕のだ――たゞお願ひだから、そんな話しはやめておくれ……僕を苦しめないで……。」
マリアンナは首を振つた。
「あれは隨分かなしい氣分のものね……あの詩は。あれはわたしと知り合ひになる前の作でせう、どうかさうであつてほしいわ。だけど、詩としてはよく出來てるのね――わたしの分かる範圍内では、あんたは文學者になる素質がありさうな氣がするわ。だけど、わたしにはちやんと分かつててよ――あんたには文學なんかよりもつと高尚な、もつと立派な使命があるのよ。もつと前なら、そんな事をしてもよかつたんだけれど――つまり、ほかの出來ないやうな時代にね。」
ネジダーノフはすばやく彼女に視線を投げた。
「あんたさう思ふの？　さう、僕もそれに同感だ。あつちで成功するよりも、こつちで破滅した方が遙かにましだからね。」
マリアンナは急につと立ち上つた。
「さうよ、アレクセイ、あんたの言ふ通りよ！」と彼女は叫んだ――すると彼女の顏ぜんたいが歡喜の焰と輝きに燃え上がり、深い胸から湧き起こつた感激に充ち溢れた。「あんたの言ふ通りよ！　だけど事によつたら、わたし達もすぐには破滅しないかも知れないわ。わたし達も成功するかも知れなくつてよ。見てゐらつしやい、わたし達も役に立ちますわ。わたし達の生活が無駄になるやうな事はなくつてよ。わたし達は民衆の中へ行くんたわ……あんたは何か手に職を覺えてて？　知らない？

まあ構やしないわ――わたし達働きませう、わたし達の同胞に自分の知つてるだけのものを捧げませう――わたしも必要だとなれば、料理女にでも、お針にでも、洗濯女にでもなるわ……見てらつしやい、見てらつしやい……それは手柄でも何でもありやしない――だけど、幸福だわ、幸福だわ……」

マリアンナは口を噤んだ。けれど遙かかなたにそゝがれたその目は、燃え立つやうであつた……彼女が眺めてゐたのは、眼前に開けた遠景ではなくて、また誰も人の知らぬ、かつて存在したことのない別なものであつたが、彼女の目にはそれがまざ〳〵と映つてゐた。

ネジダーノフは彼女の體に身をよせた。

「おゝ、マリアンナ！」と彼は囁いた。「僕はあんたの愛を受ける價値がない！」

彼女は不意に全身をぶる〳〵と慄はした。

「もう家へ歸る時刻だわ！」と彼女は言つた。「でないと、また捜し廻るに相違ないから。ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、わたしに諦めをつけてるらしいわ。あの人の目から見ると、わたしは墮落した女なのよ！」

マリアンナは何とも言へない明るく喜ばしい顔をして、この一言を發したので、ネジダーノフはその顔を見ながらにつこり笑つて、『墮落した女！』と繰り返さずにはゐられなかつた。

「だけどあの人は、そりや侮辱を感じてるのよ。」とマリアンナは言葉を續けた。「だつて、あんたがあの人の足もとに體を投げ出さないんですもの。だけど、そんな事は何でもないわ――それよりかね……わたしこゝにこのまゝじつとしてゐられない。わたし家出しなくちやならないわ。」

「家出？」ネジダーノフは鸚鵡がへしに言つた。

「えゝ、家出を……だつて、あんたもじつとしちやゐないでせう？　一しよに行きませうよ。わたし達は一しよに働かなくちやならないわ……一しよに行つてくれるでせう？」

「世界のはてまで！」とネジダーノフは叫んだ――その聲は興奮と、一種突發的な感謝のために、思ひがけなく慄へを帶びて響いた。「世界のはてまで！」この瞬間かれは本當に、マリアンナの行きたいといふ所なら、何の躊躇もなく出かけて行きさうな氣がした！

マリアンナは彼の氣持ちを悟つて――つゝましく幸福さうに溜め息をついた。

「ぢや、わたしの手を取つて頂戴……たゞ接吻しないでね――しつかり握つて頂戴、同志として、親友としてね……えゝ、さうよ！」

同人はもの思はしげな幸福らしい様子で、一しよに家の方へ歩きだした――若草はその足もとに甘え、若葉はあたりに騒いでゐた。光りと影の斑紋が二人の着物の上を、ちら〳〵とすべりながら走つた――彼らは二人ともその忙しげな戯れや、樂しい風の鞭うちや、さわやかな木の葉の輝きや――自分自身の若さや、それからお互同志に向かつて――絶えずほゝゑみ掛けるのであつた。

第二編

二三

ゴルーシキン家の晩餐後、ソローミンが五里ばかりの夜道を元氣よく歩き切つて、工場をとり巻く高い壁の潜りを叩いたとき、もう東の空は赤らみかゝつてゐた。門番はすぐに彼を中へ入れた――そして鎖に繋がれたまゝ、毛むくだつた尻尾を大きく振りたてる、三匹の羊犬を從へて、恭しげな心づかひを面に浮かべながら、彼を離室まで送つて來た。彼は所長の無事な歸宅が嬉しくて堪らないらしいかつた。

「どうしてこんな夜中にお歸りになりました、ヴシーリイ・フェドートゥイチ？　わたし達は多分あすのお歸りだらうと思つてゐました。」

「なあに、ガヴリーラ、夜中にぶら〳〵歩くのも、却つていゝもんだよ。」

ソローミンと工場の人々の間には、幾分並みはづれたものではあつたけれど、氣持ちのいゝ關係が結ばれてゐた。彼らは目上の人として彼を敬ふと同時に――まるで、對等の人か身内のやうに、彼を遇するのであつた。たゞ皆の目から見ると、彼は恐ろしい物知りなのであつた！「ヴシーリイ・フェ

ドートゥイチの言はつしやつた事は、」と彼らは勿體らしく言つた。「神さまの言はつしやつた事も同じだ！　あの人はどんな難しいことだつて、すつかり卒業してゐなさるんだから、どんな英吉利人だつて、へこまされちやうんだ！」實際、あるとき英吉利の堂々たる紡績會社の持ち主が、この工場を參觀に來る事がある、その時ソローミンが英語で應對した爲か、それとも心から彼の知識に驚かされたのか――とにかく、英國人はのべつソローミンの肩を叩いて笑ひ乍ら、一しよにリヴプールへ來ないかと勸めた。そして職工達に向かつては、絶えず片言の露西亞で、「この人よろしい！　おゝ！　よろしい！」と繰り返した。職工たちも同じやうに笑ひ返したが、內々得意な氣持ちがしないでもなかつた。「そら見ろ、うちの大將はどうだい！　うちの大將は！」といつた氣持ちなのである。

彼は全く『うちの人間』であつた――彼らのものであつた。

翌朝早くソローミンの部屋へ、氣に入りのパーヱルがはいつて來た。彼は技師を起こして手水を使はせながら、何やかや話しをしたり、何やかや訊いたりした。それから、二人で一しよに大急ぎで茶を飲むと――ソローミンに油じみた鼠色の背廣を着て、工場をさして赴いた――やがて彼の生活は、大きな節動輪のやうに廻轉しはじめた。

しかし、その運動は一たん休止さるべき運命を擔つてゐた。

ソローミンが歸つてから五日ばかりたつた時、立派な四頭立ての赤い馬車が、工場の庭へ乘り入つた――白つぽい豌豆色の四季施を着た侍僕が、パーヱルに案內されて離室へ來ると、紋章入りの封筒をもの〳〵しくソローミンに手渡しした――『ボリース・アンドレーイッチ・シピャーギン閣下』の

手紙である。香水――ではない、何か並みはづれて洒落た英吉利の香料を浸みこませたこの手紙は、三人稱でこそ書いてあつたけれど、祕書の手を通じないで、閣下ぢきぢき筆をとつたもので、その文意はかうであつた――現代文化の代表者たるアルジャノヱ村の領主は、かねて高名を聞いてはゐるけれど、直接面識のない人に、とつぜん書面を送る非難を詫びた後、『僭越の至り乍ら』、極めて意義ある工業上の企畫に關し、尊臺の有益なる助言を傾聽したいから、當方の領地までご光來が願ひたい――もし當日のご來車が叶はぬならば、いつでも尊臺のご都合の日を知らせて貰ひたい。今日さし上げた馬車は、いつでも尊臺のご用に立てるであらう。それから後に、いつものきまり文句が續いて、最後に二伸が添へてあつたが、そこはもう一人稱になつてゐた。『なほ粗餐呈上いたしたく候間、御不斷着のまゝ、フロックコートにて御出で下されたく願ひ上げ候』（御不斷のまゝといふ一句にアンダーラインが引いてあつた）。この手紙と一しよに白つぽい蜿豆色の侍僕は、幾らか極りわるさうな樣子で、封蠟もつかはない糊貼りの手紙をさし出した。それはネジダーノフから來たもので、中にはたゞ一言、『どうか、來て下さい。あなたは非常に必要な人で、非常にためになる人なんです。たゞしシピャーギン氏に對する意味ではありません。』と書いてあつた。

シピャーギンの手紙を讀んで、ソローミンは考へた。『不斷着のまゝでなくつて、ほかにどうして行きやうがあるものか。燕尾服なんか用意がありやしない……それに、あんな所へのこ〳〵出かけて行く義理がどこにあるんだ……ただ時間を潰すばかりだ！』しかし、ネジダーノフの手紙に目を走らせたとき、彼は後ろ頭を搔いて、決心のつきかねた樣子で窓に近よつた。

「ご返事はいかゞでございませう？」白つぽい蜿豆色の侍僕が、しかめつらしくかう訊いた。

ソローミンはなほ暫らく窓際に立つてゐたが、たうとう頭の毛を振るひあげて、片手で額を撫でながら口をきつた。

「行きませう！　ちよつと着換へをするあひだ待つて下さい。」

侍僕は氣どつた樣子で部屋を出た。ソローミンはパーヱルを呼んで、二人でちよつと相談をした後、もう一ど工場の方へ駈けだした――それから田舎の仕立て屋が作つた、恐ろしく腰の長い黑のフロックコートを着て、少し羊羹いろになつた絹帽（シルクハット）を被り（これを被ると、彼の顏は急にこつ〳〵した表情になつた）、馬車に乘り込んだ――が、突然、手袋を持つて來なかつたのを思ひ出して、『影身に添うて離れない』パーヱルに聲をかけた。――とちらは洗濯したばかりの、白い鹿皮の手袋を持つて來た。それは指先がどれもこれも太くなつて、ビスケットのやうな恰好をしてゐた。ソローミンは手袋を衣嚢（かくし）へ突つ込むと、出してもよろしいと言つた。その時侍僕はだしぬけに何の必要もないのに、威勢のよいところを見せて、馭者臺へ飛び上がつた――お上品なおか〻へ馭者は、妙に黃ろい音を口から出した――かうして馬は走りだした。

ソローミンが次第にシビャーギンの領地へ近づいてゐる間、この一流の政治家はわが家の客間に坐つて、半分ページを切つた政治上のパンフレットを膝に載せたまゝ、夫人と話しをしてゐた。彼は妻に向かつて、自分の工場が手のつけられないほど成績不良で、根本的な改革の必要があるので、ソローミンを商人の工場から自分の方へ引き拔いて來る譯に行かないか、つまりその瀨ぶみをするために

呼んだのだ、と打ち明けた話しをしたのである。ソローミンが來訪を拒むだらうとか、ほかの日を指定するだらうとかいふやうな事は、かりにもシビャーギンの頭に浮かばなかつた。――尤も、彼自身ソローミンにあてた手紙で、日取りは當人の自由に任せると書きはしたけれど。

「だつて、家の工場は製紙の方で、紡績ぢやないんですもの。」とヴレンチーナ・ミハイロヴナが注意した。

「おんなじ事だよ、お前。向うも機械だし、こつちも機械だ……ところが、あの男は機械技師なんだからね！」

「でも、あの人は專門でやつてるかも知れませんわ！」

「なに、第一、露西亞には專門家なんてものはありやしないし、第二に――繰り返していふが、あの男は機械技師なんだからね！」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナはにつこり笑つた。

「氣をおつけなさいよ、あなた。若い人のことでは、もう一ど手をお燒きになつたぢやありませんか。どうか二度目の間違ひがなければようございますが！」

「それはネジダーノフのことかね？　しかし、とにかくわたしは自分の目的を達したやうな氣がするよ。コーリャの教師としてはあの男もまんざら惡くないからね。それにいはゆる non bis in idem（ノン ビス イン イデム）だからね！　どうかわたしのペダンチズムを堪忍しておくれ……それはつまり、もの事は續けて二度も繰り返されるものぢやない、といふ意味なんだよ。」

「あなたさうお思ひになつて？　ところがわたしはね、この世の事は何でも繰り返されるものだと思ひますわ……殊にその物の性質から言つて、さういふ傾向を帶びてるものはなほ更ですわ……とり分け赤い人達の間ではね。」

「それはどういふ積りなんです？」圓みを帶びた手つきで小冊子を卓の上へ投げだしながら、シビャーギンはかう訊いた。

「目をお開けなさい――さうしたら見えますわ！」と夫人は答へた。彼らは佛蘭西語で話す時には、無論お互に vous（あなた言葉）を使つてゐたのである。

「ふむ！」とシビャーギンが聲をたてた。「それはお前、あの書生つぽのことかね？」

「えゝ、あの書生さんのことですわ。」

「ふむ！　一體あの男がこゝ中で……（彼は額の邊で手を動かして見せた……）何か考へ出したのかね！　え？」

「目をお開けなさい！」

「マリアンナかい？　え？」二度目の『え？』は初めの分より一そう鼻へかけて發音した。

シビャーギンは眉をひそめた。

「まあ、そんな事は後でよく調べよう。――ところで、今さし向きちよつと言つて置きたい事があるんだ……あのソローミンは多分幾らかまごつくだらうと思ふ……そりや何分もつともなことだ、世馴れないんだからね。そこで、あの男になるべく優しくなくちやなるまい……餘りびつくりさせないや

うにね。わたしは何もお前のためになこんことを言つてるんぢやない。お前は立派なものだからな、誰だつてすきな人間を、忽ち魅了してしまふ腕があるんだから――わたしはある事を知つてゐますよ、奥さん！　わたしはつまり他人のためにこんな事を言つてるんだ。早い話しが、あの男なんか……」

彼は隅棚の上に乘つてゐる、流行型の鼠色の帽子を指さした。この帽子は今朝からアルジャノエに來てゐる、カロメイツェフ氏のものであつた。

あの男は實に頑固だからね、お前も知つての通り。あの男はどうもあんまり民衆を輕蔑しすぎる。それは實に……感服しかねることだて。それに、わたしはこの間から氣がついてゐるのだが、あの男は妙にいら〳〵して、人に突つかゝつてばかりゐるぢやないか……事によつたら、例の一件が――そら（シビャーギンは曖昧な方角をさして、頭をしやくつて見せた……けれど妻はその意味を悟つた）、はかばかしく進まないのかね？　え？」

「目をお開けなさい……わたしもう一どいひますわ。」

シビャーギンは身を起こした。

「え？（この『え？』は全然別な性質のもので、別な調子で發しられた……前よりずつと低かつたのである。）さうなのかい？　もしさういふことなら兩方の眼を、それこそ開けすぎるくらゐ開けて見せるぞ！」

「それはあなたのご勝手ですわ。ところで、けふ新しく來る若い人のことですが――もし本當にけふ來るのなら、どうか心配しないで下さい。よく氣をつけて間違ひがないやうにして置きますから。」

ところが、事實はどうだつたらう？　まるで氣をつける事も何もいらなかつたのである。――ソローミンは少しもまごついたり、慴えたりしなかつた。侍僕が彼の來訪を報じた時、シピャーギンはすぐさま立ち上がつて、玄關迄聞こえる程大きな聲で、「お通しするんだ！　無論お通しするんだ！」と言つた。そして客間の入り口へ向かひながらそのすぐ傍まで來ると、ぴつたり足を止めた。ソローミンが閾を跨ぐが早いか（彼は危くシピャーギンにぶつ突かる所であつた）、シピャーギンは兩手をさし伸べて、愛想よく白い齒を見せ、頭をふりながら、「これは／／……よくおいで下すつた……實に有り難う。」と言ひいひ、ヴレンチーナ・ミハイロヴナの所へ案内して行つた。

「これがわたしの家内です。」掌でソローミンの背を柔かく抑へて――ヴレンチーナ・ミハイロヴナの方へ押しやるやうにしながら、彼はかう言つた。「この方は縣内一番の技師ヴシーリイ……フエドセーイッチ・ソローミンさんだよ。」

シピャーギン夫人はちよつと身を起こして、「美しい睫をあでやかに下から上へさつとあげながら、まるで舊知にでも對するやうに、底意のない微笑を見せた後、肘をぴつたり胴につけて、首を少し前へ傾けながら、掌を上にして手をさし伸べた……その恰好は、ちよつと無心者のやうであつた。ソローミンは夫婦にしたいだけの事をさして置いて、二人の手を握りしめると、招ぜらるゝまゝに、辭退もしないで腰をおろして了つた。シピャーギンは何にか入り用なものはないかと氣を揉み始めたが、ソローミンはそれに答へて、自分は何にも入り用なものもなければ、旅づかれなど少しもないから、どうぞご隨意にして頂きたいと言つた。

「それぢや工場の方へおいで願へますかな？」客の示す一通りならぬ寛大な態度を、信じることが出來ないやうな、何となく氣がさすやうな風つきで、シピャーギンはかう叫んだ。

「今すぐでも。」とソローミンは答へた。

「あゝ、あなたは何といふ義理がたい方でせう！　それぢや馬車の用意を言ひつけませうか？　それとも歩いた方がお望みでしたら……」

「しかし、こゝからそんなに遠くはないんでせう、あなたの工場は？」

「半里くらゐなものです、それくらゐなものです！」

「ぢや、何のために馬車なんか用意するんです？」

「いや、それなら結構。おい――帽子を取つてくれ、ステッキも、早く！　それから奥さん、お前は一つ骨折つて、食事の用意をしといておくれ！――帽子だ！」

シピャーギンは客よりもずつと餘計に興奮してゐた。一體おれの帽子はどうしたんだ？』ともう一度くり返した後、彼は（大官とも言はれる身でありながら！）、まるでいたづらな小學生のやうに、ぷいと部屋を飛び出した。彼がソローミンと話しをしてゐる間、ヴレン チーナ・ミハイロヴナはこの『新しい青年』を注意ぶかく盗み見したのである。彼は剝出しの兩手を膝の上に戴せて（彼はたうとう手袋を嵌めなかつたのである）、肘椅子の上に悠然と腰かけてゐた。そして、いくぶん好奇の色を浮かべながら、やはり落ちつき拂つて、家具や額などを見まはしてゐた。『一體これは何者だらう？』彼女は考へた。『平民だ……間違ひなく平民だ……でも、何といふ自然な態度だらう！』

ソローミンは實際、極めて自然な態度を持してゐた。自然は自然であるけれど、いかにもわざとらしく、『どうだ、おれを見ろ、おれの態度がどんなものか、合點しろ！』と言つたやうな態度とはまるで違つて、感情も思想も堅固でありながら、しかも複雜でない人――さういふ風な態度であつた。シピャーギン夫人は彼に話しかけようとしたが――驚いたことには、何を話したらいゝか、すぐには考へがつかなかつた。

『まあ！』彼女は考へた。『わたしは一體この工場ものに氣壓されてるんだらうか？』

「ボリース・アンドレーイッチは、どんなに有り難く思つてゐるか分かりません。」たうとう彼女はかう云つた。「貴重なお時間を主人のために割いて下すつたんですもの……」

「なに、それほど貴重ではありませんよ、奥さん。」とソローミンは答へた。「それに、さう長くお邪魔するつもりでもありませんから。」

『いよ〳〵熊が爪を出したぞ。』と彼女は佛蘭西語で考へた。けれど丁度この瞬間、帽子をかぶつて（ラ・ピー・ルー・ド・モン・トレー・ド・パット）

『ステッキ』を手にした夫が、開け放した戸口の閾に姿を現した。體を半分こちらへ向けながら、彼は氣さくな調子で叫んだ。

「ヴシーリイ・フェドセーイッチ！『お支度はいゝですか？」

ソローミンは立ち上がつて、ヴレンチーナ・ミハイロヴナに會釋をすると、シピャーギンの後からついて行つた。

「わたしの後からいらつしやい、こつちです、こつちです、ヴシーリイ・フェドセーイッチ！」まるで

ソローミンが深い森に分け入つてゐるので、案内者でもいるやうな顰梅に、シピャーギンはかう繰り返した。こつちです！　そこに階段がありますよ、ヴシーリイ・フェドセーイッチ。」

「もし父稱をつけて呼んで下さるのでしたら、」とソローミンは急がず騒がずかう言つた。「わたしはフェセードイッチぢやありません、フェドートゥイチです。」

シピャーギンは殆ど慴えたやうに、肩ごしに後ろを振り返つた。

「あゝ、失禮しました。ご免なさい、ヴシーリイ・フェドートゥイチ！」

「どういたしまして、ご挨拶には及びません。」

二人は庭へ出た。――すると、向うからカルロメツイェフがやつて來た。

「どちらへお出かけ？」ソローミンを横目にちらと見て、彼はかう訊いた。「工場ですか？――これ（ディヴィデュアンクエスション）が問題の人物ですか？」

シピャーギンは目を剝き出して、用心しろと言ふやうに、輕く頭を振つて見せた。

「さう、工場へね……自分の失策や無能を――この技師の方に見て頂かうと思つて。一つ紹介させて下さい――カルロメイツェフ氏、この土地の地主です。こちらはソローミン氏……」

カルロメイツェフは漸くそれと氣がつくくらゐ、二度ばかり頷いて見せたが、ソローミンの方にはまるで見當が違つてゐた。彼は相手を見ようともしなかつた。しかし、こちらはカルロメイツェフをじつと見やつた――その半ば閉ぢたやうな目には、ある何ものかが閃いた……

「お仲間にはいつても構ひませんか？」とカルロメイツェフが訊いた。「ご承知の通り、わたしは研

究ずきでしてね。」

「無論いゝですとも。」

一行は庭から往來へ出た――二十歩と歩かないうちに、教會の僧侶に出あつた。衣の裾をからげて、自分の家へ――いはゆる『坊さん村』へ歸つて行くところであつた。カルロメイツェフはすぐ二人の仲間から離れて、しつかりした足どりで、大股に僧侶の傍へ近よつた。こちらは夢にも思ひがけない事なので、幾分怖ぢ氣づいた樣子であつた。彼は僧侶に祝福を求めて、汗ばんだ赤い手に音高く接吻した後、ソローミンの方へふり向いて、挑むやうな視線を投げかけた。見うけたところ、彼はこの技師のことを『何やかや』知つてゐたので、自分の敬虔なところを見せて、この學者ぶつてゐるまやかしもの〻『鼻を折つて』やりたかつたのである。

「それは示威運動かね君？」とシピャーギンは齒の間から押し出すやうに言つた。

カルロメイツェフは鼻を鳴らした。

「さうです、今日の時代には示威運動も必要ですよ！」

一行は工場へ着いた。恐ろしい大き髭をはやして、入れ齒を嵌めた小露西亞人が彼らを出むかへた。それは、到頭シピャーギンに追ひ出された、前支配人獨逸技師の後任であつた。この小露西亞人は臨時に雇はれたものであるが、あきらかに何一つ分からないらしく、絶えず『これは……』とか『大變に』とかいふばかりで、のべつ溜め息をついてゐた。

工場の檢分が始まつた。職工の中にはソローミンの顏を知つてゐる者もあつて、腰を屈めて挨拶した。彼はその一人に「あゝ、グリゴーリイ、ご機嫌よう！　お前、こゝにゐたのか？」と聲をかけたくらゐである。彼はやがて間もなく、こゝの仕事はうまく行つてゐないな、と見込みをつけてしまつた。資金はふんだんに注ぎ込まれたけれど、その使ひかたが滅茶苦茶だつたのである。機械は出來のよくないものだつたし、餘計な要らないものが、ごた〳〵ある癖に、必要なものが澤山不足してゐた。シピャーギンはソローミンの意見を察しようと思つて、絶えずその目を覗き込みながら、おづおづと質問を持ちかけた後、少くとも設備だけは滿足に行つてゐるかと訊ねた。

「設備は出來てゐますが、」とソローミンは答へた。「然し收入がありますか？――怪しいものですね。

シピャーギンばかりでなく、カルロメイツェフまでもさう感じた――ソローミンは工場へはいると、まるで自分の家へ歸つたやうな氣持ちで、極めて微細な點に至るまで悉く諳んじて、自分は一切の物の主人公だと感じてゐるらしかつた。彼は騎手が馬の首に觸れるやうに、機械の上へ手を置いたり、指で節動輪に觸つたりした――すると、機械は止まつたり、動きだしたりするのであつた。また桶の中から製紙原料のパルプを取つて、手のひらの上に載せて見た――すると、すぐにその缺點が曝露されるのであつた。ソローミンは餘り口數を利かなかつた。髭面の小露西亞人の方は、殆どふり向いても見なかつた。彼は依然として無言のまゝ、工場から出て行つた。シピャーギンとカルロメイツェフもその後に續いた。

シピャーギンは、誰にも見送りをしてはいけないと言ひつけて……地だんだを踏んだり、齒がしみをしたりした！　彼は恐ろしく機嫌を惡くしてゐたのである。

「あなたのお顔つきから察するところ、」と彼はソローミンに話しかけた。「わたしの工場にご不滿のやうですな――あの工場の狀態が不完全で、何らの收益をも齎らさないといふ事は、わたし自身も承知してをります。しかし全くのところ……どうか遠慮なく言つて下さい――一番おもな缺點は一體どういふ所にあるのでせう、それを改良するにはどうしたらいゝんでせう？」

「製紙の方は僕の專門外ですからね。」とソローミンは答へた。「しかし、たゞかういふ事だけは言へます――全體として工場の經營などは、貴族のなすべき仕事ぢやありません。」

「ぢや、あなたはかういふ仕事を、貴族として卑しいことだと思はれるんですか？」とカルロメイツェフが口を入れた。

ソローミンは例の豐かな微笑を浮かべた。

「いや、どういたしまして！　とんでもない！　卑しいことなんかあつて堪るもんですか！　たとへ、またさういふ點があるとしても、貴族の人達だつてそんな事を厭ひはなさらんでせう。」

「え？　何ですと？」

「僕はたゞかう言ひたかつたのです。」とソローミンは落ちつき拂つて言葉を續けた。「貴族はかういふ種類の活動に馴れてゐません。それには商賣的な打算が必要です。何もかも別の地盤へ置き換へなければなりません。そして粘り强い態度が必要です。ところが、貴族はさういふ事をまるで考へないのです。僕らはよく貴族が羅紗工場や、製紙工場などを創立するのを見うけますが――結局さういふ工場が誰の手に落ちると思ひます？　商人です。實に殘念ぢやありませんか。なぜといつて、商人もや

はり蛭の一種ですからね。しかしどうも仕方がありません。」

「あなたの話しを聞いてゐると、」とカルロメイツェフが叫んだ。「われ〳〵貴族は經濟問題を扱ふ資格がないといふことになりますね！」

「いや、それどころぢやありません！　貴族はさういふ事にかけたら名人ですよ。鐵道の利權を獲得したり、銀行を創立したり、何かの特權を絞り取つたり――さういつた風なことにかけたら、貴族に及ぶものは、誰一人もありませんよ！　どえらい財產をこさへてゐますからね。あなたが腹をお立てになつた時、僕はつまりその點を仄めかしたんです。しかし僕の考へてゐるのは、ノーマルな生產工業なんです。僕は敢てノーマルなと言ひます――なぜつて、いま多數の貴族階級に屬する地主がしてゐるやうな、酒場を建てたり、兩替へ店を始めたり、十五割の利子で百姓に穀類や金を貸したりする――さういふやうな仕事は、本當の財政事業として取り扱ひかねますからね。

カルロメイツェフは何とも返事をしなかつた。それは彼自身、最近マルケ・ロフがネジダーノフとの會話で觸れたやうな、高利貸し地主といふ新しい種族に屬してゐたからである。彼は自分で直接百姓たちと取り引きしないで、番頭を通じて交渉してゐたために、却つて一そう不人情な要求を提出することが出來たのである。實際、香水のかをりに滿ちた歐羅巴風の書齋へ、百姓などを入れる譯にゆかないではないか！　まるで無關心かと思はれるやうな、悠然と落ちつき澄ましたソローミンの言葉を聞きながら、彼は腹が煮え返る思ひであつた……けれど、今度はじつと默つてゐた。たゞ、頤と頤を食ひしばつたために生じた頬の筋肉の動きだけが、彼の內部の暗鬪を示すのみであつた。

「しかし失禮ですが、失禮ですが、ヴシーリイ　フェドートゥイチ、」とシピャーギンが言ひだした。

「今あなたの言はれたことがですね、最近の過去に對するものとすれば――つまり、全體として貴族階級が別種の狀態にあつて、全然ちがつた特權……を利用してゐた時代に對するものとすれば、すべて一々ご尤もです。しかし、あゝいふ立派な改革を經た今日、かういふ工業隆盛時代に再會した今日、貴族社會だつて自己の注意と能力を、そろ〳〵かういつた風な事業に向けてもいゝ筈ぢやありませんか？　單純な、殆ど目に一丁字のない商人でさへ理解し得ることを、どうして貴族に理解することが出來ないのです？　教養の不足といふ點で貴族を咎める譯には行きますまい――それどころか、ある意味に於て、彼らは文明と進歩の代表者だと斷言しても、決して誤りではないと思ひます！」

ボリース・アンドレーイッチの言葉はなか〳〵見事であつた、これがもし彼得堡の局か――それとも、もつと上の方であつたなら、彼の雄辯は非常な效果を齎したに相違ない。しかしソローミンに對しては、まるで何の印象も與へなかつた。

「そんな事業はとても貴族なんかの手に合ひません。」と彼は繰り返した。

「なぜです？　一體なぜです？」とカルロメイツェフは殆ど喚かないばかりであつた。

なぜといつて、貴族もやはり官吏ですからね。」

「官吏？」とカルロメイツェフは毒々しく高笑ひした。「ソローミン君、君は恐らく、自分で自分の言つてることが分からないんでせう？」

ソローミンは相變はらず微笑をやめないで、

「なぜ、さう思ひます、カローメンツェフ君？（自分の苗字がこんな風に『ひん曲げられた』のを聞いて、カルロメイツェフは思はずぎくつとなつた）――いゝえ、僕はいつも自分の言つてゐることを、はつきり意識してゐますよ。」

「それぢや、あなたのさつき言はれた文句はどういふ意味なのか、一つ説明して貰ひませう。」

「お易いご用です。僕の考へでは、すべて官吏といふものは民衆に緣のない人種です。それは今までいつもさうでした。ところが今度は、貴族もやはり緣のない人間になつたのです。」

カルロメイツェフは一そう大きな聲で笑ひだした。

「いや失禮だが、僕なんかには、まるで分からないですなあ！」

「それはあなたのお爲になりませんよ。もう一奮發してご覽なさい……事によつたら、分かるかも知れませんよ。」

「君！」

「ご兩君、どうしたもんです！」高い所から目で誰かを搜してゐるやうな恰好で、シピャーギンは口早に言ひだした。

「どうか、どうか……カルロメイツェフ君、お願ひだから氣を鎭めてくれ給へ。それに食事もすぐ始まるだらうから。さあ、お二人ともわたしと一緒においで下さい！」

「ヴレンチーナ・ミハイロヴナ、」五分ばかりたつてから、夫人の居間へ駈け込みながら、カルロメイツェフは悲鳴をあげた。「ご主人のなさることは、實に言語道斷です！　今でももうニヒリヌトが

一人巣を食つてゐるのに、またもう一人ひつぱつて來るなんて！　しかも今度の方がもつと上手なんですよ！」

「それはなぜですの？』

「なぜも何もあるもんですか。あいつは實にとてつもない事を宣傳してるんですよ。それに、まあどうでせう、まる一時間もご主人と話しをしながら、一度も、たゞの一度も閣下と言はないんですからね？　どろつきです！」

二四

食事の前に、シピャーギンは妻を圖書室へ呼んだ。さし向かひで話しがしたかつたのである。その様子は何となく心配さうであつた。彼は妻に向かつて、工場がもうまるで駄目だといふことや、あのソローミンは幾分……無愛想ではあるけれど、非常に物の分かつた人間らしいから、彼に對しては引き續き、充分に氣をつけて貰はなければならない、などといふ話しをしたのである。

「あゝ、あの男を引つこ抜いて來ることが出來たら、實にいゝんだがなあ！」と彼は二度ばかり繰り返した。シピャーギンはカルロメイツェフの訪問に、恐ろしく業を煮やした……「忌々しい、何だつて、あんな奴が舞ひ込んだんだらう。誰もかもみんなニヒリストに見えて、それを退治することよりほか何一つ考へないんだからなあ。ふん、そんな者は自分の家で退治ればいゝのだ！　どうしても舌を食ひ縛つてゐられないものと見える！」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナも、あの新しい客人に對して、充分に氣をつけるのに異存はないけれど、たゞ先方でそんな心づかひに必要を感じないらしく、まるで注意を拂はないといふ意見を述べた。彼は別に無作法といふ譯でもないけれど、何だか餘り無關心すぎるやうに思はれた。それは共產主義を奉ずる人間として、極めて驚くべきことであつた。

「まあ、どちらにしても……ひと骨折つてくれ。」とシピャーギンは哀願するやうに言つた。

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、一骨折るやうに約束した——そして本當に骨を折つたのである。彼女はまづ第一着手として、カルロメイツェフとさし向かひで話しをした。彼女が何を言つたのか分からないけれど、とにかくカルロメイツェフは、たとへどんな事を耳にしても、じつとおとなしく愼ましやかにしてゐようと、『固く決心した』人のやうな面もちで卓についた。この手廻しのいゝ『讓步』は、彼の容貌ぜんたいに輕い憂愁の影を添へたのである。そしてその代はり、何といふ品位が充ち溢れてゐたことだらう……おゝ！　その一擧手一投足に、何といふ威嚴が漲つてゐたことだらう！　ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、家の子一同をソローミンに紹介した……(そのとき彼は誰よりも一ばん注意ぶかく、マリアンナを眺めた)——やがて食卓についた時、夫人は彼を自分のすぐ右に坐らせた。カルロメイツェフは左手に腰をおろした。彼はナプキンを擴げながら、目を細めて、『さあ、これから喜劇を演じませうかね！』とでも言ひたさうに、にやりと笑つた。シピャーギンはその前に坐つて、いくぶん心配さうに、それとなく彼を注視してゐた。主人の新しい命令によつて、ネジダーノフはマリアンナの傍でなく、アンナ・ザハーロヴナとシピャーギンの間に坐らされた。またマリア

ンナの方は、カルロメイツェフとコーリャの間で、自分の名札がナプキンの上に載つかつてゐるのを見いだした(それは本式の食事だつたのである)。晩餐の設備は見事なものであつた。綺麗な模様入りの『メニュー』まで、一人々々の食器の前に置いてあつた。スープが濟むとすぐ、シピャーギンはまた自分の工場の方に話しを向け、それから全體として露西亞の工業狀態に言及した。ソローミンはいつもの癖で、極めて言葉すくなに返事をした。彼が言葉を發しるや否や、マリアンナはその方へ視線をそそいだ。その傍に坐つてゐたカルロメイツェフは、さま〴〵なお世辭を言ひながら話しかけた(それは『政治論を持ち出さないやうに』頼まれたからである)。しかし彼女は耳を貸さうとしなかつた。それに彼自身もほんの申し譯に、だらけた調子でこのお世辭を並べてゐるのであつた。彼はこの若い娘と自分の間に、到底こえることの出來ない溝があるのを自覺してゐた。

ネジダーノフはどうかと言ふと——彼とこの家の主人との間には、それよりもつと不穩なものが突如として現れたのである……シピャーギンにとつては、ネジダーノフは單に部屋の家具か、それとも何もない空間のやうなもので、まるで——それこそまるで目にも止まらないのであつた！ この新しい關係は急にかつきりと固定して了つて、食事中ネジダーノフが、隣席のアンナ・ザハーロヴナに話しかけられて、何か二こと三こと言つた時、シピャーギンはまるで『どこからあんな聲がして來るんだらう？』といぶかるやうに、びつくりしてその方をふり向いたほどである。

明かにシピャーギンは、露西亞の大官の特色となつてゐる、ある種の性情を具備してゐるらしかつた。

魚の料理が出た後で、ありたけの魅力と誘惑を右の方——つまりソローミンの方へふり撒いてゐたヴレンチーナ・ミハイロヴナは、卓ごしに英語で夫に話しかけた。

「お客さまは葡萄酒を召しあがりませんが、事によつたら、麥酒の方がお好みぢやないでせうか……」

シピャーギンは大きな聲で『エリュー』を要求した。するとソローミンは落ちつき拂つて、ヴレンチーナ・ミハイロヴナの方へふり向きながら、

「奥さん、あなたは多分ご存じないでせうが、わたしは二年あまりも英吉利に滯在してゐましたから、英語の話しがよく分かります。從つて、もしわたしの前で密談をしたいといふ場合があるといけないから、前もつてこの事をご注意して置きます。」と言つた。

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは笑ひながら、そのご注意はご無用です、こゝではご自分にとつて有利な言葉よりほか、一切あなたのお耳にはいる氣づかひはないから、と誓つた。彼女はソローミンの態度を幾らか奇妙にも感じたけれど、しかし一種風變はりな婉曲さを認めた。

カルロメイツェフは、その時到頭我慢しきれなくなつた。「あなたは英吉利へ行つてゐたと仰しやるが」と彼は言ひだした。「定めし向うの風習なども觀察なすつたことでせうな。一つ伺ひますが、あなたはそれを模倣する價値があると考へますか？」

「あるものはさうでもあり、またあるものは——さうでもありません。」

「どうも簡單すぎて不明瞭ですな。」シピャーギンの合圖に氣のつかぬやうな振りをしながら、カルロメイツェフはかう言つた。「しかし、あなたは今日も貴族の話しをされましたが……無論、英吉利

のいはゆる貴族地主（ランド・ゼントリイ）なるものを、本場で研究される機會があつたでせうね？」
「いや、僕はさういふ機會がなかつたです。全然べつの社會で轉々してゐましたからね――しかし、さういふ階級に對する觀念だけは作り上げましたよ。」
「それぢやどうです？　さういふ貴族地主は、わが國では不可能だとお考へですか？　いづれにしても、そんな事は望むべきでないとお考へですか？」
「僕は第一、さういふものは全く不可能だと考へますし、第二に、そんな事を望む必要はありません。」
「それはどういふ譯ですか、その？」カルロメイツェフは言つた。この『その』といふつけ足しは、恐ろしく心配して椅子の上でもぞ〳〵してゐるシピャーギンを、落ちつかすべき使命を帶びてゐるのであつた。
「なぜといつて、もう二三十年も經つたら、あなたのいはゆる貴族地主なんかは、ひとりでに無くなるからです。」
「しかし、失禮ですが、その、一體それはどういふ譯なんですかね、その？」
「ほかでもありません。その時分になると、土地は門閥などの差別なしに、實際の所有者のものになつて了ふからです。」
「それは商人ですか？」
「恐らく大部分は商人でせう。」

「それはどういふ風にして？」
「どういふ風つて、つまり商人たちが買ふからですよ――その地所をね。」
「貴族の手から？」
「貴族の手からです。」
カルロメイツェフは寛大らしく微笑して見せた。
「あなたは確か工場のことについても、それと同じことを言はれたやうですが、今度は土地全體になつたんですか？」
「さう、今度は土地全體のことを言つてるんです。」
「さうなると、あなたは、たぶん愉快でたまらないんでせう！」
「決して、決して。もう前にも申し上げた通り、さうなつたからと言つて、人民は樂にならないんですからね。」
カロメイツェフはほんの心もち片手をあげた――飛んだ人民おもひでゐらつしやる、笑はせやがあ！　とでも言ひたさうな樣子であつた。
「ヴシーリイ・フェドートゥイチ！」とシピャーギンがありつたけの聲を出して呶鳴つた。「麥酒を持つて來ましたよ！　――氣をつけてくれたまへ、シメオン！」彼は小聲に言ひ足した。
けれど、カルロメイツェフはおとなしくしてゐなかつた。「お見うけしたところ、」彼はソローミンに向かひながら、またもやかう言ひだした。「あなたは商人のことを、餘りよく思つてをられないや

うですね。しかし、彼らもその出所をたゞせば、やはり民衆に屬する譯ぢやありませんか？」
「それがどうしたんです？」
「僕の想像するところでは、すべて民衆のもの、もしくは民衆に屬するものは、何でも立派なものだと、かう思つてゐらつしやるやうぢやありませんか。」
「いや、それは違ひます！　それはあなたのお考へ違ひです。露西亞の民衆は多くの點において、非難さるべき缺點を持つてゐます、尤も、いつも必ず惡いとは行きませんがね。ところで、商人はこれまで貪慾な連中でした。彼らは、自分自身の財產を領有するのでさへ、貪婪な猛獸のやうな態度を示してゐるのです……併し、どうも仕樣がありません！　自分だつて剝ぎ取られるんだから……こつちも人を剝ぎ取らなくちやならないんです。ところが民衆は……」
「民衆は？」とカルロメイツェフが甲高い聲で問ひ返した。
「民衆は寢坊ですからね。」
「で、あなたはそれを起こしたいんですな？」
「それも惡くないでせう。」
「はゝあ！　はゝあ！　なるほど……なるほどね……」
「失禮ですが、失禮ですが、」とシピャーギンは命令するやうな調子で口を入れた。彼はいよ〳〵境界を設けるべき時……議論をさし止めるべき時機が到來した、と悟つたのである！　で、彼の境界を設けた。議論をさし止めた！　肘を卓に突いたまゝ、右の手首をふりながら、彼は委曲を盡くした長

い演說をはじめた。一方に於て保守派を賞揚しながら、他の一方に於て自由主義者に贊同したのち、結局、後者の方に幾分の長を認めて、自分自身をもその中へ數へ入れた。彼は民衆を持ち上げながら——その弱點をも指摘した。政府に對する絕對の信賴を表白しながら——すべての官吏が政府の善良なる意圖を實行してゐるかどうかと、疑ひをさし挿んだ。文學の利益と價値を認めながら、最大級の警戒なしには、その存在を許すわけに行かないと宣言した。西の方を一瞥した時には、はじめ歡喜の念を覺えたが、やがて疑惑を感じて來た。東の方を眺めた時には、はじめ休息を感じたけれど、やがて斷然奮起した！——と語つた。最後に彼は三要素の結合の繁榮を祈るために、乾杯しようと言ひだした。それは宗教と、農業と、工業であつた！
「權力の庇護のもとに！」とカルロメイツェフが嚴かにつけ足した。
「英明にして寬大なる權力の庇護のもとに。」とシピャーギンが訂正した。
乾杯は無言のうちに行はれた。尤も、シピャーギンの左手にある、ネジダーノフと呼ばれるむなしい空間は、何か不服らしい響きを發したが、しかし誰の注意も喚起することなしに、再びひつそりと靜まつてしまつた。かういふ風にして、もはや新しい論爭に搔き亂されることもなく、食事は無事に終つたのである。
ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、何とも言へぬあでやかな微笑を浮べながら、ソローミンに一杯の珈琲（コーヒー）を薦めた。彼はそれを飲み終ると、もう自分の帽子を目で搜し始めたが……シピャーギンにそつと柔かく腕を取られて、猶豫なくその書齋へ引つぱられて行つた——そして、まづ上等のシガーを貰

つた後、始めて有利な條件で、シピャーギンの工場へ移るやうに申し込みを受けた！「あなたは完全に工場の支配者となられる譯ですよ。ヴシーリイ・フェドートゥイチ、完全な支配者にね！」ソローミンはシガーを受け取つたけれど、轉任の勸告は拒絶した。シピャーギンが何と言つてすゝめても、彼はどこまでもその拒絶を取り消さうとしなかつた。

「さう露骨に厭だと言はないで下さい――ねえ、ヴシーリイ・フェドートゥイチ！　少くとも、明日まで考へると言つて下さい！」

「だつて、同じことですよ――僕はあなたの申し込みを承諾する譯にゆかないんですから。」

「明日まで！　ヴシーリイ・フェドートゥイチ！　それくらゐな事は、あなたにとつて何でもないぢやありませんか？」

ソローミンは、實際そんな事くらゐ自分にとつて何でもない、といふ意見に賛成したが……しかし、書齋から出て來ると、また帽子を捜し始めた。それまで彼と一ことも言葉を交はす機會のなかつたネジダーノフが、この時傍へよつて早口に囁いた。

「お願ひだから、歸らないで下さい。でないと、話しが出來ないぢやありませんか！」

ソローミンは自分の帽子に構はないこととした。それに主のシピャーギンも、客間の中を思ひ切り惡さうにあちこち歩いてゐる彼の姿を見ると、いきなりかう聲をかけた。

「あなたは無論、うちでお泊りになるでせう？」

「どうともご都合のいゝやうに。」とソローミンは答へた。

マリアンナが彼の方へ投げた感謝するやうな目つきは、――彼女は客間の窓際に立つてゐたのである――ちよつと彼を考へ込ませた。

二五

ソローミンの訪ねて來るまで、マリアンナは彼を別人のやうに想像してゐた。彼女が始めて一目みた時、彼は何となく曖昧な、無人格な男のやうに思はれた……實際こんな風に白つぽい頭をした、筋だらけの痩せた男を、彼女はこれまで澤山見て來たのである。しかし、じつと彼の樣子を見入つて、その言葉に耳を傾ければ傾けるほど、この男に對する信頼の念は、いよ〳〵強くなつて行つた――それは實際、信頼の念であつた。この落ちつき拂つた、無器用らしい、といふより、寧ろ重くるしい人間が、嘘をついたり、空自慢をしたりする筈がない。それどころか、この人なら、石の壁と同じやうに、安心して、頼ることが出來る……この人なら期待を裏切るやうなことはあるまい。いやそれどころか、ちやんと人の氣持ちを理解して、杖柱になつてくれるに相違ない。マリアンナはこんな氣持ちさへした――ソローミンは自分ばかりでなく、そこにゐるすべての人々に、同じやうな心持ちを呼び起こしたらしい。マリアンナも彼の言ふことは、別にたいして價値のある事とも思はなかつた。商人とか、工場とか言つたやうな議論は、餘り彼女の興味をそゝらなかつた。しかし彼のものを言ふ樣子や、ものを言ふ時の目つきや笑ひ顔――さういふものが無性に彼女の氣に入つたのである……

眞摯（しんし）な人間……これが何より肝腎な點であつた！　これが彼女を動かしたのである。露西亞人は、

世界ぢうで一番の法螺ふきでありながら、しかも何より一番に眞實を尊敬し、且それに同情する——それは、はつきり理解しにくい事であるけれど、遍く知れ渡つたことである。そればかりでなく、マリアンナの目から見ると、ソローミンには一種特別の感じが印せられてゐた。他でもない、當のワシーリイ・ヒコラーイッチが自分で後進一同に紹介した人間といふ、一種の光輪を背負つてゐるのであつた。食事の間にマリアンナは幾度となく『彼のことで』ネジダーノフと目を見合せた。了ひには、いつしかこの二人を比較してゐる自分自身に心づいた——而もその比較の結末は、ネジダーノフにとつて不利なものであつた。無論ネジダーノフの方がソローミンよりも、輪廓が遙かに美しくて氣持ちがよかつたけれど、しかし顏そのものは忿懣とか、當惑とか、焦燥とか……更に進んで憂鬱とか、さういつたさまざまな落ちつきのない感じの交錯を現してゐた。彼は針の上にでも坐つたやうにもぞもぞして、ものを言ひかけたり、また口を噤んだり、神經質らしく笑つたりするのであつた……ソローミンはその反對に、いくぶん退屈してゐるかも知れないけれど、ゆつたり腰を落ちつけてゐるやうな印象を與へた。『彼の考へてゐるやうな事は』いついかなる場合でも、『ほかの人のやうな事情』に左右せられないだらう、といふやうな氣持ちがした。『どうしてもこの人の忠告を求めなくちや』——とマリアンナは考へた。『きつと何かためになることを言つて下さるに相違ない。』食後ネジダーノフを彼の傍へやつたのも、實は彼女なのであつた。

その晩はかなりだらけた氣分で過ぎてしまつた。丁度さいはひ、食事の終りが遲かつたので、夜ねるまで幾らも時間が殘つてゐなかつた。カルロメイッェフは慇懃に顏をふくらまして、じつとおし默

つてゐた

「あなたどうなすつたの？」と半分嘲るやうにシピャーギン夫人が訊ねた。「何か落としものでもなすつた？」

「正にその通りです。」とカルロメイッェフは答へた。「ある近衞師團の長官のことで、かういふ話しがあります。それは部下の兵隊が、歩調をなくしたと言つてひどく悲觀しながら『わしの敎へた歩調を捜してくれ！』と言つたさうです。ところがわたしは『閣下』を捜してくれと言ひませう！『閣下といふ言葉がなくなつて了ひました——それと一しよに、長上に對する尊敬も禮儀もすつかりなくなつて了つたのです！」

シピャーギン夫人はカルロメイッェフに向かつて、さういふ捜しもののお手傳ひは出來かねますと言つた。

食卓演說（テーブルスピーチ）の成功に元氣づいたシピャーギンは、更にまた一つ二つ演說を試みた。しかもその際、國家的緊急施設に關する若干の意見を述べて、二三の警句（スモー）すら惜し氣もなく出してしまつた。この警句は實のところ、彼得堡（ペテルブルグ）で發表するために準備したもので、鋭さよりも寧ろ重みの方が勝つてゐた。そのうちの一つは『もしかういふ事が許されるならば』といふ枕をつけて、二度ばかり繰り返したほどであつた。ほかでもない、當時のある大臣について、『彼の才智は輕薄で不眞面目で、當に空想的な目的に向けられてゐる』と言つたのである。然しそれと同時に、いま自分の相手にしてゐるのは、露西亞人——しかも民衆出の露西亞人であることも忘れないで、一つ二つの俚諺をひけらかす機會も逸

しはしなかつた。その俚諺といふのは、彼自身――單に露西亞人といふばかりでなく、生粹の『露西亞つ子』であつて、民衆生活の本質に深く觸れてゐる、といふ事を示すべき筈であつた。たとへば、雨のために乾し草の取り入れが遲れるかも知れないとかいふ、カルロメイツェフの言葉に對して、彼はすぐさま『乾し草は黑くなつても、かはりに蕎麥が白くなる』と答へた。それからまた『主ない品は身なしごだ』とか、『十遍はかつて一遍切れ』とか、『麥あつてこそ桝もある』とか、『エゴールの日（四月二十三日）に樺の葉が銅錢ほどになつてたら、カザン聖母の祭日に麥が一庫できるだろ』とか、さういつた風な諺をふんだんに使つた。もつとも、とき〴〵不意に思はぬしくじりをして、『しぎ（こほろぎ）の誤り』も自分の枝を知れ』とか、『家は飾りで美しい』（家は飾りのためでなく。もてなしのために美しい―の誤り）などといふやうな事もあつた。しかし、かういふ失策を聞いてゐる一座が一座なので、多くの者にこの notre bon（ノートル・ボン わが善良なる）露西亞つ子が、しくじりをやつたなどとは、夢にも考へなかつたのである。それにコヴリーシュキン公爵などといふ連中のお蔭で、人々はさういふ露西亞的『パタケース』に馴れてゐるのであつた。シビャーギンはかうした諺や格言を一種特別な頑固らしい、いくぶん澁みのかゝつた聲で發音した――つまり彼のいはゆる『田舍風（リュスチーク）な』なのである。かういふ俚諺は彼得堡（ペテルブルグ）あたりで、うまく時と場所を持ち出さうものなら有名な勢力家の貴婦人達をして『まあ、百姓たちの風俗をよく知つてらつしやること！』と三嘆せしめるに充分であつた。その上に、有名な勢力家の政治家達は『風俗と要求をね！』と言ひ添へるのであつた。

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、ソローミンの傍でしきりに歡待これ努めてゐた。けれどその努力

も效がないらしいのを見て、彼女はすつかり悄氣てしまつた。カルロメイツェフの傍を通り過ぎながら、彼女は思はず小聲にかう言つた。

「あゝわたし本當に疲れてしまつたわ？」

こちらはそれに對して、皮肉な會釋をもつて答へた。

「お前は自分でそれを望んだのだ。ジョルジ・ダンダン！」（モリエールの喜劇中の一句）

やがて疲れた一座の人々の顏に、愛嬌やお世辭わらひがぱつと燃え上がる。例の最後の一瞬間が來た。急に手を握つたり、微笑を交はしたり、親しげな鼻聲を出したりした後、疲れた客と疲れた主人夫妻は、めい〳〵別れ〳〵になつた。

ソローミンにあてられた階上の一室は、家中でも殆ど一番いゝ部屋で、英國式の化粧道具や、浴室などが附いてゐた。彼は自分の部屋を出て、ネジダーノフの所へ行つた。

こちらはまづ第一番に、彼が泊まることを承知してくれたのについて、熱心に感謝の意を表した。

「これは君にとつて一種の犧牲だといふことは……僕にもよく分かつてゐます……」

「えゝ！　よしてくれ給へ！」とソローミンはゆつくりと答へた。「犧牲なんかあつてたまるもんですか！　それに、君に對しては拒絶する譯にゆかないですよ。」

「それはまたなぜ？」

「なぜつて、僕は君がすきになつたからです。」

ネジダーノフは嬉しくもあれば不思議でもあつた。ソローミンはその手を握りしめた。それから彼

は椅子へ馬乘りに跨がつて、シガーを燻らしはじめた。そして、椅子の背に兩肘を靠せながら、口をきつた。

「さあ、聞かして下さい。一體どんな話しです？」ネジダーノフもやはり、ソローミンとさし向かひになつた。――しかしシガーを燻らしはしなかつた。

「どんな話しかと訊かれるんですね？……ほかでもありません、僕はこゝを逃げださうと思つてるんです。」

「と言ふと――この家を出て行かうといふんですか？　いや、それもいゝでせう。無事にいらつしやい！」

「出て行くんぢやありません、逃げ出すんです。」

「ぢや君は抑へられてるんですか？　事によつたら……前借でもしたんぢやありませんか？　それなら君は、ちよつと一こと斷わつたらいゝぢやありませんか……僕でも喜んで……」

「ソローミン君、君は思ひ違ひをしてゐられるんです……僕が出て行くのぢやない、逃げ出すんだと言つたのは――ほかでもない、こゝを出て行くのは僕一人きりぢやないからです。」

ソローミンは頭を上げた。

「ぢや、誰と？」

「君が今日こゝで見たあの娘と……」

「あゝ、あの娘！　あの人はいゝ顏をしてゐる。ぢや、何だね？　君達はお互に愛しあつてゐるんだ

ね……それとも、たゞお互に居心地の悪いこの家を、一しよに飛び出さうと相談したんですか？」

「僕らはお互に愛し合つてゐるんです。」

「はゝあ！」ソローミンはしばらく口を噤んでゐた。「あの娘さんはこゝの親戚なんですか？」

「さうです。――しかしあの人はわれ〳〵と全然信念が一致してゐて――どんな事でも斷行する覺悟なんです。」

ソローミンは微笑した。

「ぢや、ネジダーノフ君、君は？覺悟が出來てますか？」

ネジダーノフはかすかに眉を顰めた。

「なぜそんなことを訊くんです？　僕は自分の覺悟を實行で證明しますよ。」

「僕は別に君を疑ふわけぢやありませんよ。ネジダーノフ君。たゞ僕が訊いたのはね、君以外には誰ひとり、覺悟の出來てゐる人がなささうだからです。」

「ぢや、マルケーロフは？」

「さうだ！　マルケーロフくらゐのもんだね。しかしあの男は、恐らく生まれながら覺悟の出來てゐる人間なんだらう。」

この瞬間たれか小さな音で、急がしげに戸を叩いて――返事も待たずに戸を開けた。それはマリアシナであつた。彼女はすぐにソローミンの傍へよつた。

「わたしね、」と彼女は口をきつた。「あなたはいま時分こんな所でわたしをご覽になつても、きつと

驚きはなさらないだらうと、さう信じてゐましたの。――この人は(マリアンナはネジダーノフを指さした)、きつと何もかもあなたにお話ししたでせうね。――どうぞ、お手を拜借さして下さい。そしてあなたの前に立つてゐるのは、正直な娘だといふことを、信じて頂きたうございます。」

「えゝ、それは僕にも分かつてゐます。」とソローミンは眞面目な調子でかう答へた。彼はマリアンナが姿を現すや否や、椅子から立ち上がつたのである。「僕はもう食事の時から、あなたを眺めながら、何といふ正直さうな目つきをしたお嬢さんだらう、と考へてゐたのです。お察しの通り、僕はいまネジダーノフ君から、あなた方の計畫を聞きましたが、しかし正直なところ――なぜ逃げ出したりなんかなさるんです?」

「なぜですつて? だつてわたしの同情してゐる事業が……どうかびつくりしないで下さい。ネジダーノフが包まず話してくれたんですから……この事業が必ず近いうちに始まらうといふのに……何から何まで嘘と、僞りに充ちたこんな地主屋敷に、安閑と暮らしてゐるわけに行かないぢやありませんか? 自分の愛してゐる人達が危險に曝されようとしてゐるのに、わたしが……」

ソローミンはちよつと手を動かして、彼女を押しとめた。「興奮しないで下さい――まあお坐んなさい、僕も坐りますから! ネジダーノフ君、君も坐つたらいゝでせう。――そこでですね、もしほかに原因がないとしたら、あなた方がこの家を逃げ出すのはまだ無意味ですよ。われ〳〵の事業は、あなたの考へてゐらつしやるほど、さう早くは始まりませんよ。こゝはもう少し分別が必要でせう。さうやたらに前へ飛び出すことはいりませんからね。どうか、僕を信用して下さい。」

マリアンナは腰をおろして、肩に羽織つて來た大きな膝かけを搔き合した。

「だつて、わたしもうこのうへ、こゝにじつとしてゐられないんですもの! わたしはこの家にゐると、みんなから侮辱を受けるんですの。現に今日も、あの馬鹿なアンナ・ザハーロヴナがコーリャのゐる前で、わたしの父に當てこするやうに、瓜の蔓に茄子はならないといふぢやありませんか! コーリャはびつくりして、それは一體なんのことか、訊いてゐましたわ。ヴレンチーナ・ミハイロヴナのことなんか、もう言ふがものはありません!」

ソローミンはまた彼女を押しとめた――そして今度はにつこり笑つて見せた。マリアンナは、相手がいさゝか自分を冷笑してゐるのに氣がついたが、しかし彼の微笑は、決して何人にも侮辱感を與へるやうなことがなかつた。

「何を仰しやるんです、お嬢さん? 僕はアンナ・ザハーロヴナが何者やら、瓜の蔓といふのは何のことやら、さつぱり知らないんですが……しかし何といふことでせう? 馬鹿な女が何か馬鹿なことを言つたからつて、あなたはそれが我慢できないんですか? それで一體どうしてこの世を渡るつもりなんです? 世の中は馬鹿な人間ばかりで出來てるもんですよ。いや、そんな事は理由になりません。何かほかにありますか?」

「僕は確かに信じてゐます。」と、ネジダーノフが籠つた聲で口を入れた。「シビャーギンは、自分の方から、今日あすのうちに僕を斷わるに相違ないです。きつと誰か告口をした者があるんです。その證據には僕に對して……恐ろしく侮蔑的な態度をとるんですからね。」

ソローミンはネジダーノフの方へふり向いた。
「ぢや、何のために逃げ出さなくちやならないんです、それでなくても、斷わられると決まつてゐるのに？」
ネジダーノフは何と答へていゝか、すぐには言葉が出なかつた。
「もうさつき、さう言つたぢやありませんか。」と彼は言ひだした……
「この人がさう言つたのは、」とマリアンナが引き取つた。
「わたしも一しよに出て行くからなんですの。」
ソローミンは彼女の顏を眺めて、さも好人物らしく首をふつた。
「なるほど、なるほど、お嬢さん。——しかし、くどいやうですが、今にも革命が勃發しさうだから、それでこの家を出て行きたいと言はれるんでしたら……」
「わたし達はつまりそのために、あなたにおいでを願つたんですの。」とマリアンナは遮つた。「われわれの事業が、どんな狀態になつてゐるか、それを確かに伺ひたいと思つて。」
「さういふことなら、」とソローミンは言葉を續けた。「繰り返して言ひますが、あなたはまだこゝにじつとしてゐられますよ——かなり長くね。しかし、あなた方が互に愛しあつてゐて、それよりほかに結合の方法がないから、それで家出をしたいと仰しやるなら、その時は……」
「その時はどうなんですの？」
「その時は、昔から言ひ習はされた通り、互に仲よく睦まじく、と申し上げるばかりです。そしても

し必要なら、出來るだけのご助力をするつもりです。なぜといつて、お嬢さん、わたしは初めて會つた時から、あなたが——ネジダーノフ君もやはりさうですが——親身のやうに好きになつたからです。」
マリアンナもネジダーノフも、同時に左右から彼の傍へ寄つて——めい〳〵一本づゝその手をとつた。
「たゞね、わたし達はどうしたらいゝんでせう？　それを聞かして下さい。」とマリアンナが口をきつた。「たとへ革命はまだ先の事だとしても……いろんな準備の仕事は、この家で、かういふ狀況で暮らしてゐたら、とても出來つこありません——でもわたし達は、喜んでその仕事をしたいと思ひますの——二人一しよに……どうかあなた、それを教へて下さい……たゞ、どういふ方へ進んで行くのか、それを教へて下さればいゝんですの……どうかわたし達をやつて下さい！　ね、やつて下さるでせう？」
「どこへ？」
「民衆の中へ！……民衆の中でなくつて、どこへ行く所があります？」
『森の中へ！』とネジダーノフは考へた。パークリンの言葉を思ひ出したのである。
ソローミンはじつとマリアンナを見つめた。
「あなたは民衆を知りたいんですか？」
「えゝ、いえ——わたし達はたゞ民衆を知りたいばかりぢやありません——實行がしたいんですの……

…民衆のために働きたいんですの。」
「宜しい、お約束します。今に民衆を知らせて上げます。實行の可能を作つて上げませう、――民衆のために働く機會もね。ぢやネジダーノフ君、君も進んで行く覺悟ですね……この人の後について……民衆のために？」
「無論その覺悟です。」と彼はせき込んで言つた。『神車……』また別なパークリンの言葉が思ひ出された。『今にそいつが動き出すんだ、山のやうな車が……その轍のきしみと轟きが聞こえさうだ……』
「よろしい。」とソローミンは考へ深さうに繰り返した。
「しかし、いつ逃げ出すつもりです？」
「明日すぐにでも。」とマリアンナは叫んだ。
「よろしい、しかしどこへ？」
「しつ……靜かに……」と、ネジダーノフが囁いた。「誰か廊下を歩いてゐます。」
一同は口を噤んだ。
「一體どこへ逃げて行くつもりです？」またソローミンが聲を落としてかう訊いた。
「どこだか分りませんわ。」とマリアンナが答へた。
ソローミンは目をネジダーノフに轉じた。こちらはたゞ頭を横へふつたばかりである。
ソローミンは手をさし伸べて、用心ぶかく蠟燭の蕊をとつた。
「それぢやね、ご兩君。たうとう彼はかう言つた。「僕の工場へいらつしやい、汚らしい所だが――

しかし危險はありません。僕が匿まつて上げませう。僕の所に小さな部屋が一つあるから、あすこなら誰も搜し出せやしません。あなたがたの方で無事に着いてさへ下されば……その後は僕が引き受けました。或ひは、工場には人けが多いと言はれるかも知れないが、それが結句しあはせなんですよ。人けの多い所は隱れやすい譯ですからね。どうです、それでいいですか？」
「僕らはたゞ君に感謝するばかりです。」と、ネジダーノフが言つた。マリアンナは初め、工場と言はれて、ちよつと當惑を感じたが、すぐに勢ひよく口を添へた。「無論ですわ！　無論ですわ！　あなたは何ていゝ方でせうね！　でも、さう長くじつとして置きはなさらないでせう？　どこかへやつて下さるでせう？」
「それはあなたがた次第です……ところで、もしあなたがたが結婚したいとお思ひになつた場合には、家の工場はその點でも便利よく出來てゐますよ。ごく近所に、僕の從弟に當たる坊さんがゐます。名をゾシマといつて、ごく分かりの早い人間だから、すぐにあなた方の式を取り計らつてくれますよ。」
マリアンナはひそかに微笑を洩らした。ネジダーノフはもう一度ソローミンの手を握りしめた。けれど、暫らくたつて問ひを發した。
「ねえ、どうでせう、君の方の主人公は、つまり工場主は別に抗議を申し出やしないでせうか？　君に厭な思ひをさせるやうな事はないでせうか？」
ソローミンはネジダーノフを横目にじろりと見た。

「僕のことは心配しないでくれ給へ。そんなことは全然いらないことです。主人公はたゞ工場さへきちんと運轉してゐればそれでいゝので、そのほかのことは無關係ですよ。君にしても、また君の可愛いゝお嬢さんにしても、主人公に厭な思ひをさせられるやうなことは決してありません。また職工なども恐れる事はないです。たゞいつ頃お待ちしたらいゝか、それを前もつて知らせて貰ひたいですな。」

ネジダーノフとマリアンナは目と目を見合はせた。

「あさつての早朝か、それともその翌日。」たうとう、ネジダーノフはかう言つた。「もうこの上ぐづぐづする譯に行かない。早速あすにも、この家を斷わられるかも知れないんだから。」

「では……」とソローミンは言つて——椅子から立ち上がつた。「毎朝君がたを待つことにしませう。まる一週間うちを離れないことにしてね。準備は一切して置きます——ちやんと必要なだけ。」

マリアンナは彼の傍によつた……（彼は戸口の方へ行きかけたのである）

「左樣なら、優しい親切なヴシーリイ・フェドートゥイチ……たしかさう仰しやいましたね？」

「さうです。」

「さやうなら……ではない、またお目にかゝりませう！　有り難う、本當に有り難うございました！」

「左樣なら……お休みなさい、可愛いいお嬢さん。」

「ぢや、ネジダーノフさん、あなたにも左樣なら！　明日また……」と彼女は言ひ足した。

マリアンナは足早に部屋を出た。二人の青年はそのまゝ暫らくじつとしてゐた。——二人とも物をはなかつた。

「ネジダーノフ君……」到頭ソローミンは口をきつたが、また言葉を休めた。「ネジダーノフ君」……！とまた言ひだした。「あの娘さんのことを話してくれ給へな——君の話せるだけのことを。あの人のこれまでの生活はどんな風だつたんです？……あの人は一體どんな人なんです？……なぜこゝにゐるんです？……」

ネジダーノフは知つてゐるだけのことを、言葉みじかにソローミンに傳へた。

「ネジダーノフ君……」彼は最後にかう言つた。「君はあの娘さんを大切に守らなくちやいけませんよ。なぜといつて……もし……何か……あつたら、それは君、非常な罪惡ですよ。ぢや、左樣なら。」

彼は部屋を出てしまつた。ネジダーノフは暫らく部屋の眞ん中に立つてゐたが、「あゝ！　考へない方がいゝ！」と呟いて、寢臺へうつ伏しに身を投げた。

マリアンナは自分の部屋へ歸ると、卓（テーブル）の上に小さく折つた手紙を見出だした。それは次ぎのやうな內容であつた。

「わたしはあなたが氣の毒です。あなたは自分で自分の身を滅ぼしてゐます、正氣におなりなさい。あなたは目を塞いで、恐ろしい淵へ身を投げようとしてゐます。しかもそれは誰のため、何のためなのでせう？　V。」

部屋の中には一種特別なすが〳〵しい、微妙な匂ひが漂つてゐた。察するところ、ヴレンチーナ，

ミハイロヴナはたつた今こゝを出て行つたばかりらしい。マリアンナはペンを取つて、その下へかう書き添へた。どうかわたしを氣の毒がらないで下さい。わたし達二人のうち、どちらが餘計に氣の毒がられなければならないか、それは神様ばかりがご存じです。たゞわたしに分かつてゐるのは、あなたのやうな立ち場に置かれたくない、といふ事ばかりでございます。M」かうして彼女は、手紙を卓（テーブル）の上へ載せて置いた。この返事がヴレンチーナ・ミハイロヴナの手に屆くといふことは、彼女に取つて少しも疑ひがなかつた。

翌朝、ソローミンはネジダーノフにちよつと會つた後、シピャーギンの工場へ轉任の勸告をきつぱり拒絶して、わが家をさして歸つて行つた。道々彼は絶えずもの思ひに耽つた。大抵は馬車に搖られてゐるうちに、輕いまどろみに沈む彼として、それは珍らしい事であつた。彼はマリアンナのことを思ひ、またネジダーノフのことを思つた。もし自分が戀ひをしたなら、きつと顏つきも、話しぶりも、目つきも、すつかり違つてしまつただらう、といふやうな氣持ちがした。

『しかし、』と彼は考へた。「そんなことは今まで曾て起こつた事がないから、さういふ場合どんな顏つきになるやら自分ながら見當がつかない。』

彼は一人の愛蘭女（アイルランド）を思ひ出した。それはある店の勘定臺で、たつた一度みたばかりなのだが、ほとんどまつ黑なすばらしい髪の毛と、青い目と、濃い睫が、まざ〳〵と思ひ出された。それから、この女がもの問ひたげな、悲しい目つきで自分を眺めたことや、その後で自分が長い間、窓下の往來を歩きまはつて、この女と近づきになつたものかどうかと、わく〳〵しながら迷つたことなども、同じや

うに思ひ出された。それはほんのちよつと倫敦（ロンドン）に滯在してゐた時のことであつた。彼は保護者（パトロン）の依頼で買ひ物に行つたので、金も預かつてゐた。ソローミンはこの金を、すんでのことに保護者へ送り返して、そのまゝ倫敦にゐ着かうとさへ思つた。美しいポーリイが（彼はその女の名を知つた。友達の賣り子が呼びかけたからである）、彼に與へた印象は、それほど强烈なものであつた。しかし彼は自己を抑制して、自分の保護者のもとへ歸つた。ポーリイはマリアンナより美しかつた。けれど、マリアンナもやはりもの問ひたげな、悲しさうな目つきをしてゐる……それに彼女は露西亞人である……

「だが、おれは一體どうしただらう？」とソローミンは小聲で言つた。「ひとの戀人のことを心配するなんて！」

一さいの無用な想念を拂ひ除けようとするかの如く彼は外套の襟を一つ搖すり上げた。それに丁度をりよく、馬車はもう工場に近づいて、離室の閾ぎはに忠僕パーヱルの姿がちらと映つた。

二六

ソローミンの拒絶は、シピャーギンに非常な侮辱感を與へた。彼は急に風向きをかへて、あの露西亞じこみのスチヴンソンは、さう大した技師ぢやない、別にさう法螺も吹かないかも知れないが、正直正銘の平民だといふ證據にはおつに氣取つてゐるではないか、と言つた。「あゝいふ露西亞人と來たら、何か少しでも知つてると自惚れるが早いか、すぐ始末に終へなくなるのだ！　カルロメイツェフの言つた通りだ！」かういふ不愉快な、苛ら立たしい感じのお蔭で、堂々たる政治家——但し修

業中の――は、なほ一層無關心なよそ〳〵しい目つきで、ネジダーノフを眺めたのである。彼はコーリャに向かつて、もうそろ〳〵一本だちになる稽古をしなくちゃならないから、今日は先生と一しよに勉強しなくてもいゝと言つた。しかし當の先生に向かつては、こちらで内々期待してゐたやうに、いきなり斷わるやうな事もしなかつた。たゞ、依然として彼を無視するばかりであつた！　その代はり、ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、マリアンナを無視しようとしなかつた。二人の間には恐ろしい場面が演じられた。

食事の二時間ばかり前、兩人は偶然ふたりきり客間にとり殘されたのである。避くべからざる衝突の時が來た事をどちらもすぐに直感したので、ちよつと一瞬間ためらつた後、しづかに兩方から近づいて行つた。ヴレンチーナ・ミハイロヴナは輕い微笑を浮かべてゐた。マリアンナは唇を嚙みしめてゐた。二人とも顏色はまつ青であつた。ヴレンチーナ・ミハロイヴナは部屋を横ぎり乍ら、左右を交る交る見まはして、ゼラニウムの葉を、一枚むしり取つた……マリアンナの目は、微笑を浮かべながら近づいて來る叔母の顏へ、まともにそゝがれてゐた。

シピャーギン夫人がまづ立ち止まつた。そして指先で椅子の背を輕く叩きながら、

「マリアンナ・ギケンチエヴナ」と彼女は無雜作な聲で言ひだした。「わたし達はお互に、書信の往復といつたやうな事をしてるやうですね……一つ屋根の下に暮らしてゐながら、ずゐぶん妙な話しですわね。わたしがいかもの好みでないことは、あなたもご承知の筈ですが。」

「その書信の往復を始めたのも、わたしが先ぢやありませんわ、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ。」

「さう……それは仰しやる通りです。今度もち上がつた奇妙な事の責任は、確かにわたしの方にあります。たゞね、わたしはほかに方法を考へつけなかつたんですの、つまりあなたの心に……何と言つたらいゝか知ら？……あなたの心に……」

「眞つ直に言つて下さい、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ、どうかご遠慮なく――わたしを侮辱しやしないかなんて、そんなご心配は決していりませんから。」

「つまり……嗜みといふ感じを起こさせるために……」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは口をつぐんだ。部屋の中には、椅子の背を輕く叩く彼女の指の音が、こつ〳〵と聞こえるばかりであつた。

「どういふ譯で、わたしが嗜みを忘れたとお思ひになりますの？」とマリアンナは訊ねた。

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは肩を竦めた。

「ねえ、あなたはもう子供ぢやないんだから、わたしの言ふ事はよく分かつておいでの筈です。一體あなたは、自分のしてゐることが、わたしにも、アンナ・ザハーロヴナにも、また家ぢゆうの人にも、いつまでも祕密にして置かれると思ひますか？　尤も、あなたはそれを祕密にしようといふやうな事は、大して心配もなさらない樣子ね。あなたのやり方は、まるで大威張りなんですもの。たゞボリース・アンドレーイッチだけは、そんな事に氣を止めなさらなかつたかも知れません……あの人はもつと興味の高い、もつと重大な仕事でお忙がしいんですからね。だけど、あの人を除けたら、あなたの品行は、みんなに知れ渡つてゐますよ。みんなに！」

マリアンナの顏は次第々々に靑くなつて行つた。

「ヴレンチーナ・ミハイロヴナ、もつとはつきり言つて頂きたいものですね――一體なにがあなたのお氣に召さないんでせう？」

『生意氣な！』とシピャーギン夫人は考へたが、それでもまだ自分を抑へつけた。

「何がわたしの氣に入らないか、それをあなたは知りたいんですね、マリアンナ？――よござんす！――わたしはね、あなたが若い男の人と二人で、長いあひだ話しこんでるのが氣に入らないんです。あの人は生まれから言つても、教育から言つても、社會上の地位から言つても、あなたにはまるつきり釣り合はない人ぢやありませんか、あなたが夜おそく……そんな人の所へ會ひに行くのが、わたしの氣に入らないんです……いえ、それぢや餘り言葉が弱すぎます――わたしは憤慨してゐるんです。しかも、それはどこだと思ひます。わたしの家の屋根の下なんですからね！　それとも、あなたはそれが當り前のことで、わたしも默つて見てゐなくちやならない、それどころか、あなたの輕はずみな行ひを保護しくなちやならない、とでも考へてゐらつしやるんですか！　わたしは潔白な婦人として……えゝ、さうですとも、わたし（ジュ・シー）は過去もさうであつたし（エテー・シュ・ル・シュイ・エ・ル・ヌレー）、現在でもさうだし（トウジュ・ー・ル）、未來だつていつまでも變はらないつもりです！――わたしは忿懣を感じないぢやゐられません！」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、この忿懣の重荷に耐へないやうに、肘椅子の上へ身を投げた。

マリアンナは初めてにたりと笑つた。

「わたしは過去、現在、未來に亙るあなたの潔白を疑ひはしませんわ。」と彼女は言ひだした。「わたしは本當に心からさう思つてゐるんですの、だけどその憤慨はご無用ですわ。あなたのお宅の恥ぢになるやうなことは、わたしちつともしはいたしません。あなたの當てこすつてゐらつしやる若い人は……えゝ、わたしは本當に……あの人を戀ひしてゐます……」

「あなたがモッシウ、ネジダーノフを戀ひしてるんですつて？」

「わたしあの人を愛してゐます。」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、肘椅子の上に身をそらした。

「まあ、飛んでもない、マリアンナ！　あの人は家もなければ、身分もない學生ぢやありませんか――あの人は、あなたより年下ぢやありませんか！　この最後の一句は、いくぶん意地わるい喜びの調子で發しられた）まあ、これがどうなることだと思ひます？　あなたのやうな賢い人が、あの人にどんないゝところを見つけたんです？　あの人はたゞのつまらない小僧つ子ぢやありませんか。」

「しかしあなただつて、前からさう思つてゐらしつた譯ぢやないでせう、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ？」

「まあ、何といふ事だらう！　どうかわたしの事なんか構はないで頂戴……さう、むきにならないで頂戴（パ・クン・デスプリ・ク・ジュ）、後生（ユ・ヴ・ー・プリ）だから。いま話してるのはあなたの事ぢやありませんか、あなたの將來のことぢやありませんか。考へてもご覽なさい！　あれがあなたに釣りあふ緣ですか？」

「正直に申しますと、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ。わたし緣などといふ事は考へても見ませんの。」

「え？　何ですつて？　それはなんと取つたらいゝんでせう？　まあ、かりにあなたが情にひかれ

て、夢中になつたのだとしても……でも結局は、結婚といふ事にならなくちやならないでせう？」
「分かりませんわ……わたしそんな事は考へても見ませんから。」
「考へたこともないんですつて？　まあ、あなたは氣でもちがつたの！」
マリアンナはやゝ顏をそむけた。
「もう、こんな話しはやめにしませう、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ。こんな話しをしたつて、何にもなりやしませんわ。どうせお互に分かりつこないんですから。」
ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、はじかれたやうに立ち上がつた。
「わたしはこの話しをやめる譯に行きません、それにまたやめるべきものでもありません！　これは餘り問題が重大すぎます……わたしあなたの事についちや責任がありますからね。……」ヴレンチーナ・ミハイロヴナは『神様に對して！』と言はうとしたが、ちよつと詰まつて「世間に對して！」と言ひ直した。「そんな氣ちがひめいた事を耳に入れ乍ら、わたし默つてる譯に行きません！　それに、どうしてわたしがあなたを理解できないんでせう？　本當に今の若い人達の高慢なことと言つたら、まるで我慢できない！　いゝえ……わたしはよく理解してゐますよ、よく分かつてゐますともー—あなたは謂はゆる新思想にかぶれて、否應なく破滅の淵へ引つぱられて行つてるんです！　けれどさうなつて了つたら、もう取り返しがつきませんよ。」
「さうかも知れません、だけどご安心ください——わたし達は破滅しながらも、あなたなんかに助けて下さいと言つて、指一本のばしやしませんから！」

「またそんな高慢なことを！　何といふ恐ろしい高慢な人だらう！　ねえ、お聞きなさい、マリアンナ、わたしの言ふことをお聞きなさい。」と急に調子をかへて、彼女は言葉を續けた……彼女はマリアンナを引き寄せようとしたが、こちらは一歩あとへ引いた。「わたしの言ふことを聞いて頂戴、後生だから！　わたしだつて、とても話し合ひが出來ないほど、それほど古くもなければ——それほど馬鹿でもないつもりなのよ！　わたし決して分からず屋ぢやありません。それどころか、若い時分には共産黨と言はれたほどですよ……あなたに負けないくらゐね。よござんすか、面なんか被らないで率直に言ひますが、わたしはあなたに對して、母親らしい愛情など感じたことは、たゞの一度もありません。それに、あなたの氣性としては、それをつらがる事なんかないでせう……けれど、わたしはあなたに對して責任があります。それを承知してゐます——だから、わたしはいつもそれを果たさうと努めて來たんです。事によつたら、わたしがあなたのために空想してゐた緣談は、充分あなたの理想に合ひかねたかも知れません……けれど、わたしにしろ、ボリース・アンドレーイッチにしろ、そのためにはどんな犧牲も躊躇しないつもりでした。わたしの深い心の底では……」
マリアンナはヴレンチーナ・ミハイロヴナをじつと見つめてゐた——あの美しい眼、かすかに紅をさした薔薇色の唇、指環で飾りたてた指を輕くひろげて、絹の上着に品よくあてた眞つ白な手……彼女は不意に相手を遮つた。
「緣談ですつて、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ？　あなたは『緣談』と仰しやるんですね——それは

あなたのお友達ですの、あの魂のない俗物の、カルロメイツェフさんのことですの？」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、上着の胸から指を離した。

「さうですよ、マリアンナ・ギケンチエヴナ！　わたしが言ふのはカル■メイツェフさんのことです——あの立派な教育のある青年のことです——あの人は必ず妻を幸福にすることの出來る人です。あいふ緣談を斷わるのは、たゞもう氣ちがひばかりです！　氣ちがひですとも！」

「しようがありません、叔母(マダム)さん！　わたしはさうした女なんでせうよ！」

「でも、一體あの人のどういふ所がいけないと言ふの——そんなにむきになるほど？」

「いゝえ、なんにもありやしません！　わたしはたゞあの人を輕蔑してるんですの……それつきりですわ……。」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、じれつたさうに首を左右にふつて……また安樂椅子に腰を落とした。

「ぢや、あの人の話しはよしませう。もとの話しに戻りませう。で、あんたはネジダーノフさんを愛してるの？」

「えゝ。」

「そして、やはり續けて行くつもり……あの人とのあひゞきを？」

「えゝ、そのつもりですわ。」

「ぢや……もしわたしが止めたら？」

「あなたの言ふことを聞かないまでですわ。」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、椅子の上で躍り上がつた。

「へえ！　言ふことを聞かないんですつて！　おやまあ！……それが、わたしから恩を受けた娘の言ひ草なんだからね、これが家で世話になつてゐる娘の言ひ草なのかしら、……これが一體……」

「日蔭者の親を持つた娘の言ひ草か、とでも仰しやりたいんでせう。」マリアンナが沈んだ聲で引き取つた。「どうぞ先を言つて下さい、ご遠慮なく！」

「あなたにそれを言はしたのは、わたしじやありませんよ、お孃(ネ・パ・モア・キ・ヴー・ハ・フエー・ル・デー・ル)さん！　けれど、いづれにしても、そんな事はあまり自慢になりませんからね！　とにかく家のパンを食べてゐる娘が……」

「どうか、お宅のパンでわたしを責めるのはよして下さい。ヴレンチーナ・ミハイロヴナ！　もしコーリャの家庭教師に佛蘭西女をお傭ひになつたら、も少し高くついたでせうよ……だつて、コーリャに佛蘭西語の授業をしてゐるのはわたしなんですからね。」

一方の隅に白糸で大きく頭字を縫つた、イラング・イラングの匂ひのぷん〳〵する精麻(パチスト)の手巾を握つたまゝ、ヴレンチーナ・ミハイロヴナはその手をちよつと持ち上げて、何やら言はうとしたが、マリアンナはおつ被せるやうに言葉を續けた。

「もし、あなたが今かぞへ上げなすつた、至極あやふやな恩惠の代はりに、『わたしの愛してやつた娘』と仰しやつたら、それこそ幾千倍りつぱだつたか知れません。全くさう仰しやつたつて、さし支へはなかつたんですのにねえ、……ところが、あなたは潔白なお方だもんだから、さういふ嘘をつく

事がお出來にならなかつたのね！』マリアンナは熱病やみのやうにがたがた慄へてゐた。「あなたはいつもわたしを憎んでゐらしつたんです。あなたはついたつた今さき、深い心の奥底から、わたしが恥ぢを曝すのを喜んでらつしやるのです――えゝ、わたしが世間のもの笑ひになつて、あなたのかねての豫言を實現させるのが、嬉しくてたまらないんですわ――たゞこの恥ぢさらしの一部分が、ご自分の貴族的な高潔な家に降りかゝるのが、不愉快なだけなんですわ。」

「あなたはわたしを侮辱してゐらつしやる。」と、ヴレンチーナ・ミハイロヴナは嘯いた。「どうか出て行つて下さい。」

けれどマリアンナは、もう自分で自分を抑へることが出來なかつた。

「あなたはさつき家ぢうのものと仰しやいましたね。家ぢうのものが――アンナ・ザハーロヴナに至るまで――わたしの品行を知つてゐると仰しやいましたね！ 誰もかれも呆れて憤慨してゐるつて……ですけど、わたしが何かあなた方に、つまりそのみんなの人に、無心でもした事がありますか？ 一體あなたは、わたしがあんな人達の意見を氣にするなんて、そんな事を考へてゐらつしやるんですの？ あなたのパンがわたしに取つてどんなに苦いか、それがあなたにお分りですの？ わたしはね、どんな貧しい暮らしでも、こんな腐澤な暮らしよりましですわ。わたしと此の家の間には、誰も、誰一人埋めることの出來ない、深い〳〵淵があるのにお氣がつきませんか？ あなたがわたしに憎しみを感じてゐらつしやるとすれば、わたしがあなたに抱いてゐる心持だつて、お分りになりさうなもんぢやありませんか？ わたしがこの心持ちを名ざして言はないのは、たゞ餘り分かり切つてゐ

るからです。」

「……出てお行き、出てお行きといふのに……」とヴレンチーナ・ミハイロヴナは繰り返しながら、その華奢な小さな足をとんと踏み鳴らした。

マリアンナは戸口の方へ一歩ふみ出した。

「今すぐ出て行つてさし上げます。でも、覺えてゐらつしやるでせう、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ？ ラシーヌの『バヤゼー』に出て來るラシェールでさへ、この出て行けはうまく行かなかつたさうですもの、あなたなんか尚さらですわ！ それからもう一つ言つて置きませう。えゝと、何とか仰しやいましたつけ……わたしは潔白な婦人です。過去もさうであつたし、未來だつていつまでも變はらないつもりです。と言ふんでしたつけね？ ところがお聞き下さい、わたしの方があなたなんかより、ずつと潔白だと信じてゐますわ！ さよなら！」

マリアンナは急ぎ足に出て行つた。ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、肘椅子から飛び上つて、叫び聲を立てようとしたが、また泣き出したくもあつた……けれど何と叫んでいゝのか分らなかつたし、涙も彼女の意に從はなかつた。

で、彼女は手巾で顏を煽ぐだけでお了ひにしたが、その手巾から發散する薫りが、尚さら彼女の神經を苛ら立たすばかりであつた。彼女は自分が辱かしめられた、不幸なもののやうに感じた……彼女はいま聞いた言葉の中に幾分の眞理を認めたが、しかしそれにしても、どうして自分のことを沒義道に非難することが出來るのだらう？『一體わたしはそんなに惡い女か知ら？』と考へて――彼女は自

分のまん前にある、窓と窓の間にかゝつた鏡の中を覗いて見た。鏡の中には――ところ〴〵赤いしみが滲み出して幾分曲がつたやうになつてはゐたけれど、それでも依然として魅力に充ちた艶な顔と天鵞絨のやうな柔かみを帶びた美しい眼が映つてゐた。……『わたしが？　わたしが惡い女だつて？』と、彼女はまた考へた。『こんな目をしてゐるのに！』

しかしこの瞬間、夫がはいつて來た――彼女はまたもや手巾で顏を蔽つた。

「お前どうしたの？」と彼は心配さうに訊いた。「一體どうしたの、ヴーリヤ？」（彼は妻のためにこゝの愛稱を考へ出したが、――かしそれは全然さし向かひの時、それも主に田舍へ來た時でなければ、使はないことにしてゐた）。

彼女は初め言葉を濁して、何でもないと言つてゐたが……結局とゞのつまり、恐ろしく優美なしをらしい恰好で、肘椅子の上に身を轉じて、夫の肩に兩手を投げた――（彼は妻の方へ身を屈めてゐたのである）――そして、胸着（チョッキ）の前あきへ顏を埋めながら、ありのまゝをすつかり話した。別に狡猾な考へも底意もなしに、マリアンナの罪を許さうとした――といふのが間違ひとすれば、少くともその辯護に努めた。何もかも彼女の年の若さと、熱情的な性質と、幼い時の教育の不足に、罪を歸したのである、それからある程度までやはりべつだん底意なしに、自分で自分を責めた。

「もしあれがわたしの娘だつたら、こんな事にもならなかつたでせうに！　わたしの監督のしぶりも違つてたでせうに！」

シピャーギンは寛大な同情に滿ちた――しかも嚴格な態度で、最後まで聞き終つた。そして、妻が

兩手を肩からおろして顏をそむけるまで、じつと體を屈めたままでゐた。彼は妻を天使（エンゼル）と呼んだり、その額に接吻したりして、自分の役割り――一家の主（あるじ）としての役割り――が、いかなる行爲を要求するか、今こそ分かつたと言つて、自分の部屋へ引き上げた。それは不愉快だけれど、必要な義務を果たさうとしてゐる、人情味に富んだ、しかも精力的（エネルギッシュ）な人間といふ恰好であつた。

その晩の七時すぎに食事が終つてから、ネジダーノフは自分の部屋に籠つて、例の親友シーリンに手紙を書いてゐた。

「わが友ヴラヂーミルよ、僕は自分の生涯の重大な轉換期に當つて、君にこの手紙を書くこととした。僕はこの家を斷わられたので、こゝから出て行かうとしてゐるのだ。こんな事は何でもない筈なのだが……實は、こゝを出て行くのは僕一人きりでないのだ。いつか君に手紙で知らせたあの娘が僕について來ることになつてゐる。僕達はあらゆる點において結びつけられてゐるのだ。運命の相似も、信念と目的の一致も――それに相互の愛情も、すべて僕らを繫ぐ絆ならざるはない。僕らは互に愛しあつてゐる。少くとも僕自身は、いま現に經驗してゐるものと異なつた形式では、愛の感情を經驗することは出來ないと信じる。しかし僕は君に嘘をつきたくない。實を言へば、內心ひそかに恐怖の念と、一種不思議な胸の痛みを感じないではない――一寸さきはすべて闇だ――その闇の中へ僕らは二人で飛び込むのだ。僕らが何に向かつて進まうとしてゐるか、いかなる活動の範圍を選んだか、それは今さら言ふ必要がなからう。僕とマリアンナは幸福を求めてゐるのではない、快樂を欲するのでもない――たゞ互に助けあひながら、一しよに並んで闘ふのだ。僕の目的ははつきり分かつてゐる

が、併しいかなる道によつてそこに達し得るか――それが僕らに分からないのだ。たとへ同情や助力でないまでも、せめて活動の可能だけでも見出だし得るだらうか？　マリアンナは立派な潔白な少女だ。もしわれわれが破滅の運命を擔つてゐるとしても、僕は彼女を卷き添へにしたといふ悔悟の念で、自ら責めるやうなことはないだらう。なぜと言つて、彼女にとつては、もうそれよりほかの生きかたがなかつたからだ。――しかし、ヴラヂーミル、ヴラヂーミル！　僕は苦しい……疑惑が僕をさいなむのだ。たゞし、僕自身にも分からない！　しかし、今さら後戻りする譯に行かない、もう遲い。どうか僕ら二人に、遠方からでも手をさし伸べてくれ――そして忍耐と、自己犧牲の力と、そして愛を祈つてくれ……何よりも愛を祈つてくれ。あゝ、汝、露西亞の民衆よ、われらの全存在を擧げ、われらの胸の血潮を悉く傾けて愛しながら、しかもわれらの未だ知らざる露西亞の民衆よ、餘りに冷たくわれらを迎へないでくれ。そして何を汝から期待すべきか敎へてくれ！

左樣なら、ヴラヂーミル、左樣なら！」

この短かい手紙を書き終つてから、ネジダーノフは村の方へ出かけて行つた。――翌朝、やうやく東が白みかゝつた頃、彼はもうシピャーギン家の庭から程遠からぬ、白樺の森の端れに立つてゐた。そのちよつと後ろには、轡のない二頭の痩せ馬をつけた百姓馬車が、廣々と絡みあひながら繁つた胡桃の青葉の蔭から、見え隱れに覗いてゐた。馬車の中には繩で編んだ腰掛けの蔭で、年とつた白髮の百姓が、一抱への乾し草を敷いて、つぎはぎだらけの外套を枕に眠つてゐた。ネジダーノフは、庭に添うた柳の繁みから道路の方を、じつと目も離さずに見つめてゐた。灰色をした靜かな夜は、まだあ

たりに立ち罩めてまばらな星くづは、空虛な空の深みへ取り殘されたかの如く、互に消しあふやうに瞬いてゐた。長く伸びた黑雲が丸みを帶びて垂れた下の端に、東の方から弱々しい赤みがさして、それと同じ方角から、早朝の冷氣が初めて靜かに流れて來た。不意にネジダーノフは、思はずはつと身ぶるひした。どこか近くの方で庭木戸が初めぎいつと軋んで、それからかたんと鳴つた。肩かけにくるまつた小さな女の姿が、むき出しの手に包みをかゝへて、じつと動かぬ柳の蔭から、柔かい街道の埃の上へ、ゆる〳〵と現れた――そして、はすかひに道を横切ると、爪先だちでもしてゐるやうな足どりで、林の方へ進んで來た。ネジダーノフはその方へ飛んで行つた。

「マリアンナ？」と彼は囁いた。

「わたし！」かういふ小さな聲が、垂れかゝつた肩かけの蔭から響いた。

「こつちへ、僕の後について。」包みを持つた、むき出しの手を不器用さうに取りながら、ネジダーノフはかう答へた。

彼女は寒けでもするやうに身を縮めてゐた。彼は馬車の傍へつれて行つて、百姓を呼び起こした。こちらは身輕にはね起きて、すぐさま馭者臺へよぢ昇ると、外套の袖へ手を通し、繩の手綱をとり上げた……馬は身うごきをはじめた。百姓はぐつたり寢こんだ後なので、妙にしはがれた聲で用心ぶかくそれを制した。ネジダーノフは、まづ自分の外套を繩で編んだ腰掛けに敷いて、その上へマリアンナを坐らせ、その足を毛布で包んだ後（馬車の底に敷いた乾し草は濕つてゐた）、自分もその傍に腰をおろした。そして百姓の方へ身を屈めながら、小さな聲で、「さあ、やれ、分かつてるだらう。」と

言つた。百姓は手綱をしやくり始めた。すると馬は鼻を鳴らしたり、體をうねらしたりしながら、森の外へ出て行つた——馬車は小さな古い轍をがたがた躍らしながら、街道づたひに走りはじめた。ネジダーノフは片手でマリアンナの體を支へてゐた。彼女はその冷たい指で肩掛けを持ち上げて、男の方へ顔を向けながら、につこり笑つた。

「何てさば〳〵したいい氣持ちでせう、アリョーシャ！」と彼女は言つた。

「さうでござえますよ。」と百姓が答へた。「露がさぞ酷えこんでごぜえますべ！」

露はもう深かつた。轍は道ばたの高い雜草の頂きに觸れて、まるで珠數のやうな繋がつたこまかい水たまを、はらはらと落とした——草の絲は灰色がかつた鳩羽いろに見えた。

マリアンナは寒さに身を縮めた。

「さば〳〵すること。本當にさば〳〵すること。」と彼女は愉快さうな聲で繰り返した。「それに自由なんですもの、アリョーシャ、自由なんですものねえ！」

二七

どこかの旦那と奥さんが、百姓馬車がやつて來て、面會を求めてゐると、走つて來た取り次ぎが報じるや否や、ソローミンは工場の門口へ駈け出した。客に挨拶もせずに、たゞ幾度か頷いて見せただけで、彼はすぐ百姓の馭者に庭へはいれと言つた——そして——いきなり自分の離室まで乘りつけさせてから、マリアンナを車から助けおろした。ネジダーノフはその後から飛びおりた。ソローミンは

細長い廊下を抜けて、狹い曲がつた椅子づたひに、二人を離室の裏二階へ案内した。やがて彼は一つの低い戸を開けた——そして三人は窓の二つ附いた、かなり小綺麗な、小さな部屋へはいつた。

「よく來ましたね！」といつもの微笑を浮かべながら、ソローミンは口をきつた。しかし今度はその微笑がふだんより明かるく、大きく擴がつてゐるやうに思はれた。

「これが君がた二人の住まひです。この部屋と——それからすぐ隣りに、もう一つ別なのがあります。見てくれはよくないが、しかしまあ、暮らすのに不自由はありませんよ。それにこゝなら誰も見る者がゐないから。そこの窓の下に——持ち主の謂はゆる花園があるけれど、僕に言はせれば——野菜畠ですよ。こいつが塀まで續いてゐて——左右は垣根になつてゐます。閑靜な所ですよ！——さあ、もう一度ご機嫌よう！可愛いいお孃さん——それからネジダーノフ君、ご機嫌よう！」彼は二人の手を握りしめた。二人は外套も脱がずじつと立つてゐた——そして半ばびつくりしたやうな、半ば嬉しさうな興奮の色を浮かべながら無言のまゝじつと目の前を見つめてゐた。

「さて、どうですか？」とまたソローミンが言ひだした。「まあ、外套でもお脱ぎなさい！　荷物はどんなものです？」

マリアンナは、依然として、手を持つてゐる包みを示した。

「わたしのはこれきりですの。」

「僕のは鞄と袋です、馬車に殘してあります——一つ僕がいま……」

「じつとしておいでなさい、じつとして。」ソローミンは戸を開けた。「パーヱル！」と彼は梯子の

暗闇に向かつて叫んだ。「お前ひとり走り行つてくれないか……あの馬車の中に荷物があるから……それを持つて來るんだ。」

「たゞ今。」いつも影身に添うて離れぬパーゼルの聲が聞こえた。

ソローミンはマリアンナの方へ向いた。こちらは肩掛けを捨てゝ婦人外套(マンチリヤ)の釦をはづしにかゝつた。

「萬事うまく行きましたか？」と彼は訊ねた。

「えゝ、萬事……誰にも見つかりませんでしたわ。――わたしシビャーギンさんに手紙を置いて來ました。わたしはね、ヴシーリイ・フェドートゥイチ、着物も肌着も持つて來ませんでしたの。だつて、あなたはわたし達をやつて下さるお約束でせう……（マリアンナはなぜか『民衆の中』へとつけ足す勇氣がなかつた）――それに同じことでせう。どうせ役に立たないんですから、お金は持つてをりますの、いるものを買ふだけ。」

「そんな事は後でゆつくり相談しませう……ところで、」ネジダーノフの荷物を持つて、部屋へはいつて來るパーゼルを指さしながら、ソローミンはかう言つた。「この工場に於ける僕の良友をご紹介します。この男には充分信頼なすつてよろしい……ちやうど僕と同じやうにね。――お前タチヤーナに、サモワールのことをさう言つたかね？」と彼は小聲に言ひ添へた。

「今直ぐ出來ます。」とパーゼルは答へた。「クリームも――何もかもすつかり。」

「タチヤーナといふのは、これの家内なんです。」とソローミンは言葉を續けた。「そして、やはり

この男と同じやうに、間違ひのない女です。やがてそのうちにご自分で……まあその、騙れて來られるまで、その女があなたのお世話をしますよ、お嬢さま。」

マリアンナは隅に置いてある、小さな革の長椅子に婦人外套を投げ出した。

「ヴシーリイ・フェドートゥイチ、わたしをマリアンナと呼んで下さい――わたしお嬢さんなんかでゐたくないんですから。それに女中めいた者もいりません……わたしがあの家を出たのは、女中なんか持つためぢやありませんもの。わたしの着物なんか目をつけないで下さい。ほかに何もなかつたものですから。こんなものはすつかり變へなくちやなりませんわ。」

着物は鳶色のドラ・デ・ダームで作つたもので、ごくさつぱりした型であつたが、彼得堡(ペテルブルグ)の仕立て屋が縫つたので、マリアンナの肩や體に美しく落ちついて――全體に流行の衣裳といふ感じを與へた。

「いや、女中でいけなければ、助手といふ事にしましよう、亞米利加式にね。しかし、とにかくお茶は飲んで下さい。今はまだ早いし――それに二人とも、きつとお疲れになつたでせう。僕はこれから工場へ仕事に行きますから、も少したつて、またお目にかゝりませう。何かいるものがあつたら、パーゼルかタチヤーナにさう言つて下さい。」

マリアンナはいきなり彼に兩手をさし伸べた。

「ヴシーリイ・フェドートゥイチ、どんなにお禮を言つたらいゝんでせうね？」彼女は感激に滿ちた目で相手を眺めた。

ソローミンはそつと彼女の片手を撫でた。

「お禮なんかいりません——と言ひたいのですが……それでは嘘になります。それよりいつそ、あなたの感謝はわたしに非常な滿足を與へます、とかう言つて置きませう。それでもうお互に棒引きです。さやうなら！　パーヱル、さあ行かう。」

マリアンナとネジダーノフは二人きりになつた。

彼女は男に身を投げた——そして、ソローミンを見た時と同じやうな目で彼を見つめながら（尤も、その目は一層うれしさうに、一そう感激に滿ちて、晴ればれとしてゐた）、口をきつた。

「あゝ、あなた！　わたし達は新しい生活を始めるのね……やつとのことで！　やつとのことで！この貧しい住まひが、あの忌々しいお邸に比べて、どんなに嬉しく懷かしく思はれるか、とてもあんたには分からないでせうね！　尤も、こゝにはほんの四五日しかゐられないんだけれども。ねえ、あんたも嬉しいでせう？」

ネジダーノフは彼女の兩手を取つて、自分の胸へ押しあてた。

「マリアンナ、僕は幸福だ、この新しい生活を、あんたと一しよに始められるんだもの！　あんたは僕の手引きの星だ、僕の杖だ、僕の勇氣だ……」

「わたしの大すきなアリョーシャ！　でも、待つて頂戴——少しほこりでも落として、身なりを繕ろつて來なくちやならないわ。わたし自分の部屋へ行つて來るから……あんたはこゝで待つてらつしやい。わたしすぐ歸つて來るから……」

マリアンナは次の間へはいつて戸を締めた——一分ほどたつて、半ば扉を開けながらその間から首を突き出した。

「あのソローミンさんは何ていゝ人でせう！」と言つたかと思ふと、彼女はまた戸をぴつたり締めた——がちりと鍵をかける音が聞こえた。

ネジダーノフは窓の傍へよつて、小さな庭を眺めた……一本の古い〳〵林檎の木が……なぜか特別かれの注意をひいた。——彼は一つ身慄ひして伸びをすると、自分の持つて來た鞄を開いた——が、その中から何を取り出すでもなかつた。彼はもの思ひに沈み始めた……十五分ばかりたつた後、マリアンナが歸つて來た。洗ひたての生き〳〵したの顏つきで、全體に樂しさうな快活な樣子をしてゐた。それから間もなく、パーヱルの家内のタチヤーナがサモワールや、茶道具や、佛蘭西パンや、クリームなどを持つて現れた。

亭主がジプシイ然としてゐるのに打つて變はつて——これはまた生粹の露西亞女であつた。白つぽい髪を固く大きく卷いて、それを角の櫛でとめてゐた。發育のいゝ體をして、顏の輪廓も大ぶりながら氣持ちよく、灰色の目はごく善良な表情をしてゐた。彼女は色こそ少し褪めてゐるが、小ざつぱりした更紗の着物を身につけてゐた。手は大きいけれど、清潔で美しかつた。彼女は落ちついたもの腰で會釋すると、しつかりした齒ぎれのいゝ聲で、

「ご機嫌いかゞでございます。」と言つた。その聲には、露西亞の百姓女につき物の、唄ふやうな調子が少しもなかつた。それからすぐにサモワールや茶碗を竝べはじめた。

マリアンナはその傍へよつた。

「ご免なさい、タチヤーナさん。わたしもお手傳ひしますわ。ナプキンでもいゝから貸して頂戴。」

「構ひませんよ、お嬢さん。わたくし共は馴れてをりますから——様子はヴシーリイ・フエドートウイチから聞きました。もし何かご用があつたら、ご遠慮くなさう言つて下さるやうに。わたし達はもう喜んで……」

「タチヤーナさん、どうかわたしをお嬢さんなどゝ呼ばないで頂戴……わたしは身なりこそお屋敷風だけれど——でも、わたし……わたしはすつかり……」

タチヤーナの鋭く注意ぶかい視線は、マリアンナをまごつかした。彼女は口を噤んだ。

「あなたはどういふ方でゐらつしやいます？」とタチヤーナが例のなだらかな聲で訊ねた。

「ぜひ聞きたいなら言ひますが……わたしはほんとに……わたしは貴族の生れですの。でも、そんなことをすつかり捨ててしまつて——みんなと同じやうに……普通の女と同じやうになりたいんですの。」

「まあ、さうですか！　なるほど、それで分かりました。ぢや、あなたは裸一貫になりたがつてゐる人達のお仲間ですね——當節はさういふ人が隨分ありますよ。」

「あなた何と言つたんですの、タチヤーナさん。裸一貫になるんですつて？」

「はい……この頃さういふ言葉がはやり出しましてね。つまり、平民と同じやうになることなんでございますよ。裸一貫になる——さうでございますよ、百姓たちに賢い分別を教へてやるんですから、

結構なことでございますとも。でも、なか〳〵骨の折れることでございますよ！　え、え、骨が折れますとも！　でも、どうかうまくお仕遂げなさるやうに！」

「裸一貫になるつて！」とマリアンナは繰り返した。「ねえ、アリョーシャ、わたし達はお互にもう裸一貫の人間なんだつて！」

ネジダーノフは聲を立てながら笑つて、わざ〳〵繰り返してみた。

「裸一貫になる！　裸一貫になつた人！」

「ときに、この方はあなたの何でゐらつしやいます？お婿さんですか——それともご兄弟ですか？」

大きな器用さうな手で、そつと茶碗を洗ひながら、優しい薄笑ひを浮かべ、タチヤーナはかう訊いた。

「い、え。」とマリアンナは答へた。「お婿さんでもなければ、兄弟でもないのよ。」

タチヤーナは顔を上げた。

「してみると、たゞ何といふことなしに、ご自分の好き自由で一緒になつてゐらつしやるんですね！この節はさういふ事もやはりよくありますよ。——今まではおもに、分離派教徒の仲間にあつた事ですが、今ではほかの人達の間にも移つて來ましたよ。なに、たゞ神さまへ祝禱して下すつて、仲よく暮らしてさへ行けば、それで宜しうございますよ！　さうすれば、坊さんなんか要りやしませんよ。家の工場にもさういふ人がちよい〳〵ありますが、決して惡い連中ぢやありませんからね。」

「あんたは本當にい、ことを言ふのね、タチヤーナさん！——『自分の好き自由』だなんて……わた

しすつかり氣に入つちやつたわ。——ねえ、タチヤーナさん、わたしあんたにお願ひがあるのよ。實は着物を縫ふか買ふかしたいんですの、あんたの着てるやうなのか、それともも少し粗末なものをね。靴も、靴下も、肩掛けも——みんなあんたと同じやうにしたいの。それくらゐのお錢はありますから。」「えゝ？、お嬢さん、ようございますとも……あゝ、もう申しません、どうぞお怒りにならないで——もうお嬢さんなどと呼びはいたしません。何と、お呼びしたらいゝのでせう？」

「マリアンナ。」

「それでは、ご父稱の方は何と仰しやいます？」

「父稱なんか訊いて何になさるの？　たゞマリアンナだけで結構よ。わたしだつてあなたを、タチヤーナと呼んでゐるんですもの。」

「それはさうでもございますが——まださうも行きませんね。やつぱり聞かせて頂きませう。」

「ぢや、いゝわ。わたしのお父さんは、ギケンチイといふ名前でしたの。ぢや、あなたのお父さんは？」

「わたしのはオシップでございます。」

「さう、ぢやわたしあなたをタチヤーナ・オシッポヴナと言つてよ。」

「では、わたしもあなたをマリアンナ・ギケンチェヴナとお呼びいたしませう。これで具合ひがよくなりました！」

「どうですの、タチャーナ・オシッポヴナ、わたし達と一しよにお茶でも飲んでいらしつたら？」

「初めての事ですから構ひますまい、マリアンナ・ギケンチェヴナ。一杯だけご馳走になりませう。でないと、エゴールイチに叱られますからね。」

「そのエゴールイチといふのはどなた？」

「パーゼルでございますよ、わたしの連れあひで。」

「お坐んなさいな、タチヤーナ・オシッポヴナ。」

タチヤーナは椅子に腰をおろして、砂糖を嚙りながら茶を飲み始めた。そして、指の先で絶えず砂糖のかけを拈り廻しながら、一嚙りする度に目を細めて、そちらを透かして見るのであつた。マリアンナは彼女と話しを始めた。タチヤーナは氣どりけなしに受け答へをして、自分でも何やかや訊ねたり、話しをして聞かせたりした。彼女はソローミンを神さまのやうに崇めてゐたが、そのすぐ次ぎには自分の夫を信じきつてゐた。とは言へ、工場の生活は彼女にとつて苦しいらしかつた。

「こゝは町ともつかなければ、村でもなし……もしヴシーリイ・フェドートゥイチがゐらつしやらなかつたら、一時間と辛抱が出來なかつたでせうよ！」

マリアンナは注意ぶかくその話しを聞いてゐた。脇の方に陣どつたネジダーノフは、自分の生涯の友をじつと觀察してゐたが、その熱心な注意ぶりを見ても、別に驚きはしなかつた。マリアンナにとつては、かういふ事もすべて珍らしいに相違なかつた——けれど彼自身は、タチャーナみたいな女なら、幾百人となく見て來たし、また幾百遍となく話しもしたやうに思はれたのである。

「ねえ、タチヤーナ・オシッポヴナ。」たうとうマリアンナがかう言つた。「あなたはさう考へてゐ

ちつしやるんでせう、わたし達が百姓にものを敎へようとしてゐるつて――いゝえ、違ひますの、わたし達はあゝいふ人に仕へたいんですの。」

「仕へるつて、一體どうするんでございます？　敎へておやりなさい、それがつまり仕へることになるんですから。まあ早い話しが、現にわたしがさうでございますよ。わたしがエゴールイチの所へ來た時には、まるで讀み書きのすべを知らなかつたものですけれど、ヴシーリイ・フェドートゥイチのお蔭で、今ぢやどうやら分かるやうになりましたからね、尤も、あの方がご自分で敎へて下さつたのぢやありません――ある年寄りにお金を拂つて、賴んで下すつたのでございますよ。で、つまりそのお爺さんに習ひましたので。――わたしは圖體こそ大きうございますが、これでまだ若いんですからね。」

マリアンナは暫らく無言でゐた。

「わたしはね、タチヤーナ・オシッポヴナ、」と彼女はまた口をきつた。「何かの職を覺えたいんですけど……でも、この事はまた後でよくご相談しませう。わたし裁縫が下手だから、お料理でも習つたら、臺所女中くらゐにはなれるでせうね。」

タチヤーナはちよつと考へ込んだ。

「臺所女中とはどういふ譯です？　女中などといふものは、金持ちか商人あたりが置くもので、貧乏人は自分で食べるものを拵へますからね。――職工の合宿所の賄ひにでもなりますか……でも、それは本當にどんづまりでございますよ！」

「わたしはたとへ金持ちの家に住まつても、貧しい人達と知り合ひにさへなればいゝんですわ。でも、どうしたらさういふ人と一緒になれるでせう！　かうしてあなたとお話ししてゐるやうな、そんな風ないゝ機會ばかりはないでせうからね。」

タチヤーナは空の茶碗を皿の上に伏せた。

「それは難かしい事でございますね。」たうとう彼女は溜め息と共に言ひだした。「なか〳〵おいそれとは行きますまいよ。出來るだけのことはお敎へしますが――わたしもさう學問のある女ぢやありませんからね。エゴールイチと相談してみませう。まあ、あれがどういふ人だとお思ひになります？　どんな本でも讀んでのけますからね！　どんな事でもすぐにすら〳〵と解いて了ひますよ。」そのとき彼女は、マリアンナが煙草を卷いてゐるのに目をつけた……「ねえ、マリアンナ・ギケンチェヴナ、失禮ですけれどもし本當に裸一貫になりたいとお思ひになるなら、そんな事はどうしてもやめなくちやなりませんよ。」彼女は煙草を指さした。「なぜと申して、さういふ身分では、つまり臺所女中のやうな身分では、さういふことは出來ませんからねえ。すぐと誰でも――これはお嬢さん上がりだなと氣がつきますよ。さうですとも。」

マリアンナは煙草を窓の外へ拋り出した。

「わたしもう吸ひません……そんなことは平氣で止せますよ。普通の女が吸はないといふ事なら、わたしだつて吸つちやならない譯ですもの。」

「それは本當でございますよ、マリアンナ・ギケンチェヴナ、わたし達の方でも、男はそんな道樂を

してゐる者もありますが、女の方は――いたしませんね。さうなんでございますよ！　おや！　ヴシーリイ・フェドートゥイチがお見えになるやうだ。あれはあの方の足音だ。あなた、あの方に聞いてごらんなさいまし、すぐに何もかも決めて下さいますよ――何よりも鹽梅よくね。」

果たして戸の外にソローミンの聲が響いた。

「はいつてもいゝですか？」

「おはいんなさい、おはいんなさい！」とマリアンナが叫んだ。

「これはつい英吉利の癖でね。」ソローミンは部屋へはいりながらかう言つた。「ときにお氣分はどうです？　まだ今のところ退屈はしませんか？――お見受けしたところ、あなたはこゝでタチヤーナと、お茶會を開いてゐらつしやるやうですね。まあ、この女の言ふことを聞いてご覽なさい。なか〳〵賢い人間ですよ……ところが、今日は工場主がやつて來るんです……どうもをりが悪いですね！　食事までして行くさうです。仕方がありません！　そこがつまり持ち主ですからね。」

「一體どんな人間です？」ネジダーノフが隅の方から出て來ながらかう訊いた。

「變はつたこともありませんよ……まさか雑巾をしやぶるほどの低能でもありませんよ。やはり新人の仲間でね、恐ろしく丁寧なんです――カフスも嵌めてゐますよ。しかし目がこまかく行き屆く方で、その點ぢや昔の人間に負けませんな。人の身の皮をひん剝いてゐる癖に、『どうか恐れ入りますが、今度はこちら側を向けて下さい――こゝん所にまだ皮が少々のこつてゐます……すつかり綺麗にしてしまはなければね！』と言つた調子なんです。しかし、僕に對しちや實に手觸りがいゝ――僕が

必要だからですね！　ただ僕がやつて來たのは、今日はもうとてもお目に掛れさうもないから、それを斷わりに來たのです。食事は持つて來させます。それから庭へ顔を出さないやうにして下さい。あなたどう思ひます。マリアンナさん、シピャーギンはあなた方を捜すでせうか、跡を追ふでせうか？」

「そんな事はないと思ひますわ。」とマリアンナは答へた。

「ところが、僕はあると思ひますね。」とネジダーノフが言つた。

「まあ、どちらにしても同じだ。」とソローミンは語を續けた。「初めの間は用心しなけりやなりますまい。そのうちに、うまく納まるでせうから。」

「さう、ですがね、」とネジダーノフが口を入れた。「マルケーロフだけは僕のところを知つてゐなくちやならないんです――どうしても知らせなくちや。」

「何のために？」

「そりや止むを得ないんです、われ〳〵の運動のためにね――あの男はいつでも僕の居どころを知る義務があるんですよ。さういふ約束なんだから。それにあの男なら喋りやしません！」

「ぢや、よろしい。パーゼルを使ひにやりませう。」

「僕の着物は出來るでせうか？」と、ネジダーノフは訊いた。

「と言つて、つまり變裝のことですか？――そりや無論……無論ですよ。どうも假裝舞踏會じみる。な。まあ有り難いことに、高いものでないから助かる。では左様なら、お休みなさい。――タチヤーナ、さあ行かう。」

マリアンナとネジダーノフはまた二人きりになつた。

二八

まづ初め、二人は又しつかりと手を握りあつた。やがてマリアンナが、「お待ちなさい、わたしあなたの部屋の片づけを手傳つて上げるわ。」と叫んで、またトランクと袋の中から荷物を取り出しにかゝつた。ネジダーノフはその手傳ひをしようとした。けれど彼女はすつかり自分一人でするのだと言つた。「だつて、奉仕といふ事に馴れなくちやなりませんからね。」果たして、彼女は自分で着物をずらりと釘へ掛け並べた。その釘は卓の抽斗から見つけ出して、金鎚のかはりにブラッシュの背中で、手づから壁へ打ち附けたものである。洗濯ものは、窓と窓の間にあつた古い小箪笥へしまつた。

「これはなあに？」不意に彼女はかう訊いた。「拳銃（ピストル）？　彈丸がこめてあるの？　こんなものどうするの？」

「彈丸なんかこめてやしない……尤も、こつちへお寄越し。あたたは『どうする』つて訊くんだね？　われ〳〵のやうな身分の者が、拳銃なしでゐられると思ふの！」

彼女は笑ひだした。そして一つ〳〵の物をふるつたり、掌ではたいたりしながら、仕事を續けるのであつた。靴までちやんと二足そろへて、長椅子の下へ入れた。幾冊かの書物と、一たばの書類と、例の詩を書いた小さな手帳は、隅に置いてある三脚机にれい〳〵しく並べた。この机は、いま一方の圓い卓が食卓兼茶卓（テイーテーブル）と命名されたのに對して、書物卓（ブックテーブル）、兼仕事机と呼ばれた。それから彼女は

詩作用の手帳を兩手に持つて、目と水平にさし上げると、上の端からネジダーノフを覗きながら、微笑と共にかう言ひだした。

「ねえ、これから仕事の閑な時に、これを一しよに讀み返さうぢやありませんか！　ね？」

「その手帳をおよこし！　そんなもの燒いてしまふ！」とネジダーノフは叫んだ。「それよりほかに仕樣のない代物だ！」

「ぢや、なぜそんなものを持つて來たの、もしさうだとすれば？――いや、いや、わたし燒かせやしないから。もつとも、作者つてものは、たゞそんなことを言つて嚇かすばかりで、決して自分の作品を燒いたためしがないんですつてね。でも、わたしやつぱり自分の部屋へ持つて行つとくわ！」

ネジダーノフは抗議を唱へようとしたが、マリアンナは手帳を持つたまゝ、次の間へ飛び出して――今度は空手で引つ返した。

彼女はネジダーノフの傍へ腰をおろした――が、すぐまた立ち上がつた。

「あんたまだわたしの所へ來て見なかつたわね……わたしの部屋へ。見たくなくつて？　あんたの部屋に負けないくらゐよ。行きませう――わたし見せて上げるから。」

ネジダーノフも同じく立ち上がつて――マリアンナの後に續いた。彼女の謂はゆる自分の部屋は、少しばかり彼の部屋より小さかつたが、家具類は多少小ざつぱりして新しく思はれた。窓仕切りには、花をさした硝子の花瓶があつて、片隅には小さな鐵の寢臺が置いてあつた。

「ねえ、あの人はなんて優しいんでせう、あのソローミンさんは。」とマリアンナは叫んだ。「でも

あんまり自分を甘やかし過ぎてはいけないわねえ。こんな住まひはさうしよつちう行き當らなくつてよ。あのね、わたしかう思ふのよ——もしわたし達二人が別々に離れないで、何かの職にありつけたら、そんな風にうまく事が運べたら、どんなにかいゝでせう！　でも、それは難かしいでせうね。」少したつて彼女はかう言ひ足した。「まあ、そのうちに考へてみませう。だつて、どうせあんた彼得堡（テルブルグ）へは歸らないでせう。」

「僕が彼得堡へ歸つて何をするの？　大學へ通つたり、家庭教師をしたりするのかい？　そんなことはもう何の役にも立ちやしない。」

「まあ、ソローミンさんが何と仰しやるか。」とマリアンナは言つた。「何をどんな風にしたらいゝか、そんな事はあの人の方がうまく決めて下さるわ。」

二人はもとの部屋へ歸り、また互に向きあつて腰をおろした。そしてソローミンや、タチヤーナや、パーゼルを讃美したり、シピャーギンの噂をしたり、今までの生活が急に恐ろしく遠い所へ行つて了つて、まるで霧にでも包まれたやうな氣がする、などといふやうな話しもした。それからまた手を握りあつて、さも嬉しさうな視線を交換した。それに續いて、どういふ社會の層へ侵入して行かなければならないか、人から疑はれないやうにするには、どんな態度をとつたらいゝか、などといふやうな話しも出た。

ネジダーノフは、なるべくそんな事を考へないで、ざつくばらんな態度を取れば取るほど、却つて結果がいゝと主張した。

「無論さうよ」とマリアンナが叫んだ。「だつてわたし達は、タチヤーナの言ひ草ぢやないけれど、裸一貫にならうとしてるんですものね。」

「僕はその意味で言つたんぢやない。」とネジダーノフが言ひかけた。「僕が言はうと思つたのは、自分に無理をしないで……」

マリアンナは急に笑ひだした。

「わたしはね、アリョーシャ、あの人がわたし達二人のことを『裸一貫になつた人』と言つたのを思ひ出して！」

ネジダーノフも同じやうに笑ひながら。「裸一貫になつた人……」と繰り返したが、やがて妙に考へ込んだ。

マリアンナも考へ深い様子になつた。

「アリョーシャ！」と彼女は口をきつた。

「なに？」

「わたし達二人は少々ばつが悪いのね、わたしもそんな氣がするわ。Des nouveaux mariés（デヌーヴォー マリエ）——新郎新婦つてものは、」と彼女は説明した。「新婚旅行の初めの日に、きつとこんな風な氣持ちがするに相違ないわ。恐ろしく幸福で……何とも言へないいゝ氣持ちでありながら、そのくせ何だかばつが悪いのよ。」

ネジダーノフは微笑した——しかし、それはわざとらしい微笑であつた。

「でもマリアンナ、僕達が――さういふ意味の若夫婦でないつて事は、あんただつてよく知つてるぢやないの。」

マリアンナは椅子から立ち上がつて、ぴつたりネジダーノフに向きあつた。

「それはあんた次第よ。」

「と言ふと？」

「アリョーシャ、あんただつて分かつてるでせう――あんたが潔白な人間として、さうだと言つて下されば、わたしあんたを信用するわ。だつてあんたは本當に潔白な人間なんですもの。だから、あんたがわたしを愛してゐると仰しやつたら……つまり、他人の一生に對する支配權を與へるやうな愛し方なのよ……もしあんたがさうだと言つたら――その時こそわたしはあんたのものよ。」

ネジダーノフは顔を赤くして、少しそつぽを向いた。

「僕がさう言つたら……」

「えゝ、その時はね！　でも、あんた自分でも分かつてるでせう、今それが言へないつてことは……えゝ、さうよ、アリョーシャ、あんたは本當に潔白な人だわ。さあ、何かもつと眞面目なお話しをしませう。」

「だつて、僕はあんたを愛してるんぢやないか、マリアンナ！」

「わたし、その事を疑やしませんわ……だから待ちますわ。あゝ、ちよつと、わたしあんたの書物（ライティング）卓（テーブル）を、まだよく片づけてゐなかつたわ。あら、何だか包んだものがある、何だか固いものが……」

ネジダーノフは椅子から躍り上がつた。

「それに觸らないで、マリアンナ……それは……どうか觸らないで。」

マリアンナは肩ごしに彼の方へ首を向けて――びつくりしたやうに肩を吊り上げた。

「これは祕密なの？　內證なの？　あんたに、祕密があるの？」

「さう……さうなんだ。」とネジダーノフは言つた。そして恐ろしく當惑した樣子で――說明といつたやうな形でつけ足した。「それは……肖像畫なんだよ。」

この言葉は思はず彼の口からすべり出たのである。實際マリアンナの手にしてゐる紙包みの中には、ネジダーノフがマルケーロフから貰つた、彼女の肖像がはいつてゐるのであつた。

「肖像畫？」と彼女は引き延ばしたやうな聲で言つた……

「女の？」

彼女は包みを彼に渡したが、その受け取り方がまづかつたので、あぶなく手から辷り落ちさうになつた。と、その拍子に包みが開いた。

「あら、これは……わたしの肖像畫だ！」とマリアンナは生き〳〵した聲で叫んだ。「まあ――自分の肖像畫なら、わたし貰ふ權利があるわ。」彼女はネジダーノフから繪をひつたくつた。「これはあんた描いたの？」

「いや……僕ぢやない。」

「ぢや、誰？　マルケーロフさん？」

「ご推察の通り……あの男だ。」
「それが一體どうしてあんたの手にあるの？」
「あの男が僕によこしたんだ。」
「いつ？」
ネジダーノフはその時の模様を話して聞かせた。彼が話してゐる間、マリアンナは彼の顏と肖像畫を交る〴〵見くらべてゐた……二人――ネジダーノフとマリアンナの頭には、同じ想念が閃いた。『もしあの人がこの部屋に來てゐたら、あの人はこれを要求する權利があつたらう……』しかしマリアンナもネジダーノフも、自分の想念を聲に出しては言はなかつた……事によつたら、二人とも相手の胸の内に、この想念を直感したからかも知れない。
マリアンナは靜かに肖像を包み直して、卓（テーブル）の上に置いた。
「いゝ人ね！」と彼女は呟いた。「今どこにゐるでせう？」
「どこつて？……家にゐるよ、自分の家に。僕は明日か明後日ごろ、本を取りにあすこへ行くつもりだ、パンフレットを取りにね。僕によこすと言つてゐたんだけれど、きつと出發の時に忘れたんだらう。」
「プリョーシャ、あんたさう思つて――あの人はこの肖像畫を渡すとき、もうすつかり諦めてゐたか知ら……何もかもすつかり？」
「僕にはさう想はれたね。」

「そして、あんたはあの人が家にゐると思つて？」
「勿論。」
「あゝ！」マリアンナは目を伏せ、兩手を落とした。「ほら、タチヤーナがわたし達のご飯を持つて來てくれてるわ。」と彼女は不意に叫んだ。「本當にいゝ人ね！」
タチヤーナが食器や、ナプキンや、皿を持つて現れた。彼女は食卓の用意をしながら、工場で起こつてゐる事を話して聞かせた。
「今ご主人が莫斯科（モスクワ）から汽車でおいでになつてね、まるで氣ちがひのやうに、工場ぢう上から下へ駈けずり廻つてゐます。それでゐて、何ひとつ譯が分からない癖に、たゞ見せ掛けだけにあんな事をしてるんですよ。ヴシーリイ・フェドートゥイチはまるで赤ん坊あつかひにして、ご主人が何か厭な事をしかけると、早速やりこめなさるんですよ――もうすぐ何もかも抛り出して了ふ、とかう仰しやいますと、こちらはすぐさま尻尾を卷くぢやありませんか。いま一しよにお食事ちうでございます。ご主人はお仲間を一人つれて見えましたが、その人は何を見ても驚いてばかりゐらつしやいますよ。きつとお金持ちなんでせう、そのお仲間は。だつて、始終むつとして、頭を振つてるばかりなんですもの。肥つた方でしてね、もう大變な肥りやうなんですよ。きつと莫斯科の親だま株なんでせうよ。よく譬へにも言ふ、『莫斯科は、露西亞の窪地、何でも、そこへ轉げ込む』といふのは本當でございますね。」
「あんたは何でもお氣がつくんですね！」とマリアンナは叫んだ。

「え、え、わたしは目がこまかうございますよ。」と、タチヤーナは受けた。「さあ、ご飯の支度が出來ました。どうぞよろしく召し上がれ。わたしは少しこゝに坐つて、あなた方を見物さして貰ひませう。」

マリアンナとネジダーノフは食事にかゝつた。タチヤーナは窓仕切りにうづくまつて、片手で頰杖をついた。

「かうしてお見受け申すと、」と彼女は繰り返した。「あなた方はお二人ともお若くつて、華奢でゐらつしやいますね……あなたがたを眺めてゐると、本當にいゝ心持ですけれど、何だか悲しくなつて參りますよ！　ねえ、あなたがたはご自分の力に餘る重荷を、背負はうとしてゐらつしやるんですよ！　あなたがたのやうな人を、お役人たちは喜んで牢屋へ抛り込むんでございますよ！」

「大丈夫、脅かしたつて駄目ですよ、小母さん。」と、ネジダーノフが言つた。「かういふ譬へを知つてるでせう――蕈（きのこ）と言はれる上からは、籠へ入るのを覺悟しな――」

「知つてますよ……知つてますよ。ところが、この節の籠は窮屈で、一旦はいつたら最後、出られないやうになりましたよ！……」

「あんた子供があつて？」マリアンナは話題を變へようと思つてかう訊いた。

「ありますよ、男の子が一人。學校へ通ふやうになりました。女の子も一人ありましたが、可哀さうに亡くなつてしまひました！　飛んだ災難にあひましてね、車に轢かれたんでございますよ。それも、一息に殺されたのならまだしも！　長いあひだ苦しい思ひをいたしましたつけ。それ以來、わた

しは憐れつぽくなりましたよ。元はまるで木か石のやうでしたけれど！」

「ぢや、ご亭主のパーヱル・エゴールイチはどう――別にすきぢやなかつたの？」

「なあに！　それは話しが別でございますよ。何分娘つこの事ですものね。現にあなただつて――この方がおすきなんでせう？　違ひますかね？」

「すきだわ。」

「大すきですか？」

「大すき。」

「どうですかね……」タチヤーナはネジダーノフとマリアンナを眺めたが――別に何とも言ひ添へなかつた。

マリアンナはまた話題を變へなければならなかつた。彼女はタチヤーナに、煙草をやめたことを話した。こちらはそれを褒めた。それから、マリアンナはもう一ど着物のことを頼んだ。また料理を教へるといふ約束も念を押した。「あゝ、それからもう一つ、太い頑固な糸を手に入れることは出來ないかしら？　わたし靴下が編みたいんですの……どくさつとしたのを。」

タチヤーナは何もかも望み通りにすると約束して、卓（テーブル）の上を片づけると、例のしつかりした落ちついた足どりで、部屋を出て行つた。

「さあ、これから何をしようかしら？」とマリアンナはネジダーノフに話しかけた。そしてこちらは返事をする暇も待たないで、「かうしたらどう？　本當の仕事は明日から始まるんだから、今夜ひと

晩は文學に捧げようぢやありませんか。あなたの詩を讀み返して見ませうよ！　わたし嚴格な批評家になつてよ。」

ネジダーノフは長いあひだ同意しなかつたが……それでも結局まけてしまつた。――そして手帳を取つて讀み始めた。マリアンナは彼の傍にちかく〳〵と坐つて、朗讀の間ぢうその顏を見つめてゐた。マリアンナの言つたのは本當だつた――彼女は嚴格な批評家であつた。彼女の氣に入つた詩といふのは幾らもなかつた。マリアンナは彼女の謂はゆる『敎訓的』な詩よりも、純抒情的な短かいもの〻方を選んだ。ネジダーノフの朗讀は非常に上手とも言はれなかつた。朗吟風にやる勇氣もないけれど、それかと言つて、餘りそつけない調子に墮して了ふのも厭だつたので、結局、虻はち取らずになつてしまつたのである。マリアンナは急に彼を遮つて、あの『よしや死すとも――嘆き少なし』といふ句で始まつてゐる、ドブロリューボフの素ばらしい詩を知つてゐるかと訊ねた。そして、早速その全篇を暗誦したが――やはり大して上手ではなくて、何となく子供じみたところがあつた。

ネジダーノフはその詩を評して、言語に絶した悲痛な惱ましいものだと言つたが、しばらく經つてから言ひ足した――ネジダーノフ自身は、決してかういふ詩を書くことが出來なかつたらう。なぜかと言へば、自分の墓の上に流される涙を恐れる理由がない……そんなものを流してくれる人がゐないからである。

「あるわ、もしわたしがあんたより長く生きてたら。」マリアンナはゆつくりした調子でかう言つた。そして目を天井の方へ上げて、しばらく無言でゐた後、まるで獨りごとのやうに小聲で訊ねた。

「あの人はどんな風にして、わたしの肖像を描いたんでせう？　心憶えだけでせうか？」

ネジダーノフはくるりとその方へ振り向いた……

「さうだ、心憶えだけなんだよ。」

マリアンナは彼が返事をしたのに驚いた。この疑問はただ心の中だけで考へたやうな氣がしたのである。

「それは不思議ね……」彼女は前と同じ調子で言葉を續けた。「だつて、あの人に繪の方の才なんかないんですもの。――わたし何を言はうと思つたのかしら……」と彼女は聲を高めて言ひ足した。

「さう〳〵！　ドブロリューボフの詩のことだつけ。詩つてものはプーシキンのやうな風に書くか、それでなければ、このドブロリューボフの作品みたいなものを書かなくちや駄目だわ。それは詩ぢやありません……だけど、詩に劣らないくらゐ立派なものだわ。」

「ぢや、僕の詩みたいなものは、」と、ネジダーノフが訊ねた。「初めつから書かない方がいゝのを知らん？　さうかも知れないね？」

「あんたの書いたやうな詩は、お友達には氣に入るでせうよ。それは大變出來がいゝからぢやなくつて、あんたがいい人だからよ――あの詩はあんたによく似てるわ。」

ネジダーノフは苦笑した。

「たうとうあの詩を葬つてしまつたね――ついでに僕も一しよに！」

マリアンナは彼の手を叩いて、意地の悪い人と言つた……やがて彼女は、疲れたから行つて寢ると

言ひだした。

「ときにね、」短かいけれど、ふさ〳〵と渦まいた髪をふるひ上げながら、彼女はかう言ひ足した。「わたし百三十七留持つてるのよ——あんたは？」

「九十八留」

「まあ、わたし達は金持ちなのね……裸一貫になつた人間としては。——ぢや、また明日！」

彼女は出て行つた。けれど幾秒かたつた後、彼女の部屋の戸がほんの心持ち開いて——その隙き間からまづ初め、「左様なら！」といふ聲が聞こえた。それから今度はもう一層低い聲で「左様なら！」と言つたかと思ふと、錠前の鍵がかちりと鳴つた。

ネジダーノフは長椅子に腰をおろして、兩手で顏を蔽うた……やがて彼はやにはに身を起こして、戸口へ寄つて扉を叩きはじめた。

「何の用」といふ聲が中から聞えた。

「また明日ぢやない——マリアンナ……明日だ！」

「また明日。」かういふ低い聲が答へた。

二九

翌日早朝、ネジダーノフはまたマリアンナの部屋をノックした。

「僕だよ。」どなた？　といふ問ひ對して、彼はかう答へた。「もうこつちへ出て來られる？」

「待つて頂戴、いますぐ。」

彼女は出て來るや否や、思はずあつと言つた。最初の一瞬間、彼女は誰やら見分けがつかなかつた。ネジダーノフは小さな釦をつけた、腰の高い、い〻加減くたびれた、黄ろい南京木綿の長上衣を着て、頭は露西亞風にまん中からぴつたり分け、首には青い手巾を卷きつけ、手には目庇のこはれた帽子を持ち、足には少しも磨いてない牛皮の長靴を穿いてゐた。

「あら、まあ！」とマリアンナは叫んだ。「何て……みつともない恰好でせう！」けれども急に相手を抱きしめて——なほ一そう急に接吻した。「まあ、何だつてあんたはそんなりをしたの？　何だか下等な町の職人が……それとも行商人か、邸番の古手のやうに見えるわ。なぜそんな長上衣なんかにしたの——たゞの百姓外套か、袖なし外套の方がい〻ぢやないの？」

「そこなんだよ、」とネヂダーノフは言ひ出した。彼がかういふ身なりをしてゐると、實際、町人あがりのけちな魚賣りじみてゐた——彼は自分でもそれを感じてゐたので、内心いま〳〵しくもあり、ばつが悪くもあつた。彼はそのばつの悪さを紛らすために、まるで埃でも拂ひ落とすやうに兩手の指を擴げて、胸のあたりをこすり廻してゐた……

「百姓外套や袖なし外套では、すぐ見拔かれてしまふつて、あのパーヱルがさう言ふんだよ。ところが、この『着り物』になると（これはあの男の言葉を借りたんだが）、まるで生れてこの方、ほかのものは身に着けた事がないやうに見えるんださうだ。尤も、ついでながら斷わつて置くが、これはあまり僕の自尊心を喜ばすやうな評語ぢやないがね。」

「一體あんたはすぐに出かけるつもりなの……始めるつもりなの？」とマリアンナは生き〳〵した調子で訊ねた。

「あゝ、やつてみるつもりだ。……もつとも本當のことを言へば……」

「羨ましいわね！」とマリアンナは遮つた。

「あのパーゼルは何だか不思議な人間だね。」とネジダーノフは言葉を續けた。「何でもかでも心得てゐて、まるで腹の底まで突き刺す樣な目つきをしてるかと思ふと、急におれは一さい無關係だ——何にもかゝり合やしないぞ、といつたやうな顏つきをするぢやないか！　小まめに世話をやく癖に、始終ひやかしてばかりゐるんだ。あの男はね、マルケーロフの所から小冊子（パンフレット）を取つて來てくれたよ。前からマルケーロフを知つてゐて、セルゲイ・ミハイロギッチと呼んでゐるんだ。ソローミンのためと來たら、水火の中でも厭だと言はないだらう。」

「タチヤーナだつてさうよ。」とマリアンナが言つた。「どうしてあの人には、みんながあゝ心服するんでせうね？」

ネジダーノフは返事をしなかつた。

「パーゼルが持つて來たのはどんな小冊子？」とマリアンナが訊ねた。

「なに……普通のものさ。『四人の兄弟の話』だの……それからまああり觸れた、いつものやうなものさ。もつとも——今度の方がいゝかな。」

マリアンナは惱ましげにあたりを見廻した。

「でも、タチヤーナはどうしたんだらう？　早くやつて來るつて約束になつてたのに……」

「さあ、そのタチヤーナが參りましたよ。」手に包みを持つてはいりながら、タチヤーナがかう言つた。——彼女は戸の外に立つてゐて、マリアンナの叫び聲を聞いたのである。

「まだお間に合ひますよ……何といふ辛抱のないお人でせう？」

マリアンナはいきなりその方へ飛んで行つた。

「持つて來てくれて？」

タチヤーナは包みをぽんと叩いた。

「それ、この中に……すつかり揃つてをりますよ……たゞちよつと具合ひを見さへすれば……あとはもうこれを着て出かけて行つて——みんなをびつくりさせるばかりでございますよ！」

「さあ、行きませう、タチヤーナ・オシッポヴナ、早く行きませうよ……」

マリアンナは彼女を自分の部屋へ引つぱつて行つた。

一人きりになると、ネジダーノフは一度ばかり、妙にちよこ〳〵した足どりで、部屋の中を行つたり來たりした……（町人といふものは、かういふ歩き方をするものだと、彼はなぜか想像したのである）——そして、自分の着てゐる長上衣（カフタン）の袖や、帽子などを嗅いでみて、顏をしかめるのであつた。彼はまた、窓の傍に掛つてゐる小さな鏡を覗いて、首をふつた。自分の恰好があまりに見すぼらしかつたのである。『もつとも、その方が結局いゝのだ。』と彼は考へた。それから彼は小冊子を二三冊とり出して、後ろの衣囊へつゝ込むと、「なあに……皆の衆、これで構はねえんだよ……なぜつて、

おめえ……と小さな聲で囁いてみた。『どうやら似てゐるやうだ。』と彼はまた考へた。『何だつて、こんな役者の眞似をするんだ！　この身なりが充分おれを庇つてくれる筈だ。』その時ふと、ネジダーノフはある獨逸人の流刑囚の話しを思ひ出した。この男は露西亞の國を端から端へ拔けて、逃げて行かなければならないのに、露西亞語がまるでから下手だつたのである。けれど、ある田舍町で、猫皮のふちを取つた商人風の帽子を買つて、それを被つてゐたお蔭で、どこへ行つても商人で通用した——かうして、彼は無事に國境の外へ出られたのである。

この瞬間、ソローミンがはいつて來た。

「はゝあ！」と彼は叫んだ。「コツピイが出來たね、君、堪忍してくれ給へ。さういふ恰好をしてゐると、どうも、『あなた言葉』が使へないや。」

「さあ〳〵、どうぞ……なに、自由にやつてくれ給へ……僕も丁度それを君に言はうと思つてゐた所なんだから。」

「だが、どうも馬鹿に早すぎるぢやないか。たゞしかし、だん〳〵馴れて行きたいといふ希望なら、まあ、それもよからう。だが、それにしても、少し待たなくちや、大將もまた出發しないんだから。まだ寢てゐるんだよ。」

「僕も、少したつて出て行くよ。」とネジダーノフが答へた。「少しばかり近在を歩き廻つて見ようか——何か命令があるまでね。」

「それも一理屈だ！　だがね、アレクセイ……かう言つてもいゝね。アレクセイつて！」

「結構——もし何ならリクセイ（百姓訛り）でもいゝよ。」とネジダーノフは笑ひながら言ひ添へた。

「いや、何もさう藥をきかせ過ぎてもいけないよ。ねえ、君、約束は金より大事だといふから斷わつて置くが、——君は小冊子（パンフレット）を持つてゐるやうだね。そりや誰に分けてやらうと君の勝手だけれど、しかしこの工場では——まつぴらご免だよ！」

「それはなぜ！」

「なぜつて、第一、そんな事は、君自身にとつて危險だから。——第二に、こゝでさういふ事はさせないつて、僕主人に約束したんだからね。また第三には、こゝでも何やかや始めたことがあるんだ——學校だとか何とかいつたものをね……で、つまり——それを君にぶち壞して貰ひたくないんだ。君は自分で自分に責任をもつて、どうとも勝手に働くがいゝ——それを僕は邪魔だてしないけれど、工場の職工だけには手を出さないでくれ給へ。」

「大事を取るのはいつでも結構……かね？」皮肉な薄笑ひを浮かべながら、ネジダーノフは口を入れた。

ソローミンは例によつて、顏一ぱいに微笑を擴げながら。

「さうだよ、アレクセイ君、全くいつでも結構だよ。しかし、これは一たい誰だらう？　僕らは一體どこにゐるんだらう？」

この最後の叫び聲は、このとき闕の上へ現れた。マリアンナに向けられたものであつた。彼女はもうさん〳〵洗ひざらしになつた、色まじりの更紗の着物をきて、肩に黃ろいきれを掛け、顏を赤い頭

巾で縛つてゐた。――その後ろからタチヤーナが顔を覗けながら人の好ささうな表情で、その姿に見とれてゐる。この質素な身なりをしたマリアンナは、前より却つて生き〳〵として、若々しく見えるのであつた。彼女の衣裳は、ネジダーノフのぞろ〳〵した長上衣(カフタン)より、遙かにうつりがよかつた。

「ヴシーサイ・フェートゥイチ、どうか笑はないで頂戴。」とマリアンナは祈るやうに言つて、罌粟の花のやうにまつ赤になつた。

「さあ〳〵、似合ひのご夫婦が出來ました。」とタチヤーナも叫んで手を叩いた。「でもね、若い衆さん貴方も、結構は結構だけれど、私の仕立てた若女房にや叶はない――恰好がとれてゐませんよ。」

『全くだ、あれは素敵だ。』とネジダーノフは考へた。『ああ、おれはどんなにあれを愛してゐるか、分からないくらゐだ！』

「それに御覽なさい。」とタチヤーナは言葉をついだ。「わたしたち指輪まで取つ換へこしたんですよ――あの人はわたしに金のを下すつて、わたしから銀のをお取りなすつたんですよ。」

「だつて、百姓の娘は金指輪なんか嵌めないでせう。」とマリアンナが言つた。

タチヤーナは吐息をついた。

「これはわたしが大事にお預かりして置きますからね、ご心配はいりませんよ。」

「まあ、お坐りなさい、二人ともお坐りなさい。」心もち首を傾げながら、絶えずマリアンナを見つめてゐたソローミンが、この時から口をきつた。「ご承知でせうが、君は誰か旅へ出かける時、みんな一しよに坐つたもんですよ。あなた方も長い骨の折れる道中を、目の前に控へてをられるんだから。」

マリアンナは、まだやはり赤い顔をしたまゝ、腰をおろした。ネジダーノフも坐つた。ソローミンも坐つた……最後にタチヤーナも『切り株』に腰をおろした。それはそこに突つ立つてゐた一本の薪のことなので、ソローミンは一同の顔を順々に見廻した。

「脇へ離れて眺めよう、

みんながちんと坐つた樣を……」

彼は少し目を細めながらからかう言つて、急にから〳〵と笑ひだした。それがいかにも氣持ちのいゝ笑ひかなだつたので、誰も腹を立てる者がなかつたばかりでなく、却つて非常に愉快になつたくらゐである。

しかしネヂダーノフは突然たち上がつた。

「僕は出かけよう、」と彼は言つた。「今すぐ。しかしこの思ひつきは大變おもしろかつたね。――ただちよつと假裝の仁輪加くさいけれど。――どうか、心配しないでくれ給へ。」と彼はソローミンの方へ向いた。「君の工場の職工には手を出さないから、少し近在をうろついて、歸つて來るよ――マリアンナ、あんたにも僕の冒險談をして聞かせるよ、但し、話すやうな種があつたらだが、ぢや、さいさきを祝つて握手しよう！」

「その前にお茶でも一杯。」とタチヤーナが口を入れた。

「いや、今ごろお茶三昧でもありますまい！　もし欲しくなつたら――料理屋へでも寄りますよ。でなければ、いきなり酒場(バー)へでも。」

タチヤーナは首をふつた。

「このごろ街道といふ街道に、料理屋の殖えた事といつたら、まるで毛皮外套にたかつた虱のやうでございますよ。村はみんな大村ばかりで――たとへばあのバルマーソヴオにしても……」

「さやうなら、ご機嫌よう……ぢや、行つてめえりやす！」

そろ〳〵例の町人の役割を始めながら、ネジダーノフはかう言ひ直した。けれど彼が戸口まで近よらない前に、彼のすぐ鼻先へ、パーヱルが廊下からぬつと顔を出した――そして、上から下まで螺旋狀に溝を彫つた、細く長い杖を手渡ししながら、口をきつた。

「さあ、これをお取り下さいまし、アレクセイ・ドミートリッチ――道中突いて行つて下さるやうに。この杖は體から離して突けば突くほど、餘計に氣持がよろしいので。」

ネジダーノフは無言のまゝ杖をとつて、部屋を出て行つた。パーヱルもそれに續いた。タチヤーナも同じやうに出て行かうとしたが、マリアンナは立ち上がつて、それを引きとめた。

「お待ちなさい、タチヤーナ・オシッポヴナ、わたし、あなたに用があるのよ。」

「すぐに歸つて參ります。それにサモワールを持つて來ますから。あなたのお仲間の方は、お茶も飲まずに行つておしまひなすつた――大變お急ぎだと見えて……でも、あなたなんか、何も自分で苦勞なさる事はないぢやありませんか？　ゆつくりなされば、様子もはつきり分かる譯でございますからね。」

タチヤーナは出て行つた。ソローミンも同じく立ち上がつた。マリアンナはその方へ背を向けて立

つてゐたが、その中にやつと顔をふり向けたとき（彼は恐ろしく長いあひだ、一こともロをきかなかつたのである）彼の顔にも、自分の方へそゝがれた目の中にも、今まで見たことのない表情が浮かんでゐた。それはもの問ひたげな、落ちつきのない、ほとんど好奇の色に近い表情であつた。――彼女はまごついて、また顔を赧くした。ソローミンは自分の顔いろを相手に讀まれたのが、きまりの惡さうな様子で、いつもより大きな聲で話しだした。

「さあ、マリアンナ……これでいよ〳〵あなた方も始めた譯ですね。」

「あんな事を『始めた』なんて、ヴシーリイ・フェドートゥイチ！　あれが始めたことになるもんですか。わたし何だか急に間が惡くて仕樣がなくなりましたわ。アレクセイの言つたのは本當ですわ、全くわたし達は何かの喜劇でもやつてるやうですね。」

ソローミンはまた椅子に腰をおろした。

「いや、失禮ですが、マリアンナさん……一體あなたはその始めるといふことをどんな風に想像しておいでなんです？　まさか防塞（バリケート）をこしらへて、その上に旗をたて――共和國萬歳！　と喚くぢやありますまい。それに、そんな事は女の仕事でもありませんからね。――ところが、今日ルケリヤとか何とかいふ女に、何か一つい、事を教へるとしませう――それはなか〳〵骨を折れる仕事で、なかなかこつちの言ふことを合點してくれないし、容易に馴染んでもくれない。おまけにこつちの教へようとする事が、まるで不必要なもののやうに思ふんですからね。――ところが、いま二、三週間たてば、また今度は別なルケリヤと一苦勞しなければならん、その間には子供の體を洗つてやつたり、い

ろはを敎へてやつたり、病人に藥をやつたりする……つまりかういふ事が、あなたの仕事の始まりんですよ。」

「だつて、それは看護婦のすることぢやありませんか、ゾシーリイ・フェドートゥイチ、そんな事がわたしにとつて……何になるんでせう？」マリアンナは自分の體や、自分の身のまはりを、何やら曖昧な手つきで指さした。「わたしもつと違つたことを空想してゐましたわ。」

「あなたは自己犧牲がしたかつたのでせう？」

マリアンナの目は光りを帶びて來た。

「さう……さう……なんですの！」

「ぢや、ネジダーノフは？」

マリアンナは一方の肩を竦めた。

「ネジダーノフはどうもしませんわ！　わたしたちは一しよに進みます……もし何なら、わたし一人でも構ひませんわ。」

ソローミンはじつとマリアンナを見つめた。

「ねえ、マリアンナさん……ぶしつけな言ひかたを許して下さい……僕の考へでは、洟つたれ小僧の頭を梳かしてやることだつて、立派な自己犧牲ですよ。誰でも容易には出來ない犧牲ですよ。」

「だから、わたしもそれを厭だとは申しませんわ、ゾシーリイ・フェドートゥイチ。」

「あなたが厭だと仰しやらないのは、僕も承知してゐますよ！　さう、あなたにはそれが出來るんです。だから――當分のあひだ――さういふ事をしてゐらつしやい。そのうちにまた――變はつたことも出來るでせうから。」

「でもさうするには、タチヤーナさんから習はなくちやなりませんわ！」

「結構ぢやありませんか……お習ひなさい。あなたは煤だらけの顏をして、壺を洗つたり、鷄の羽を拵つたりするんですね……そのうちに祖國を救ふやうなことも、ないとは限りませんからね！」

「あなたはわたしを冷やかしてゐらつしやるのね、ゾシーリイ・フェドートゥイチ。」

ソローミンはゆつくり頭をふつた。

「おゝ、可愛いいマリアンナさん、飛んでもない。僕があなたを冷かしたりなぞするもんですか。僕の言ふことは單純な眞實ですよ。今でもあなた方は――すべて露西亞の婦人たちは、われ〳〵男子よりもずつと實際的で、ずつと偉いんですからね。」

マリアンナは一旦おとした目を上げた。

「わたしもあなたの期待を裏切りたくないと思ひますわ、ソローミンさん……さうしたら――死んでもかまひません！」

ソローミンは立ち上がつた。

「いや、生きて下さい……生きて下さい！　それが何よりです。――ときに、あなた方の家出について、今お宅でどんな風にしてゐるか、別段知りたいとは思ひませんか？　何か方法を講じちやゐないでせうか。何なら、パーゼルに一こと耳うちさへすれば――すぐにすつかり探り出してくれますよ。」

マリアンナはびつくりした。

「まあ　あの人は何て非凡な人でせう。」

「さう……かなり感心な男ですよ。——ところで、あなたがアレクセイと結婚したいとお思ひになつたら、それもあの男がゾシマと相談して取り計らつてくれるでせう……覺えておいでせう、さういふ坊さんがあるといふ事を、いつか僕が話したぢやありませんか……しかしまだ——當分——その必要はないでせう？　ないでせう？」

「ありません。」

「なければ——ないとして置きませう。」ソローミンは二つの小部屋——ネジダーノフとマリアンナの部屋——を仕切つてゐる戸口に近づいて、錠前の方へ身を屈めた。

「何を見てらつしやるの？」とマリアンナは訊ねた。

「錠がかゝるかと思つて。」

「かゝりますわ。」とマリアンナは囁いた。

ソローミンはその方へ顔を向けた。——彼女は目を上げなかつた。

「ぢや、別に探りを入れる必要はありませんね、シビャーギン夫婦がどんなつもりでゐるか？」と彼は陽氣さうに訊ねた。「そんな必要はありませんね？」

ソローミンは出て行かうとした。

「ヴシーリイ・フェドートゥイチ……」

「何ご用ですか？」

「どうか聞かして頂戴、あなたはいつも無口な方なのに、わたしにはどうしてそんなによくお話しをなさるの？　わたしそれがどんなに嬉しいか、とてもお分かりにならないでせうね？」

「なぜですつて？」ソローミンは大きなごつ〳〵した手で彼女の小さな柔かい兩手を握つた。「なぜですつて？　それはきつと、つまり、あなたが大好きだからでせう。さやうなら。」

彼は出て行つた……マリアンナはじつと立つて、その後を見送りながら、しばらく考へてゐたが——やがて、いまだにサモワールを持つて來ないタチヤーナの所へ出かけて行つた。そこで彼女は——もつとも、茶も飲むことは飲んだけれど——煤だらけになつて壺を洗つたり、鶏の羽を拐つたりした。それぱかりでなく、どこかの男の子のくしやくしやに縺れた頭を梳いてやつた。

食事時分に、彼女は自分の住まひへ歸つて來た……ネジダーノフも餘り長く歸りを待たせなかつた。

彼は疲れて、埃だらけになつて歸つて來ると——いきなり長椅子にぶつ倒れた。彼女はすぐにその傍へ坐つた。

「え、どうだつたの？　ねえ、どうだつたの？　聞かして頂戴！」

「マリアンナ、かういふ詩を覺えてゐる？」彼は弱々しい聲でかう答へた。

かくまでに淋しからずば、
人はをかしと思ふらん……

「覺えてる？」
「そりや覺えてるわ。」
「つまりこの詩が、僕の第一回の遠征に、丁度ぴつたりあて嵌まるんだ。——いや、違ふ。全くのところ、滑稽な分子の方が多かつたよ。第一段として、僕は芝居をするくらゐ樂なことはないと思ひ込んぢまつた。ところが、たゞ一つ、あらかじめ思ひ及ばないことがあつたよ。ほかでもない、前もつて何か身の上話しを拵へて置かなければいけなかつたんだ……だつて、どこから來た？　何しに來た？　と訊かれたとき、何も用意が出來てゐないんだからな。もつとも、そんな事はほとんど必要がなかつた。ただ酒場へ行つて、ブートカの一合も振る舞つた上——勝手な出たらめを言へばいゝのさ。」
「で、あんた……出たらめ言つたの？」とマリアンナが訊ねた。
「言つた……出來る限りはね。——第二段として、僕の當たつてみた人間は、みんな、それこそみんな不平を抱いてゐる。しかも、どうしたらこの不平を除く事が出來るか、それは誰一人知らうとさへしないんだからね！　しかしプロパガンダにかけたら、僕はからつきし駄目だつてことが分かつたよ。小冊子（パンフレット）をやつと二冊、こつそり部屋の中へ置いて來たのと——一冊荷車の中へ突つ込んで來たのと、ただそれつきりだ……それがどういふ事になるやら——たゞ神のみぞ知ろしめすだ！　四人の男に小冊子（パンフレット）をすゝめたが一人は——これ神さまのこと書いた本かね？　と訊いて、結局うけ取らなかつたし、一人は、讀み書きを知らないけれども、子供に持つて歸つてやらうと言つた——表紙に繪が描

いてあつたもんだからね、いま一人は初めの間『なーる、なーる』と合ひ槌を打つてゐたが、だしぬけに思ひがけなく、しとに惡口を浴びせかけて、これもやはり受け取らなかつた。四人目のはたうとう受け取つて、一生懸命お禮を言つてたが、僕の話した事はからつきし分からなかつたらしい。おまけに一匹の犬はしとの足を咬むし、ひとりの女房は自分の家の闕ぎはから、火搔きをふり上げて脅かしながら、『ちよ、この囚人め！　莫斯科（モスクワ）のごろつきめ！手前のやうな奴はくたばつちまへ！』と言ふし、それからひとり無期休暇で歸つてゐる兵隊が、僕の後ろから、『やい、待て！一つ手前をぎうぎういふ目に合はしてやるから！』と嗾るぢやないか。しかも、人の金でたらふく飲んだ奴なんだよ。」
「それからどうして？」
「それからどうしたかつて？——僕は足にまめを拵へちやつたよ。一方の長靴が恐ろしく大きくつてね。いま僕は腹がへつてたまらないんだ——それにブートカのお蔭で、頭はがん〳〵いふし。」
「あんた澤山のんだの？」
「いや、ほんの少し——飲む眞似をしただけさ。しかし何しろ酒場へ五軒はいつたんだからね。だが、僕はあんな忌忌しいものに——ブートカなんてものに、とても我慢が出來ない。どうして百姓たちはあんなものを飲むのか、實に不可解だね！　いはゆる裸一貫になるために、ブートカを飲まなくちやならないんなら——まつ平ご免蒙るよ！」
「それぢや、誰もあんたを疑ぐる者はなかつたの？」

「誰もなかつた。たゞ一軒の酒場に、白い眼をした青ぶくれの亭主がゐたが、こいつが僕を胡散くさ
さうに見た、たつた一人の人間なんだ。この男が自分の女房に向いて、『お前あの赤つ毛の……やぶ睨
み野郎に氣をつけるだぞ。』と言ふのが聞こえるぢやないか。(僕は自分がやぶ睨みだといふことを、そ
の時まで夢にも知らなかつたよ)。『あれはこそ〳〵だよ。見ろ、あのひねくつた飲み方を!』と來やが
つた。この場合『ひねくつた』といふのはどういふ意味か――僕にも分からなかつたが、しかし恐ら
く褒める言葉ぢやなささうだ。まあ、ゴーゴリの謂はゆる下品(モーエートン)くらゐのところだらう――ね、覺え
てるだらう、『檢察官』の中にあるぢやないか。それとも僕がヲートカを卓の下へそつと滾さうとし
た、それを言つたのかも知れない。あゝ、骨が折れる、唯美派が現實生活に接觸するのは、實に骨が
折れるよ。」

「この次には、も少しうまく行つてよ。」とマリアンナはネジダーノフを慰めた。「でも、あなたがご
自分の初めての試みに對して、さういふユーモアに富んだ見方をなさるので、わたしも嬉しいわ……
だつて、本當はさうくさ〳〵してる譯でもないでせう?」

「いや、くさ〳〵なんかしやしない。面白かつたくらゐだよ。しかし今度この事をすつかり考へてみ
たら、きつといやあな、淋しい氣持ちがするだらう、それは確かに分つてゐる。」

「いゝえ、いゝえ! わたし考へさせやしないわ――自分のした事を話して聞かせてあげるわ。今に
すぐご飯が來るでせう。ときに、わたしはタチヤーナが野菜汁(シチイ)を煮た壺を……そりや上手に洗つて
よ。わたしすつかりあんたにお話しするわ……すつかり、一つ殘さず。」

彼女は言つた通り實行した。ネジダーノフはその話しを聞きながら、いつまでもいつまでも彼女の
顏を見つめてゐた……で、彼女は幾度か言葉を止めて、なぜそんなに人の顏を見るのかと訊ねたが……
彼は返事をしなかつた。

食後、彼女はシュビールハーゲンのものを讀んで聞かせると言ひだした。けれど、まだ一頁と讀ま
ないうちに、彼は急にぱつと飛び上つて――彼女の傍へ近よると、その足もとに身を投げた。彼女は
思はず立ち上がつた。彼は兩手でその膝を抱きしめながら――熱烈な、しどろもどろな、自暴自棄の
言葉を吐きはじめた! 「僕は死にたいんだ、聞もなく死ぬつてことが分かつてゐるんだ……」彼女は
身動きもしなければ、手向かひもしなかつた。男のもの狂はしい抱擁に、落ちつき拂つて身を任せな
がら、やはり落ちつき拂つて、ほとんど劬はるやうに、上からじつと見おろしてゐた。――彼女は、
自分の着物の襞の間でのた打ち廻る男の頭へ、靜かに兩手を載せた。けれど、この落ちつき拂つた態
度は彼にとつて、突きのけられたよりもつと激しい效果を現した。彼は立ち上つて、かう言つた。

「堪忍しておくれ、マリアンナ、昨日のことも今日のこともね。たゞ僕がきみの愛に價するやうにな
るまで、いつまでも待つてゐると、もう一度いつておくれ、――そして僕を許しておくれ。」

「わたし、あんたに誓つたんですもの……言葉をたがへるやうな事は決してありません。」

「いや、有り難う、お休み。」

ネジダーノフは出て行つた。マリアンナは自分の部屋の中へ引き籠つた。

三〇

二週間の後、ネジダーノフはやはり同じこの住まひで、一本の蠟燭が貧しくぼんやり點つてゐる。例の三脚机にとごみかゝつて、親友のシーリンに次のやうな手紙を書いてゐた。(もうとうに夜半は過ぎてゐた。長椅子から床の上へかけて、急いで脱ぎ棄てられた泥だらけの着物が、雜然と投げ出してあつた。小やみのないこまかい雨が、窓の硝子を打つて——幅のある暖かい風が、大きな溜め息のやうに屋根の上を走つてゐた。)

「親愛なるヴラヂーミル、僕はわざわざ住所を入れないで、君にこの手紙を呈する。そればかりか、この手紙は、わざわざ速い郵便局まで、使ひの者に持たしてやるのだ。なぜといつて、僕がこゝにゐるのは祕密だからだ。この祕密を打ち明けることは、つまり破滅を意味するのだ。しかも僕ひとりきりではない。たゞ僕がもう二週間ばかり、マリアンナと一しよに、大きな工場で暮らしてゐるといふ事だけ知れば、君はもうそれで澤山なのだ。僕ら二人は、君にこの前の手紙を書いた當日、シピャーギン家から逃げ出した。こゝへ僕らを匿まつてくれたのは、ある一人の友人だが、それを假りにヴシーリイと呼ぶこととしよう。それはここの主腦者で——この上ない立派な人物だ。僕らがこの工場に滯在するのはほんの一ときだ。ただ活動の時機が到來するまで、かうしてゐるつもりだ。もつとも、今までの狀況から判斷すると——その時期はいつ到來するやら、覺束ないものだ！　ヴラヂーミル、僕は實に、實に苦しい。まづ第一に言はなければならないが、僕はマリアンナと一しよに家出はしたも

のゝ——しかし僕ら二人は、今に至るまで——兄妹のやうな暮らしをしてゐるのだ。彼女は僕を愛してゐる……そして、もし僕自身……それを要求する權利があると自覺したら、僕のものになると言つた。

「ところが、ヴラヂーミル、僕はその權利が得られさうもないやうな氣がする！　彼女は僕を信じてゐる。僕の潔白さを信じてゐる——だから、僕は彼女を欺くわけに行かないのだ。僕は彼女以外に誰も愛したことがない。また今後も愛しさうにない——(それこそ、もう間違ひなく分かつてゐる！)しかし、それにしても！　永久に彼女の運命を自分に結びつけることが、どうして出來ようぞ！　生きた人間を屍に結びつけることが、どうして出來ようぞ！　いや、屍ぢやない——半分死にかゝつた人間なのだ！　一體そんなことをして、良心があると言へるだらうか？　君はこれは對して、熱烈な愛情さへあれば、良心なんか沈默してしまふ、とかう言ふだらう。ところが問題はそこなのだ——僕は屍だ。もし何なら、正直な、心がけのいゝ屍だと言つてもいゝ。後生だから、それはいつもの僕の誇張癖だ、などと呶鳴らないでくれ給へ……僕の言つてることはみんな本當なのだ！　本當なのだ！　マリアンナは非常に辛抱づよい性質で——今でも自分の信じきつてゐる活動に全心を呑み盡くされてゐる……ところが僕は！

「しかし——戀愛や、個人的幸福や——一切さう言つたやうなものはやめにしよう。これでもう二週間といふもの、僕は『民衆の中へ』はいつてゐるが、實際のところ、これ以上ばか〳〵しい事は、君も想僕が出來ないだらう。無論罪は僕にあるので、事業そのものゝ、ねぢやない。まあ、僕は汎スラ

ヴ主義者ぢやないつもりだから、民衆によつて――民衆との接觸によつて、自己治療をやるやうなことはしない。まるでフランネルの腹卷きや何ぞのやうに、自分の痛い腹へ民衆を當てたりなんかしない……僕は自分の方から民衆に働きかけたいのだ――しかし、どんなにして？　どんな風にそれを實行したらいゝのだ？　實地に當たつてみると、僕は民衆の中へはいつた時、たゞ彼らの內面へ潛入して、一生懸命に耳を傾けるばかりで、いざ自分で何か言はなければならないはめになると――まるで一進も三進も行かないのだ！　自分ながら、これぢや駄目だと感じるよ。まるで、大根役者が人の役をやつてゐるやうなものさ。おまけに、餘計な所へ良心の苛責や、スケプチズムが顏を出す――その上、かてゝ加へて、何だかやくざなユーモアを、自分自身に向けたくなるぢやないか……そんな事は實際びた錢一文の價値もありやしない！　思ひ出すのも胸が悪い――現に自分の着てゐるぼろ着物を見ても胸が悪い――全くヴシーリイの言ひ草ぢやないが、假裝舞踏會だ！　みんなの說によると、まづ初め民衆の言葉を習ひ覺えて、その風俗や性情を知らなけりやならないさうだが……そんな事は出たらめだ！　出たらめだ！　それより、自分の言ふことを、信じなくちやならない――さうすれば、自分のすきな事が言へる！　僕は、ある分裂派の豫言者の說教みたいなものを、幾度も聞いたことがあるが、その男の並べ立てる囈語といつたら、何が何だかわけが分かりやしない。教會語と、文章語と、俗語のごつた交ぜで――おまけに露西亞語ぢやなくて、妙な小露西亞語か何かなのだ……『汝』と言ふところを『なんづ』と言つたり、『石』を『えす』と言つたりして、全體に『い』を『え』に發音するのだ。そして『みたま降りたまえぬ……みたま降りたまえぬ……』と、まる

で山鷄の樣に、のべつ同じ事ばかり繰り返してゐるのだ。しかしその代はり、目はらん〳〵と燃え、しつかりした聲は陰に籠つて、兩の拳は握りしめられ――全體に鐵ででも出來てるやうに思はれる！　聽き手は一向わけが分からない癖に、神樣のやうに崇め奉つて、その後からついて行くのだ！

ところが、僕は口を開くが早いか、まるで自分が惡いことをして、赦しでも乞うてゐるやうな具合ひなんだ。いつそ分裂派教徒の仲間にでもはいらうか知らん――本當だよ。彼らの教義は別に大したものぢやない……しかし、どこから信仰を得よう、信仰を！　マリアンナは信仰を持つてゐる。朝から働き通して、タチヤーナと二人で急がしさうにしてゐる――こゝにさういふ女房が一人ゐるが、親切で利口な女だ。ついでに言つて置くが、僕らのことを、裸一貫になりたがつてゐると評して、僕らを裸一貫になつた人と呼んでゐる。――そこで、マリアンナはこの女房と一緒にまめ〳〵しく動きまはつて、一分間もじつとしてはゐない――まるで蟻だ！　手が赤くなつて、がさ〳〵して來たのを喜んでゐる。そして今にも必要が生じて、絞首臺へ上るのを待つてゐるのだ！　いや、絞首臺どころか！　彼女は靴さへ脫いで了はうとした事がある。いつだつたか跣で出かけて、跣で歸つて來たものだが、その後で長いあひだ、足を洗つてゐるらしい氣配がした。それに見れば、用心ぶかさうにそつと足を運んでゐる――馴れないものだから痛いのだ。しかし、その顏はいかにも嬉しさうに晴れ〴〵として、まるで太陽に照らされたやうな具合ひなのだ、寶ものでも搜し當てたやうな樣子なのだ。いや――マリアンナは偉い！　あゝ、僕は彼女に自分の感情なんか言ひだすと――第一、妙に氣恥づかしくなつて來る、まるで、他人のものに手をかけるやうな氣持ちなんだ。第二に、あの目つき……おゝ、

あの少しも抵抗の色のない、信頼しきつたやうな、しかも恐ろしい目つき……『勝手にわたしをお取りなさい……だけど、覺えてらつしやい！……それに、こんなことが何になるんでせう？　一體この世にはもつと立派な、もつと高尚な事がないんでせうか？』つまり言葉を換へて言へば、あの臭い長衣を着て、民衆の中へいらつしやい……と言つたやうな目つきなんだ。そこで、僕はその民衆の中へ出かけて行く……

「あゝ、そのとき僕は自分の神經質や、敏感さや、感受性や、乃至氣難かしさを、どんなに呪ふか分からない——こんなものはすべて貴族的な親父の遺傳なのだ！　僕の暮らすべき周圍に不適當な生理機關を與へて置きながら、いきなりこの人生へ僕を突き出すなんて、そんな權利が親父にあつたのだらうか？　唯美派をぬかるみの中へ突つ込むのも、それと同じ理窟だ！　何しろあの忌々しいヴートカ——いはゆる『青い酒』の匂ひを嗅いだだけで、むか〳〵して吐きさうになるやうな、さういふ民衆派なんだからね、デモクラートなんだからね！……

「たうとう大變な事まで言つて了つた。現在の父親を呪ふなんて！　デモクラートになつたのも僕自身の意志で、親父には何の關係もないのぢやないか。』

「あゝ、ヴラヂーミル、僕は苦しい、何だか厭な灰色の想念が、僕を訪れるやうになつた！　かう言へば、君は問ひ返すだらう——一體この二週間の間に何か一つでも、喜ばしい出來ごとにぶつ突からなかつたのか？　たとへ教育はなくつても、善良な生き〳〵した人間に出會はなかつたのか？　かう訊かれた時、何と返事をしたらいゝだらう？　僕は一度さういつた風なものに出會つたことがある

……それは非常に立流な人間で——元氣な氣持ちのいゝ若者だつた——しかし、どんなに僕が苦心しても、僕の小冊子も、僕自身も、この男には何の用もないのだ——それつきりなのだ！　この工場にパーゼルといふ男がゐる（これはヴシーリイの片腕で、非常にかしこい、非常に狡猾な男で、將來『首腦』となる男だ……この男のことはもう君に知らせた筈だね）、この男に一人友達がある。名をエリザールといふ百姓だが、やはり明晰な頭腦と、何ものにも束縛されない、自由不羈な魂の所有者なのだ。ところが、僕がこの男に接觸すると、——まるで二人の間には高い塀でも突つ立つたやうな具合ひなのだ！たゞもう『駄目だ！』といつたやうな顏つきをしてゐる。それから、またこんな男にもぶつ突かつた……もつとも、これは怒りつぽい方の仲間で、『もう旦那、くど〳〵曖昧な事を言はねえで、まつすぐに言つて聞かせなせえ——一體お前さんは、有りつたけの土地をよこしなさるのか、どうだね？』そこで僕は、『お前、何を言ふのだ、僕が旦那でたまるものかね？』と答へた（そのとき僕は『飛んでもないこつた！』と附け足したやうな氣がする）すると『もしお前がおれ達の仲間なら、お前なんかと話しをしたつて仕樣がありやしねえ。もうおれに構はねえでくれ、後生だから！』と言ふぢやないか。

「それから、またかういふ事がある。それは僕の觀察なんだが、あんまり素直に僕の話しを聞いて、早速小冊子でも受け取るやうな奴だつたら、それはつまり仕樣のないお先つ走りなんだ。時によると、いはゆる『教育』のある、辯口の達者な奴に出くわすこともあるが、こんなのは何か一つ、氣に入つた言葉を繰り返すより藝のない男なんだ。中に一人すつかり僕を惱ました奴がゐる。この男は何

でもかでも『産物』なんだ！　何を言つて聞かしても、先生『つまりさういふ産物なんだね！』と來る。くそ忌々しいつたらありやしない！　ついでに、もう一つの觀察を述べて置かう……君も覺えてゐるだらうが、いつだつたか――ずつと前に『無用人』論だの、ハムレット論だのが盛んだつたものぢやないか。ところがどうだらう、さういふ『無用人』が、いま百姓の間にも現れて來たんだよ！　無論、特別なニュアンスを帶びてゐて……おまけに大抵は結核性の體質なんだ。ちよつと面白いタイプで、われ〳〵の方へも喜んでやつて來るが、やはり昔のハムレットと同じで、實行には不適當なのだ。あゝ、一體どうしたらいゝのだらう？　秘密出版社でも作れと言ふのか？　しかし小冊子なら、そんな事をするまでもなく、『十字を切つて斧を取れ』と勸めるのや、單に『斧をとれ』と說いてゐるやうな本が、今でもいゝ加減多すぎるくらなだ。それでは、塡めもの澤山の農民小說でも作つたものだらうか？　おそらく印刷してはくれまい。それとも本當に思ひ切つて斧でも取るか？……しかし、誰に向かつて、誰と一しよに、何のために進むのだらう？　お上の兵隊にお上の鐵砲で、どゞんとやられるためなのだらうか？　それぢやまるで手の込んだ自殺みたいなものだ！　それよりいつそ、自分で自分を片づけた方がましだ。少くとも、いつどんな風に死ぬかといふ事が分かるし――それにどこへ穴を明けるか、自分で場所を選ぶことが出來るからね。

「全くのところ、今どこかで國民戰爭でも持ち上がつたら、僕は早速そこへ出かけて行きさうな氣がする。しかし、それはよその人間を自由にするためではない（自分の國の人民さへ自由てないのに、よその國民を自由にするなんて！）――たゞ自分を片づけるためなんだ……

「僕らをこゝへ匿まつてくれた友人のヴシーリイは、仕合はせな人間だ。彼は僕らの陣營に屬してゐるが――何だか妙に落ちついてゐるのだ。この男は決して急がない。これがもし他の人間なら、うんとやつゝけてやるのだけれど……この男に向いてはそれが出來ない。今にして思へば、本質的なものは信念にあるのではなくて、性格の中に存するのだ。ヴシーリイは側から突つ掛つて行けないやうな性格なのだ。そこで、彼は正しいといふ事になるのだ。彼はしじう僕たちと一しよに――マリアンナと一しよに話しをする。ところが、不思議なことには、僕も彼女を愛してゐるし、彼女も僕を愛してゐるが（この句を讀む時、君はにたりと笑ふだらう、それは分かつてゐるが――しかし全くのところ、さうなのだ！）けれども、僕と彼女とは殆ど話しがないのだ。しかも、ソローミンに對した時には、彼女は議論もすれば說明もする、そして先方の言ふことにも耳を傾けてゐる。僕は別に嫉妬なんかしやしない。それに彼もマリアンナをどこかへ移さうとしてゐる――少くとも彼女の方で、それを懇望してゐるのだ。けれど、二人を見てゐると、僕は苦い心持ちになる。しかし、君はどう思ふ？　もし僕が一言でも結婚のことを言ひ出せば、彼女はすぐに承諾して――ゾシマ長老が舞臺に現れ、『イザヤに喜びあれ』云々と、すべて型どほりに行はれる筈だ。たゞ、そんな事をしたところで、僕の氣持ちは輕くならない――狀況は少しも變化しないだらうからね……どんなにしても逃げ道はない！　ねえ、ヴラヂーミル、君も覺えてゐるだらう、以前しり合ひだつた呑んだくれの仕立て屋が、女房の讒訴をする度に言つた言葉だが、憂き世がおれを裁ち損なつたのだ！

「もつとも、こんな事は長く續きさうもないと思ふ。何かあるものが準備されてゐるやうな氣がす

る……

「一たい僕が自分で『着手』の必要を説明もすれば、それを要求したのではないか？　ところが、僕らは今かういふ風に『着手』しかけてゐるのだ。

「よくは覺えてゐないが、いまひとり僕の友人で、シビャーギン家の親戚に當たる、色の黑い男のことを君に知らせてやつたかしらん？　恐らくこの男なら、手もつけられないやうな大騒動を始めるだらう。」

「もうとつくにこの手紙はお了ひにしたかつたんだが――どうも困つたもので、幾ら我慢してみても――やはり詩をひねりたくなる。マリアンナには決して讀んで聞かせないんだ――あれは詩なんかに對して容赦しないからね。ところが君は……どうかすると褒めてくれることもある。それに何より有り難いのは、決して誰にも喋らないといふことだ。僕は露西亞全體に共通な一つの現象に、驚愕を感じたのだ……まあ、とにかく、その詩をご覽に入れよう。

眠り

わたしは久しい前から、生まれ故郷にゐなかつた……
けれども別に、目立つて變はつたこともない。
たゞ依然たる、死のやうな不氣味な沈滯、

屋根は落ち、壁は崩れた家や建てもの、
依然たる泥濘、悪臭、貧窮、そして憂愁！
ときに不遜な、ときに卑屈な、奴隷の眼ざし……
わが民衆は自由になつた。しかしその自由な腕が、
枯れた柳の枝のやうに、ぐたりと力なく垂れてゐる。
何もかも昔のまゝだ……たゞ一つ歐羅巴にも、
亞細亞にも、全世界にも、打ち勝つてゐることがある
……
悲しいかな！　わが愛すべき同胞は曾つて知らない、
恐ろしい眠りに落ちてゐるのだ！
あたりのものはすべて寢てゐる。村でも、町でも、
車の上でも、櫂の上でも、晝でも夜でも、或ひは立ちつ、或ひは坐しつ……
商人も官吏も眠り、歩哨の兵も眠つてゐる、
雪空の寒さの日にも――燒くやうな苦熱の日にも！
被告も眠り――法官も鼾をたてゝゐる、
百姓たちも死人のやうに眠つてゐる、刈り入れながら、耕しながら――眠つてゐる。
刈り束を打ちながら、彼等はやはり眠つてゐる。

父も眠れば母も眠り、家ぢうこぞつて眠つてゐる……
みんな寢てゐる！　打つものも寢、打たれるものも眠つてゐる！
たゞ皇帝の居酒屋だけは、かつてその目を塞がない。
五本の指で酒罎を握りしめつゝ、
額を極に、踵を高架索（コーカサス）につけながら、
醒めざる夢を貪つてゐる、あゝ、わが祖國、聖なる露西亞！

「どうか許してくれ、僕はこんな佗びしい手紙を君に送るつもりぢやなかつたのだ。せめて最後だけでも、君の笑ふやうなことで結びたかつたのだ（君はきつと無理なリズムに氣がついたらう。たとへば『貧窮――憂愁……』などといつた類ひだ！）この次に手紙を書くのはいつだらう？　それにまた書くをりがあるだらうか？　たとへ僕の身にどんな事が起こるとしても、君は僕を忘れないものと信じてゐる――

君の信實なる友　A・N

「P・S――さうだ、わが國の民衆は眠つてゐる……しかし僕は何だかこんな氣がする、もし何かが彼等の自を醒ましたら――その時は、僕らが考へてゐるのとは、まるで違つた結果が生じるだらう……」

最後の一行を書き終ると、ネジダーノフはペンを投げて――獨りごちた。「さあ、へぼ詩人、これか

ら早く寢てしまつて、こんな世迷ひごとを忘れるやうにしろ！」彼は牀の上へ身を横たへた……しかし、眠りは長いあひだ彼の瞼を避けたのである。

翌朝、マリアンナがタチヤーナのところへ行く途中、部屋を横ぎりながら、彼の目を醒ました。けれど彼が、やつと着換へを濟ますか濟まさないかに、彼女はもう引つ返して來た。その顏は歡喜と不安を現してゐた。彼女は興奮してゐるらしかつた。

「まあ、どうでせう、アリーシャ、T……郡ではもう始まつたつて話しよ――こゝからすぐなんだつて！」

「え？　何が始まつたの？　誰がそんなことを言つたの？」

「パーヱルなの。何でも百姓たちが一揆を起こしたんだつて――稅を納めないとか言つて、大勢あつまつてるんだとかいふことよ。」

「それは自分で聞いたの？」

「わたしタチヤーナから聞いたの。――あゝ、そこにパーヱルが來たわ。あの人に訊いてご覽なさい。」

パーヱルがはいつて來て、マリアンナの言つたことを裏書きした。

「T……郡で騷いでゐるつてことは――そりや本當ですよ！」頤髯を震はして輝かしい黑い目を細めながら、彼はかう言つた。「きつとセルゲイ・ミハイロヰッチの仕事でございませう。もうかれこれ五日も家にゐらつしやらないんですからね。」

ネジダーノフは帽子に手をかけた。
「どこへ行くの？」とマリアンナが訊ねた。
「つまり……そこへ行くのだ。」目を上げないで眉を寄せたまゝ、彼はかう答へた。「T……郡へ。」
「ぢや、わたしも一しよに行くわ。あんた連れてつてくれるでせう？　たゞ大きい方の頭巾を被る間だけ、待つて頂戴。」
「それは女のすることぢやないよ。」依然として下の方を見つめたまゝ、ネジダーノフは腹でも立てゝゐるやうに、陰鬱な調子で言つた。
「いゝえ……いゝえ！……あんたが出かけていらつしやるのはいゝ事だわ。でないと、マルケーロフがあんたのことを、臆病ものだと思ふかも知れないから……だから、わたしも一しよについて行くの。」
「僕は臆病ものぢやないよ。」やはり陰鬱な調子で、ネジダーノフはかう言つた。
「いえ、わたしはね、あの人がわたしたち二人を臆病もの扱ひにするだらうつて、さう言ふつもりだつたのよ。わたしも一しよに行くわ。」
マリアンナは頭巾を取りに自分の部屋へはいつた。パーゼルはそつと口の中で、まるで息でも吸ひ込むやうな具合ひに、「えーえ！」と言つて、すぐに姿を消してしまつた。ソローミンの所へ知らせに駈け出したのである。
マリアンナがまだ姿を現さないうちに早くもソローミンはネジダーノフの部屋へ入つて來た。ネジ

ダーノフは、窓硝子に手をあてゝ、その上へ額を載せたまゝ、外の方を向きながら立つてゐ。ソローミンはその肩に觸つた。彼は急にふりかへつた。髪をふり亂して、顏も洗つてゐないネジダーノフは、奇怪な氣うとい樣子をしてゐた。もつとも、ソローミンも最近少し變はつて來た。顏が黃ばんで長くなつて、上の齒が少しのぞいてゐた……彼も同樣に不安な表情をしてゐたが、それは彼の『バランスのとれた』魂が、不安を感じ得る範圍內のことであつた。
「マルケーロフはたうとう我慢が出來なくなつたと見える。」と彼は口をきつた。「これは碌なことにならないかも知れない。第一には、彼自身に取つて……それから、またほかの者に取つてもね。」
「僕どんな樣子か行つて見ようと思つて……」とネジダーノフが言ひだした。
「そして、わたしも。」闕の上に姿を現したマリアンナが、さう言ひ足した。
ソローミンはゆつくりその方へ振り向いた。
「あなたにはやめて貰ひたいですね、マリアンナ。――あなたは自分で自分を賣した上、われ〳〵一同まで賣すやうになるかも知れません――しかも、何の必要もなく、無意識にやるんですよ。まあ、ネジダーノフ君が行きたいと言ふなら、一人で出かけて行つて、少し匂ひでも嗅がしたらいゝでせう……それもほんの少しですがね！　ところで、あなたなんか何しに行くんです？」
「わたし、あの人に遲れたくないんですの。」
「あなたは足手まとひになるばかりです。」
マリアンナはちらとネジダーノフを見やつた。彼は石のやうな氣難かしい顏つきで、じつと立つて

ねた。

「でも、もし危險があつたら？」と彼女は訊いた。

ソローミンは微笑した。

「ご心配はいりません……もし危險があつたら、僕はあなたを出して上げますよ。」

マリアンナは無言のまゝ頭巾をとつて、腰をおろした。

その時ソローミンは、ネジダーノフに話しかけた。

「ぢや、君、本當にちよつと見て來ないか。事によつたら、噂が大仰なのかも知れない。——たゞお願ひだから、愼重にやつてくれ給へ。もつとも、案内のものはつけてやるがね。なるべく、早く歸つて來たまへ。君、約束してくれるね？　ネジダーノフ君？　約束してくれるね？」

「あゝ」

「いゝかね——きつとだね？」

「こゝにゐる者がみんな、マリアンナをはじめとして、誰も彼も君の命令に從ふならばだ。」

ネジダーノフは別れも告げずに、ぷいと廊下へ出てしまつた。バーゼルが闇の中からぬつと出て、鍔を打つた長靴裏をかた〳〵鳴らしながら、階段づたひに先へ立つて駈だした。彼がネジダーノフの案内を引き受けてゐたのである。

ソローミンはマリアンナの傍へ腰をおろした。

「あなたはネジダーノフ君が一番しまひに言つたことを聞きましたか？」

「えゝ、わたしがあの人よりも、あなたの言ふことを餘計きくので、それが忌々しいんでせう。それは全くなんですの。わたしあの人を愛してはゐますけれど、それでもあなたの方に從ひますわ。あの人はわたしに取つて大切な人です……だけど、あなたは近しい人なんですもの。」

ソローミンは用心ぶかく彼女の手を撫でた。

「今度の事件は……實に不愉快ですね。」たうとう彼はかう口をきつた。「もしマルケーロフがかゝり合つてゐたら——あの男はもう破滅です。」

マリアンナは身慄ひした。

「破滅ですつて？」

「さうです、——あの男は決して中途半端なこともしないし、それに他人の後ろに隱れるやうな眞似もしませんからね。」

「破滅！」とマリアンナはまた呟いた——と、涙がその頰を傳つて流れはじめた。「あゝヴシーリイ・フェドートゥイチ！　わたし、あの方が可哀さうですわ。でも、なぜあの方は最後の勝利を得られないんでせう？　なぜ必ず破滅しなければならないんですの？」

「ほかでもありません、マリアンナ、かういふ仕事では、いつも第一線に立つ人間が破滅するのです、たとへ成功した場合でも……ところが、あの男の企てたやうな仕事では單に第一線第二線の人達ばかりでなく、第十……第二十の戰線に立つ者まで破滅するでせうよ……」

「ぢや、わたし達も最後まで待ちおほすことが出來ないんでせうか？」

「あなたの考へてゐられる事ですか？　決して。われ〳〵は自分の目では――この生きた目では、それを見るわけに行きません。しかし精神的の目といふことになれば――それは別問題です。いま、すぐにでも眺めることが出來ますよ。これには何の制限もありませんからね。」

「ぢや、ソローミンさん、なぜあなたは……」

「何です？」

「なぜあなたは、こんな道を通つてゐらつしやるんですの？」

「ほかに道がないからです。といつて、つまり目的といふ點から見れば、僕もマルケーロフも一しよですが――たゞ道が違ふんです。」

「可哀さうなセルゲイ・ミハイロギッチ！」とマリアンナは萎れた聲で言つた。ソローミンはまた用心ぶかく彼女の手を撫でた。

「もう――澤山ですよ。まだ何一つはつきり分からないんですからね。パーゼルがどんな知らせを持つて來るか、それを見てみませうよ。――われ〳〵の……身分では、しつかりしてゐることが肝腎です。英國人は『死を語るな』と言ひますが、――い〻諺ですね。『災難が來たら門を開けろ！』といふ露西亞の俚諺よりい〻ですね。何も前から泣いて待つことはないですからね。」

ソローミンは椅子から身を持ち上げた。

「あのわたしに世話してやらうと仰しやつた勤め口は？」

不意にマリアンナがかう訊いた。――その頬にはまだ涙が光つてゐたが、目にはもう悲しみの色は

なかつた。

ソローミンはまた腰をおろした。

「一體あなたは、そんなに急いでこ〻を出たいんですか？」

「まあ、そんな事はありませんわ！　でも、わたし早く役にたつ人間になりたいと思つて。」

「マリアンナ、あなたはこ〻にゐても、ずゐぶん役に立ちますよ。僕らを捨て〻行かないで下さい、も少し待つて下さい。――あなた何ですか？」その時はいつて來たタチャーナに向かつて、ソローミンはかう訊いた（こ〻で彼がお前言葉をつかふ人間は、パーゼルばかりであつた――それも急にソローミンから『あなた』などと言ひ出されたら、パーゼルが恐ろしく悲觀するに違ひないからである。）

「え〻、何ですか妙な女の方が見えて、アレクセイ・ドミートリッチに會ひたいと言つてをられます。」兩手を擴げて笑ひを浮かべながら、タチャーナはかう答へた。「こ〻にそんな方はゐらつしやいません、まるでそんな方はゐらつしやいません、とわたしはさう申したんでございます。――そんな人は一たい誰だか、わたくしどもはてんで存じません、とさう言ひましたところ、その仁が……」

「一たい誰だね――その仁とは？」

「つまり、その女の人でございますよ。――その仁がいきなり自分の名前を、それこの紙に書いて、これをお見せしてくれ、さうすれば通して下さるに相違ない、もし本當にアレクセイ・ドミートリッチがお留守なら、少し待つても構はない、とかう言ふのでございますよ。」

紙きれには大きな字で、マシューリナと書いてあつた。

「お通しして下さい。」とソローミンは言つた。「マリアンナ、その人がとゝへはいつても、あなたは別にさし支へないでせうね？　やはりわれ〳〵の仲間だから。」

「えゝえ、ちつとも、どういたしまして。」

やがて間もなく、マシューリナの姿が閾の上に現れた——この物語りの第一章で見たのとすつかり同じ服裝で。

三一

「ネジダーノフさんは留守ですか？」と彼女は訊いた。それからソローミンが目に入ると、つか〳〵とその傍へよつて手をさし伸べた、「しばらくでした。ソローミンさん！」マリアンナの方はたゞ横目に睨んだばかりであつた。

「すぐに歸りますよ。」とソローミンは答へた。「然し、失禮ですが、誰からお聞きになりました……」

「マルケーロフさんから。——もつとも、この事はもう町でも……二三の人に知れてをりますが。」

「本當に？」

「えゝ、誰か喋つたんですわ。——それに人の噂では、ネジダーノフさんも變裝を見拔かれたさうです。」

「だから、假裝會の眞似は駄目だと言つたんだ！」とソローミンは呟いた。

「ご紹介しませう。」と彼は聲を高めて言ひ足した。「シネーツカヤさん、マシューリナさん！——お

坐なさい。」

マシューリナは輕くうなづいて腰をおろした。

「わたし、ネジダーノフさんに手紙をことづかつて來ました。それにソローミンさん、あなたには傳言を頼まれました。」

「どんな傳言を？　誰から？」

「あなたのご存じの人です……いかゞです、あなたの方は……準備は出來ましたか？」

「準備なんか、なんにも出來てやしません。」

マシューリナはその小さな目を、出來るだけ大きく見開いた。

「なんにも？」

「なんにも！」

「ぢや本當になんにも？」

「本當になんにも。」

「その通り言つていゝんですの？」

「その通り言つて下さい。」

マシューリナはちよつと考へて、衣嚢から卷き煙草をとり出した。

「火は——拜借できます？」

「さあ、燐寸（マッチ）があります。」

マシューリナは煙草をふかし始めた。

「あの人達は、もつと遣つたご返事を期待してゐました。」と彼女は口をきつた。「それに周圍の樣子も――あなたの所みたいぢやありません。もつとも、それはあなた自身の問題ですけど、わたしがこちらへ來たのは、長く逗留するためぢやありません。たゞちよつとネジダーノフさんに會つて手紙を渡すだけですの。」

「一體どこへお出かけですか？」

「こゝから遠い所です。」本當のことを言ふと、彼女はジュネーヴへ出發することになつてゐたのだけれど、それをソローミンに打ち明けたくなかつたのである。彼女はソローミンが餘り當てにならないやうな氣がした上、傍に『よその女』が坐つてゐたからである。獨逸語もろくすつぽ知らないマシューリナを、ジュネーヴへ派遣することにしたのは、そこで彼女の知らないある人に、葡萄の蔓を描いたボール紙のきれを半分と、二百七十九留の金を手渡しするためであつた。

「ときに、オストロドゥーモフはどこにゐます？　あなたも一しよですか？」

「いゝえ？　あの人はすぐこの近所で……ぐつ〳〵してゐます。でも、あの人は打てばすぐ響く人です。ピーメンは決して駄目になるやうな事はありませんから、どうかご心配のないやうに。」

「あなたはどうしてこゝへ來ました？」

「百姓馬車に乘つて……でなくつてどうします？　もう一ど燐寸（マッチ）を貸して下さい……」

ソローミンは燐寸に火をつけて渡した……

「ヴシーリイ・フェドートゥイチ！」かういふ誰かの聲が不意に戸の蔭から囁いた。「どうかおいでを願ひます！」

「誰です？　何用です？」

「どうぞおいでを願ひます。」外の聲は泌み入るやうな調子で、もう一ど執拗（しつこ）く繰り返した。「あちらへ、どこかよその職工が來て、何かぐづ〳〵言つてをりますが、パーヱル・エゴールイチがゐないものですから。」

ソローミンは詫びごとを言つて立ち上がると、部屋を出て行つた。

マシューリナはじつとマリアンナを見つめにかゝつた。そして、こちらで間が悪くなるくらゐ、じつと長いあひだ見つめてゐた。

「ご免なさい。」不意に例の荒い引つ千切つたやうな聲で、彼女はかう口をきつた。「わたしはがさつ者ですから、そんな風に……上手に言ひまはしが出來ないんですの――どうか怒らないで、もしお氣が向いたら、返事を聞かして下さいな。あなたはシビャーギン家を家出なすつた、あの娘さんですの？」

マリアンナは幾分面喰つたが、それでもやはり口をきつた。

「わたしです。」

「ネジダーノフさんと一しよに。」

「え〻、さうですわ。」

「どうぞ……お手を貸して下さい。後生だから、堪忍して下さいね。あの人が愛してゐる以上、あなたはつまりいゝ人なんですもの。」

マリアンナの手を握つた。

「あなたはネジダーノフをよくご存じですの？」

「えゝ、知つてゐます。彼得堡（ペテルブルク）でよくお目にかゝつてゐました。だからこそ、こんな事を言ふんですよ。セルゲイ・ミハイロギッチもよく話してをられました……」

「あゝ、マルケーロフ？　あの人に近頃お會ひになりまして？」

「えゝ、近頃、今度あの人は出かけました。」

「どちらへ？」

「命令された所へ。」

マリアンナは吐息をついた。

「あゝ、マシューリナさん、わたしあの人の身の上が心配ですわ。」

「第一わたしにさんづけなんかしないで下さい！　さういふ癖はよさなくちやいけません。第二に……あなたは『心配』だと言はれましたが、そんな事もやはりいけません、自分の身の上を心配しなければ――人のことも心配にならなくなつて來ます。自分のことを考へるのも、自分の身の上を心配するのも――一切やめなくちやなりません。たゞこれだけのことは言へるでせうね……これは今ふいとわたしの頭に浮かんだ事ですけれど、わたしなら――フョークラ・マシューリナならこそ、こんな事

も樂に言へるわけですわ。わたしは不器量ですからね。ところがあなたは……あなたは美人なんですもの。だからあなたに取つては、實行が一層むづかしい譯ですわね（マリアンナは目を伏せて顏をそむけた）セルゲイ・ミハイロギッチがわたしにさう言ひました……わたしがネジダーノフあての手紙を持つてゐることを、あの人は知つてゐたものですから……で、あの人がさう言ふんですの。『工場へ行くのはおよしなさい、その手紙を持つて行つちやいけない。向うの生活を掻き廻してしまふ。およしなさい！　二人はあすこで幸福に暮らしてゐるのだから……勝手にさして置いた方がいゝ！　邪魔をしちやいけない！』つてね。わたしだつて、邪魔をしたくはないんですけれど……この手紙をどうしたらいゝんでせう！」

「それはぜひ渡さなくちやいけません。」とマリアンナが引き取つた。「でも、あの人は何て親切なんでせう、あのセルゲイ・ミハイロギッチは！　一體あの人は殺されるんでせうか、ねえ、マシューリナ……それとも、西比利亞ゆきでせうか？」

「いゝぢやありませんか、西比利亞からだつて拔け出されない譯ぢやないし！　それに命を棄てるのが何でせう？　人生つてものは、人によつては甘くも見えますが、また人によつては苦くもありますからね。あの人の生活だつて――大して甘い方ぢやないでせう。」

マシューリナは再びじつと、探るやうな目つきで、マリアンナを見やつた。

「でも、本當にあなたは美人ですね。」たうとう彼女はかう叫んだ。「まるで小鳥ですわ！　ですが、もうアレクセイは歸つて來さうもありませんね……あなたにこの手紙をお渡ししませうか？　待つて

わたつて仕様がないから！」
「わたしが渡しますわ、どうぞご心配なく。」
マシューリナは片手で頬杖を突いて、いつまでもいつまでも默つてゐた。
「ねえ」と彼女は口をきつた……「失禮ですが……あなたは心からあの人を愛してゐらしつて？」
えゝ。」
マシューリナはその重さうな頭を一ふりした。
「さう、ところで、こんな事は訊くまでもありませんわね——あの人があなたを愛してるかどうかなんて。でも、わたしもう出かけませう。ひよつと遲れるといけないから。あなた、どうかさう言つて下さい。わたしがこゝへ來て……よろしく言つたつて。マシューリナが來たと言つて下さい。わたしの名前を忘れなさいませんね？　大丈夫ですね？　マシューリナですよ。ところで手紙は……えゝと、どこへ突つ込んだか知らん？……」
マシューリナは立ち上つて、そつぽを向くと、方々の衣嚢を探るやうな振をしながら、その間に、小さく疊んだ紙片を素早く口へ持つて行つて、ぐつと飲み込んで了つた。
「あゝ大變だ！　何て馬鹿なことをしたもんだらう！　まさか落としたんぢやないだらうね？　落としたに相違ない。あゝ、困つてことが出來た！　誰かに拾はれなけりやいゝが……ない、どこにもない。たうとうマルケーロフさんの望み通りになつた！」
「もつと捜してごらんなさい。」とマリアンナが囁いた。

マシューリナは片手をふつた。
「いゝえ、捜したつて仕様がありません！　落としたんですよ！」
マリアンナは彼女の傍へより添つた。
「ぢや、わたしに接吻して下さいな！」
マシューリナはいきなりマリアンナを抱いて、女とは思はれないやうな力で、自分の胸へしめつけた。
「ほかの人には決してこんな事をしやしなかつたでせう。」と彼女は籠つた聲で言つた。「良心に背いた事なんですもの……はじめてなんですの！　どうか、あの人に大事を取るやうに言つて下さい……それから、あなたもやはりね。ようございますか！　今にこゝの人がみんな酷いめに合ひますよ、それこそ酷いめに。二人とも出ておしまひなさい、今のうちに……ぢや、さやうなら！」と彼女は大きな聲できつぱりと言ひ添へた。「あゝ、それからもう一つ……あの人にさう言つて下さいな……いゝえ、なんにもいりません、なんにも。」
マシューリナは戸をぱたんと鳴らして、出て行つた。マリアンナはもの思ひに沈みながら、部屋のまん中に取り殘された。
「一體あれはどうした事だらう？」たうとう彼女は口に出してから言つた。「あの女はわたしよりもずつと、あの人を愛してゐるに相違ない！　それにあの女の謎はどういふ意味なのか知ら？　またソローミンさんも何だつて急に出て行つたきり、いつまでも歸つていらつしやらないんだらう？」

彼女は部屋の中をあちこち歩きだした。恐れと、忌々しさと、驚きの入り混じつた奇妙な感じが、彼女の全幅を領した。なぜ自分はネジダーノフと一しよに出かけなかつたんだらう？　ソローミンが止めたのだ……けれども、一體ソローミン自身はどこにゐるのだらう？――また周圍に起こつてゐるのは何事だらう？――マシューリナがあの危險な手紙を自分に渡さなかつたのは、無論ネジダーノフに對する同情のためだ……けれど、なぜあの女はあゝいふ背命の行爲を決行したのだらう？　自分の寛大さを示さうとしたのかしら？　一體どんな權利があつて？　またなぜ自分はこの行爲にあゝ感動したのだらう？　いや、本當に感動したのだらうか？　醜い女が若い男に興味をいだいてゐる……それは全くのところ、何も不思議なことではないではないか？　それになぜマシューリナは、ネジダーノフに對する自分の愛着が、義務觀念よりも強いと想像したのだらう？　事によつたら、自分はまるでそんな犠牲を望まなかつたかも知れない。一體あの手紙には、何が書いてあつたのだらう？　即刻、運動を開始せよといふ命令なのだらうか、それなら、却つていゝ事ではないか！

ところで、マルケーロフは？　あの人はいま危殆に陥つてゐる……それだのに自分たちは何をしてゐるのだらう？　マルケーロフは自分たち二人に容赦をして、自分たちに幸福の可能を與へようとしてゐる、二人を引き分けまいとしてゐる……これは一體なんだらう？　やはり寛大心だらうか……それとも輕蔑だらうか？

一たい自分たち二人が、あの忌はしい家を逃げ出したのは、たゞ一しよになつて、鳩のやうに睦ごとを交はすためだらうか？

かういふ風に、マリアンナはいろ〳〵と思ひめぐらした……すると、例の苛立たしい忌々しさが、次第に強く彼女の心に湧きかへつて來た。その上に、彼女は自尊心まで傷つけられたのである。なぜみんなが自分を打つちやつて行くのだらう――誰もかれもみんな！　あの『肥つちよ』の女は、自分のことを小鳥だと言つた、美人だと言つた……なぜいつそ人形と言はなかつたのだらう？　それにあのネジダーノフは、なぜ一人で行かないで、パーヱルと一しよに出掛けたんだらう？　まるで後見人が必要なのか何ぞのやうに！　それにいよ〳〵のところ、ソローミンはどういふ信念を持つてゐるのだらう？　あの人はてんで革命家ぢやない！　一體この運動全體に對する自分の態度が眞面目でないなどと、そんな事を考へる者があるだらうか？

かういふ想念が互に追つかけ合つたり、こんぐらかつたりしながら、マリアンナの熱した頭の中でぐる〳〵渦卷いてゐた。唇を堅く食ひしばり、腕を男のやうに組んで――彼女はたうとう窓の傍へ腰をおろした。そして椅子の背にも倚りかゝらないで、またもやじつと不動の姿勢を保つてゐた――その全體の樣子が、一分の隙もないやうに張りきつて、いつでもすぐ飛び上がりさうであつた。タチヤーナの所へ行つて働くのは――どうも氣がすゝまなかつた。彼女の欲することはたゞ一つ――待つことであつた！　で、彼女は待つた。執拗に、ほとんど毒々しい氣持ちで。――とき〳〵彼女は自分ながら、自分の氣持ちが奇妙な、わけの分からないものに感じられた……しかし、どうだつて構やしない！　一度などは、何もかもみんな嫉妬のせゐぢやないか、といふ考へさへ浮かんで來た。けれど、あのみじめなマシューリナの姿を思ひ出しただけで、彼女はたゞ肩を竦め、手を振るのみであつた…

……もつとも、本當にさうしたのではなく、さういふ身ぶりに相當する動きを、心の中に描いただけである。

マリアンナは長いこと待たなければならなかつた。たうとう階段を登つて來る二人の人間の、こつこつといふ靴音が耳に入つた。彼女は急に視線を戸口へそゝいだ……靴音は、次第に近くなつて來る。——と、扉が開いて——パーゼルに片腕を支へられたネジダーノフが、閾の上に姿を現した。彼は死人のやうに眞青な顏をしてゐた。帽子はなくなつて、おどろに振り亂した髪が濡れて額に垂れかかつてゐた。目は何ものを映す力もないやうに、あてどもなく前方を見つめてゐた。パーゼルは彼を抱きながら部屋を横ぎつて（ネジダーノフの足は、不正確に、弱々しく動いてゐた）彼を長椅子の上に坐らした。

マリアンナは思はずその場からはね起きた。

「これは一體どうしたんです？　何事です？　病氣でもしたんですか？」

けれどもネジダーノフを坐らしてゐたパーゼルが、半ば身をねぢ向けて、肩ごしに微笑を見せながらかう答へた。

「ご心配なさいますな、すぐなほつ了ひますよ……これはたゞ馴れないせゐなので。」

「一體、どうしたんですの？」とマリアンナは執拗く訊き返した。

「ちつとばかり醉ひなさつたんで、——空き腹に飲みなさつたもんだから、それでまあ、その！」

マリアンナはネジダーノフの方に身を屈めた。後は長椅子の上へ斜かひに半ば身を横たへて、首を

ぐつたりと胸の上へ垂れ、目をどろんとさしてゐた……口からはブートカの匂ひがぷん〳〵してゐた。彼は醉ひつぶれてゐたのである。

「アレクセイ！」かういふ聲が思はず彼女の口を洩れた。

彼はやつとのことで重い瞼をあげて、につこり笑はうとした。

「あゝ！　マリアンナか！」と彼は呂律のまはらぬ舌で言ひだした。「あんたは、いつも口癖のやうに、はーはだか……はだか一貫になつた人間といつてたが——さあ、今こそ僕は本當の裸一貫だ。なぜつて、露西亞の民衆はいつでも醉つぱらつてゐるから……つまり……」

彼は口を噤んだ。それから何やら譯の分からぬ事を、むにや〳〵言つたかと思ふと、やがて目をつぶつて——寢てしまつた。パーゼルはまめ〳〵しく彼を長椅子の上に寢かした。

「ご心配なさいますな、マリアンナ・ギケンヂェヴナ。」と彼は繰り返した。「ものの二時間もお休みになつたら、しやんとなつてお起きになりますよ。」

マリアンナは、どうしてこんな事になつたのかと訊かうと思つたが、いろんな事を訊けば、パーゼルを引き止めることになる。彼女はたゞ一人になりたかつたのである……といふよりも、この上長くパーゼルに、彼の醜態を見られたくなかつたのである。彼女は傍を離れて、窓ぎはへ行つた——すると、パーゼルはすぐに一切を悟つて、長上衣（カフタン）の裾で丁寧にネジダーノフの足を包み、頭の下に枕を當てがつた後、もう一度「何でもありませんよ！」と言つて、爪先だちで部屋を出た。

マリアンナは邊りを見廻した。——ネジダーノフの頭は重々しく枕の中に沈んで、その青白い顏に

は、まるで危篤な病人のやうに、凝結したやうな緊張感が覆はれた。
『どうしてこんな事になつたのだらう？』と彼女は考へた。

三二

こんな事になつたのは、次のやうな譯である。

パーヱルと一しよに百姓馬車に乘りながら、ネジダーノフは突然おそろしく興奮した心持ちになつた。そして馬車が工場の庭を出て、T……郡さして街道を走りはじめるが早いか――彼は通りがかりの百姓たちに聲をかけて、一人一人呼びとめながら、簡單な辻褄の合はない話しを始めたのである。

「何だつて君たちは寢てゐるんだ？　起きたまへ！　もう時が來た！――稅なんかふつ飛ばしちまへ！　地主もふつ飛ばしちまへ！」百姓達は、びつくりして、その顏を見る者もあれば、かういふ絶叫には何の注意も拂はず、さつさと通り拔けてしまふ者もあつた。みんな彼を醉つぱらひだと思つたのである。一人の百姓などは家へ歸ると、「途中で一人の佛蘭西人に出あつただ――何だか知んねえが、わけの分かんねえ事を、ぺら〳〵喋くつてただよ。」と話したくらゐである。ネジダーノフは、自分のしてゐる事がお話しにならないほど馬鹿げてゐ、まるで無意味だと悟るだけの分別は持つてゐたが、やがて次第々々に逆上して行つて、分別のあることも馬鹿げたことも、いつさい區別がつかないやうになつて了つた。パーヱルは、一生懸命に彼を落ちつかせようと思つて、そんなことをしてはいけない、飛んでもないことだ、今にもうT……郡ざかひの女泉（パンピイクリユチイ）へ着くから、そこで樣子を探ればい

い、と言つて聞かせた……けれど、ネジダーノフは承知しなかつた……それと同時に、彼の顏は何となく悲しげになつて、殆んど絶望的の表情さへ浮かべてゐた。二人を曳いてゐる馬は、首筋の逞ましい、鬣（たてがみ）をきちんと刈り込んだ、まるまるした感じのする、おそろしく元氣のいゝ馬で、丈夫さうな細い足をせか〳〵と運びながら、まるで重大な事件の起こつた所へ、必要な人物を乘せてでも行くやうに、絶えず手綱をしやくるのであつた。女泉まで行きつかないうちに、ネジダーノフはふと氣がついた――街道ちかく開けはなしになつた穀物倉の前に、八人ばかりの百姓が集まつてゐる。彼はいきなり車から飛びおりて、その傍へ駈け寄つた。そして、五分間ばかり、兩手をふり廻はしたり、ときどき途轍もない大聲を出したりしながら、せき込んだ調子で話し續けた。『自由のために！　前へ進め！　自分の胸で押して行け！』などといふ言葉が、數限りなく發しられた不明瞭な言葉の間から、しや嗄れてはゐるけれど、高い調子で際だつて聞こえた。組合の共有物で、したがつてからつぽの倉を、たとへ見せかけだけでも、もう一ど一杯にする爲に、こゝへ相談に集まつて來た百姓たちは、じつとネジダーノフに目をそゝいで、ずゐぶん熱心にその演說を聞いてゐるらしい樣子であつたが――しかし殆ど何一つ合點が行かなかつたに違ひない。その證據には、彼が最後に「自由だ！」と叫んで、百姓たちの傍から飛び出したとき、中でも一ぱん目のきくらしい男が、考へ深さうに頭をふつて、「何てやかましい人だべえ」と言つた。すると、いま一人の百姓が、「きつと、どこかの所長さまに違えねえ！」と口を入れた。これに對して目のきく百姓は、「知れたこんだよ――でなくつて、あゝ聲を嗄らして、喋くる譯がねえだ。」「今度こそ、おら達の金を拂つてくれるだべえ！」

當のネジダーノフは百姓馬車に上がつて、パーヱルの傍へ腰をおろしながら、心の中で考へた。『あ！　實に馬鹿げてる！　しかし、民衆に暴動を起こさせるにはどうしたらいゝか、そんな事は僕らの仲間で誰ひとり知つてるものはありやしない――事によつたら、あれでいゝのかも知れない？　そんな事を詮索してゐる暇はない！　やつゝけろ！　心の中がちく〳〵痛む？　なに、うつちやつて置け！』

馬車は村の通りへ乘り込んだ。とある居酒屋の前にあたる道のまん中に、かなり大勢の人だかりがしてゐた。パーヱルが止めようとするのをふり放して、ネジダーノフはいち早く毬のやうに馬車からとびおりると、甲高い聲で「諸君！」と叫びながら、群集の中へ割り込んだ……群衆は少しばかり道を開いた。で、ネジダーノフは誰の顏も見ずにまるで腹をたてて泣いてゐるやうな聲で、またもや宣傳をはじめた。しかし、今度は倉の前と違つて、まるで意外な結果が現れた。短い油じみた半外套を着て、深い長靴を穿き、羊皮の帽子を被り、髯こそないけれど獰猛な顏つきをした、圖體の大きい一人の若い者が、つか〳〵とネジダーノフの傍へよつて、力いつぱいその肩を擲りつけた。

「えゝだよ！　若え衆！」彼は幅のある聲でかう喚いた。

「まあ、待つてくんろ！　乾いた匙ぢゃ口が痛えつてことを知んねえだか？　こつちさ來う！　向うの方がずつと話しがしえゝだ。」かう言つて彼は、ネジダーノフを居酒屋へひつぱり込んだ。殘りの群衆もその後からどや〳〵と押しかけた。

「ミヘーイッチ、」と若い者は呶鳴つた。「さあ――十哥（コペイカ）がとこ注いでくんろ！　おらのすきなあの

盃だ！　友達さ振るまつでやるだによ！　一てえどこの何者で、どういふ種から生まれただか――そんな事あおら知んねえだが、地主共を小氣味よくやつつけてくれるだ――さあ、飲め。」外側が汗をかいたやうに濡れるほど、なみ〳〵注いだ重い盃を突きつけながら、彼は、ネジダーノフに向かつてかう言つた。「飲め、お前が本當におら達のことを心配してくれるだら、飲んで見せるがえゝだ！」

「さあ、飲んだ、飲んだ！」と一同は口々に騷いだ。ネジダーノフは洋盃（コップ）をとつて（彼はまるで惡氣（わるき）に醉はされたやうであつた）――「諸君の健康を祝す！」と叫びながら、ぐつと一息に飲みほした。

「うーふ！」彼はまるで彈丸雨注、銃劍林立の中に飛び込むやうな、自暴自棄の勇氣をふるつて飲んだのである……けれど、その後はどうなつたか――何やら背中から足へかけて、彼をどやしつけたやうな氣がした。咽喉も、胸も、胃の腑も、燒け爛れたやうな氣がした。涙が目に滲み出した……嫌惡の痙攣が全身を走つた――彼はやつとの事でそれを押し鎭めた……たゞ何とかしてその苦しみを紛らしたいばつかりに、ありたけの聲を出して喚いたのである。薄暗い居酒屋の中は、急にむし暑く息苦しく、ねと〳〵して來た。まるで恐ろしい人だかりでもしてゐるやうであつた！　ネヂダーノフは話しだした。長いあひだ一生懸命に喋つた。もの凄い勢で猛烈と叫んだり、まるで廣い板のやうな感じのする掌を叩いたり、誰かのぬる〳〵する頰を接吻したりした……半外套を着た圖體の大きな若い者も、やはり彼と接吻したが――その時あぶなく肋骨をへし折りさうになつた。けれどこの男は、何かごろつき見たいな者だといふことが分かつた。

「咽喉笛を引き裂えてくれるだ！」と彼は喰つた。「おら達の仲間に惡いことをする奴あ、誰でもか

れでも咽喉笛を引き裂えてくれるぞ！――それでなけりゃ――頭の鉢を叩き壞して……ぎゆうといふ目に逢はしてくれるぞ！　一體おらを誰だと思ふ？　おらあ肉屋をしてゐただから、さういふ仕事ならようく知つてるだぞ！」かう言ひながら、彼は雀斑だらけの、大きな拳をつき出した……すると、また「さあ、」と誰かが呶鳴りだした。「飲め！」ネジダーノフはまたこの厭はしい毒盃を飲みほした。しかし、この一度目の盃は實に恐ろしいものであつた！　彼はまるで鈍い鈎針で五臟六腑を搔きまはされるやうな氣がした　頭がぐら〳〵して――青い輪がちら〳〵しはじめた。がん〳〵と騷々しいほど耳鳴りがする……おゝ、何といふ恐ろしいことだ！……三杯目の洋盃がつき出された……一たい彼はそれを飲みほしたのだらうか？　どす赤い鼻や、埃だらけの顏や、日燒けのした頸や、一面に網目のやうに皺のよつた襟筋が、彼のまはりでうよ〳〵してゐる。――ごつ〳〵した手が彼を摑んだ。「さあ、精を出した！」と狂暴な聲が喚く。「さあ、話しをしろ！　一昨日も丁度、お前みてえなよそ者が、偉さうな講釋を並べたてただよ。――さあ、やれ、この野郎！……」

大地はネジダーノフの足もとで搖ぎはじめた。彼は自分の聲さへ、どこか外の方から聞こえて來るやうな氣がした……これが死なのではなからうか？

と、不意に……すが〳〵しい空氣の接觸を、顏に感じた――もう混雜も、赤い醉ひどれ面も、酒の匂ひも、羊皮外套やタールや革の匂ひも、一切なくなつてゐた……さうして、彼はまたパーヱルと並んで、百姓馬車の上に坐つてゐる。彼は初めちよつと身をもがいて、「どこへ行くのだ？　止めろ！僕はまだ、何一つあの連中に言ふ暇がなかつた――よく嚙み碎いてやらなくちやいけないんだ……

…」と叫んだが、やがてかう言ひ足した。「だが、こん畜生、狸野郎、お前は一體どういふ了簡なんだ？」パーヱルはそれに答へて、「そりやあ旦那衆といふものがなくなつて、土地がみんなわつし達のものになつたら結構ですよ――それより上のことはありますまい――しかし、まださういふお布令が出ないのでね。」と言ひながら、そつと馬を後ろへ向ける眞似をしたが――急に手綱でその背中をひつぱたいて、居酒屋の喧々囂々の騷ぎを後ろに聞きながら……まつしぐらに工場を指して走りだした。

ネジダーノフはうと〳〵しながら――馬車に搖られてゐた。風は快くその顏を撫でて、厭な想念の湧き起こる餘裕を與へなかつた。

たゞ、自分の言ひたいだけの事を、すつかり言はして貰へなかつたのが忌々しかつた……けれども、また風が彼の熱した顏を撫でてくれる。

それから――ちよつと一瞬間マリアンナの顏が浮かんで――ちよつと一瞬間やき附くやうな屈辱感が湧き出したが――やがて眠りが襲つて來た、深い死人のやうな眠り……

これらはすべて、パーヱルが後でソローミンに話したことである。自分がネジダーノフの暴飲を止めなかつたことさへ、彼は別に隱さうとしなかつた……さうしなければ、とても彼を居酒屋からつれ出すことが出來なかつたに相違ない。群衆が承知しさうもなかつたからである。

「ところで、あの人がへゞれけになつて了つたとき、わたしはお辭儀をして賴みましたよ。『皆の衆、どうかこの若い衆を歸しておくんなさい、ごらんの通りごく年が若いんだから……』とかう言つたところ、やつと放してくれましたよ。だけれど、罰金に五十哥（コペイカ）よこせつて言ふものだから仕方がな

い、くれてやりましたよ。」

「それはよくした。」とソローミンは褒めた。

ネジダーノフは眠つてゐた。マリアンナは窓の傍に坐つて、前栽を眺めてゐた。——と、奇妙なことには——ネジダーノフとパーゼルの歸つて來るまで、ずつと彼女を興奮さしてゐた。厭な、ほとんど毒々しいくらゐな感情や想念が、一どきに消えてしまつた。當のネジダーノフも決して厭な、忌はしい人間とは思はれなかつた。たゞ彼女は彼を憐れんでゐたのである。彼が蕩兒でもなければ醉漢でもないのは、彼女もよく承知してゐた——で、彼女はネジダーノフが目を醒ました時、彼に向かつて言ふべき言葉を考へてゐた。あまり極り惡がつたり悔んだりしないやうに、何か親しい言葉をかけてやらう、と彼女は考へた。『どうかしてあの人が自分の口から、さういふ災難の降りかゝつた樣子を話すやうに、うまくし向けなくちやならない。』

彼女は別に興奮しなかつたが、しかし、何となく佗びしかつた……遣る瀬ないほど佗しかつた。彼女は自分の憧れてゐる本當の世界から、かすかな匂ひを吹き送られたやうな氣持がしたのである……それ故、かうした粗野で暗黑な現實に、戰慄を感じないではゐられなかつた。一たい自分は何といふ魔神の生贄にならうとしてゐるのだらう？

しかし——そんなことはない！　そんな事のあるべき筈がない！　これはたゞちよつとした偶然の出來ごとで、今に間もなく痕かたもなく濟んでしまふのだ。これはほんの瞬間的な印象で、彼女があれほど驚愕を感じたのは、たゞ餘り不意だつたからに過ぎない。彼女は立ち上がつてネジダーノフの

寢てゐる長椅子に近よりながら、寢てゐる間さへ惱ましげに顰めた、その青白い額を手巾で拭いて、髮の毛を後ろへ拂ひのけてやつた……

彼女はまた可哀さうになつた。それは丁度、母親が病兒を憫れむのと、同じやうな氣持であつた。——けれど、彼を見つめてゐるのは些か不氣味な感じがした。——彼女は戸を開けたまゝにして、そつと自分の部屋へ歸つた。

彼女は何の仕事も手につかなかつたので、また腰をおろした——と、再びさま〴〵な物思ひが襲つて來た。時がじり〳〵と溶けて行つて、一分々々と消えて行くのが感じられた。しかも、それを感じるのが、むしろ快いほどであつた——心臟はどき〳〵と鼓動してゐる——彼女はまた期待するやうな氣持ちになつた。

一體ソローミンはどこへ行つたのだらう？

戸がぎいと軋んで——タチヤーナが、部屋へはいつて來た。

「何かご用？」ほとんど忌々しさうな調子で、マリアンナはかう訊ねた。

「マリアンナ・ギケンチェヴナ、」とタチヤーナは小聲で言ひだした。「本當にあなた、くよ〳〵なさんなよ！　なに世間ではありふれた事でございますよ。——まだしも有り難いことには……」

「わたし、ちつとも、くよ〳〵してやしないわ、タチヤーナ・オシッポヴナ。」とマリアンナは遮つた。「アレクセイ・ドミートリッチは、少し加減が惡いだけで、なんの大したことですか！……」

「まあ、それなら結構でございます！　ところが、わたしはね、一向マリアンナ・ギケンチェヴナの